

911.123-Ts39イウ
1200500755227



始



9/1/23
Ts 391



次田潤著

修改萬葉集新講 上卷



成美堂書店發行

更大備酒祿家持贈坂上大膳等十五名

夢うゝ相志者有家里覺る掻探友手二
毛不所弱音

ゆのふあははとろくかりて重たてんて
うゝうゝうゝうゝうゝうゝうゝうゝ

一重可味之持結帯字尚二重可結帯
身者成

ひとん乃みんてあまむむれんて
みんあゆめらわつてふわん

吾妻系子引乃石之七許願二持繫
母袖多法伏



帝室御物 桂本萬葉集

(複製刊本に據る)

平安時代中期の筆寫にして現存せる萬葉集の古寫本中最古のものなり。筆者未詳。料紙は種々の色の繼色紙に金銀泥を以て花鳥草木を描きたるものにて縦八寸八分の卷子本なり。(下巻附録の解説参照圖版に示したる和歌は上巻六四五頁及び六四六頁にあり。)

藤原宮
大和國吉野郡

藤原宮之役民作歌

隅知之吾大王高照日乃皇子甚妙乃藤原氏
宇倍尔喰園乎賣之賜半登都家者焉所知
武亦祢長栢可念奈戸二天地毛縁而有許曾
盤盤走淡海乃園之衣手能田上山之真佐木
昔檜乃婦手乎物乃希能以十氏河尔玉藤成
浮依流礼其乎取登穀和久御氏毛家忌身毛

高松宮家御藏 元暦校本萬葉集

(複製刊本に據る)

平安時代末期元暦元年校合の寫本にして、縦八寸二分横五寸七分の粘葉本なり。筆者未詳。紫と藍の飛雲形模様のある鳥の子紙に書寫したるものにて、赫及び薄朱の書入あり。(下卷附録の解説参照圖版に示したる和歌は上卷一二六頁にあり。)

短歌二首

久堅く天所知流君故今日月毛不知意涙鴉
ひたひたのあはれしきりおいきらぬるり
むすしりしむすしむすし
植女乃池之堤之隱宿乃古方戸不知舎人衣感
うぢむすのやけはつゝみれうくくれぬぬ
ゆくはしむすしむすしむすし

680-74

緒言

舊著『萬葉集新講』を公にしたのは大正十年六月であつて、關東大震災に其の紙型を失つた際に、修正を加へて改訂版を刊行したのは大正十四年三月である。舊著は今日では既に時勢に後れた不完全なものであり、而も其の内容は現在自分が講述してゐる所と大いに異なつてゐるから、今回全く新たに稿を起して此の書を著作したのである。従つて書名は當然改めるべきであるが、他の拙著の題號は「新講」の名によつて統一せられてゐるから、姑く舊名を襲ひ只「改修」の二字を冠らせる事にした。

舊著を刊行した頃、萬葉研究は猶未だ振はなかつたが、其の後間もなく興隆し、最近では研究家が各地に現れ、月々夥しい著書論文などが公にせられて、殆ど空前の盛況を呈するに至つた。最近に於ける最も著しい傾向は、研究の範圍が著しく擴張せられ、而も確固たる基礎の上に立つて、極めて精密な考察が行はれて

緒言

帝室御物 金澤本萬葉集

(複製刊本に據る)

平安時代末期元永頃の書寫に係る古寫本。筆者未詳。料紙は切箔を散らしたる唐紙(他に唐紙模様のものあり)にして縦七寸一分横四寸四分の粘葉本なり。(下卷附録の解説参照)圖版に示したる和歌は上卷三七〇頁及び三七二頁にあり。

ある事であつて、研究の態度並に方法は面目を一新した観がある。斯かる趨勢を來したのは、近年勃興した國語國文學の新研究に刺戟せられたのであるが、直接には『校本萬葉集』『萬葉集總索引』を始めとして、各種の研究資料が續々刊行せられたのと、古代國語に關する詳密な研究が遂げられたのに因る所が多いやうである。

本書は萬葉研究に志す人々や萬葉歌風の愛好者の爲に、集中の傑出した歌や種々の意味で注意すべき作品を選んで評釋を施したものである。尤も現代の萬葉研究の趨勢に鑑みて、語釋批評共に舊著よりは遙かに精細に講述し、且稍専門的な説明考證評論などを試みた。今講義の方針を項目に分つて擧げれば左の通りである。

- 一 本文は流布本(寛永版本)を底本とし、『校本萬葉集』其の他に據つて諸本との異同を檢べて、明かに誤脱と認むべきものは原據を擧げて訂正した。
- 一 訓は上代國語の語法音韻假名遣用字法等の知識に基づいて、古寫本や諸

欠

欠

作歌一首……………五九
 又家持見砌上覆麥花作歌一首……………五二
 悲緒未息更作歌三首……………五三
 天平十六年甲申春二月安積皇子薨之時內舍人
 大伴宿禰家持作歌一首……………五五

萬葉集卷第四

相聞

額田王思近江天皇作歌一首……………五六
 柿本朝臣人麻呂歌四首……………五九
 恭禮越往伊勢國時留妻作歌一首……………五三
 柿本朝臣人麻呂歌三首……………五四
 阿倍女郎歌二首……………五七
 阿倍女郎歌一首……………五九
 藤原宇合大夫遷任上京時常陸娘子贈歌一首……………六〇
 大伴女郎和歌三首……………六一

目次

大伴宿奈麻呂宿禰歌一首……………六四
 太宰帥大伴卿贈大貳丹比縣守卿遷任民部卿歌
 一首……………六五
 土師宿禰水通從筑紫上京海路作歌一首……………六六
 太宰大監大伴宿禰百代戀歌一首……………六八
 太宰帥大伴卿被任大納言臨入京之時府官人等
 餞卿于筑前國蘆城驛家歌一首……………六九
 太宰帥大伴卿上京之後滿誓沙彌贈卿歌一首……………六一
 大納言大伴卿和歌二首……………六一
 笠女郎贈大伴宿禰家持歌十首……………六四
 湯原王贈娘子歌一首……………六五
 大伴坂上郎女歌二首……………六六
 大伴坂上郎女歌一首……………六六
 中臣女郎贈大伴宿禰家持歌一首……………六九
 大伴坂上郎女歌三首……………七〇
 廣河女王歌二首……………七二

七

豐前國娘子大宅女歌一首…………… 六五
 安都屏娘子歌一首…………… 六六
 丹波大女娘子歌二首…………… 六七
 大伴宿禰家持贈娘子歌一首…………… 六八
 大伴宿禰家持贈坂上家大嬢歌一首…………… 六九
 大伴坂上大嬢贈大伴宿禰家持歌一首…………… 七〇
 同坂上大嬢贈家持歌一首…………… 七一
 又家持和坂上大嬢歌一首…………… 七二
 更大伴宿禰家持贈坂上大嬢歌五首…………… 七三
 在久邇京思留寧樂舊京坂上大嬢大伴宿禰家持
 作歌一首…………… 七四
 太宰帥大伴卿報凶問歌一首…………… 七五
 筑前守山上臣憶良挽歌一首并短歌…………… 七六

萬葉集卷第五

雜歌

山上臣憶良令反感情歌一首并短歌…………… 六五
 山上臣憶良思子等歌一首并短歌…………… 六六
 山上臣憶良哀世間難佳歌一首并短歌…………… 六七
 太宰帥大伴卿宅宴梅花歌七首并序…………… 六八
 後追和梅花歌一首…………… 六九
 遊松浦河贈答歌二首…………… 七〇
 蓬客等更贈歌一首…………… 七一
 娘等更報歌一首…………… 七二
 詠領巾磨嶺歌一首…………… 七三
 最々後人追和歌一首…………… 七四
 聊布私懷歌二首…………… 七五
 貧窮問答歌一首并短歌…………… 七六
 山上臣憶良好去好來歌一首并短歌…………… 七七
 山上臣憶良重病思兒等歌一首并短歌…………… 七八
 戀男子名古日歌一首并短歌…………… 七九

萬葉集卷第六

雜歌

養老七年癸亥夏五月幸于芳野離宮時笠朝臣金
 村作歌一首并短歌…………… 七〇
 神龜元年甲子冬十月幸于紀伊國時山部宿禰赤
 人作歌一首并短歌…………… 七一
 二年乙丑夏五月幸于芳野離宮時笠朝臣金村作
 歌一首并短歌…………… 七二
 山部宿禰赤人作歌二首并短歌…………… 七三
 山部宿禰赤人作歌一首并短歌…………… 七四
 過辛荷鳥時山部宿禰赤人作歌一首并短歌…………… 七五
 冬十一月(○神龜五年)太宰官人等奉拜香椎唐
 時帥大伴卿作歌一首…………… 七六
 大貳小野朝臣老作歌一首…………… 七七
 冬十二月(○天平二年)太宰帥大伴卿上京之時
 目次…………… 七八

娘子作歌二首…………… 七二
 大納言大伴卿卽和歌一首…………… 七三
 四年壬申藤原宇合卿遣西海道節度使時高橋連
 蟲麻呂作歌一首并短歌…………… 七四
 天皇賜酒節度使卿等御歌一首并短歌…………… 七五
 山上臣憶良沈痾之時歌一首…………… 七六
 大伴坂上郎女與姪大伴宿禰家持歌一首…………… 七七
 安倍朝臣蟲麻呂月歌一首…………… 七八
 大伴坂上郎女月歌二首…………… 七九
 湯原王月歌一首…………… 八〇
 市原王宴禱父安貴王歌一首…………… 八一
 大伴宿禰家持初月歌一首…………… 八二
 六年甲戌海犬養宿禰崗麻呂應詔歌一首…………… 八三
 春三月幸于難波宮時歌二首…………… 八四
 船王歌一首…………… 八五
 山部宿禰赤人歌一首…………… 八六

按作村主益人歌一首……………七六
 市原王悲獨子歌一首……………七七
 冬十一月(〇八年)葛城王等賜橋姓之時御製歌一首……………七八
 十年戊寅元興寺之僧自嘆歌一首……………八〇
 同月(〇十六年正月)十一日登活道岡集一株松……………八〇

下飲歌一首……………八一
 傷惜寧樂京師荒墟作歌一首 作主未詳……………八三
 悲寧樂故鄉作歌一首并短歌……………八四
 讚久邇新京歌一首并短歌……………八四
 難波宮作歌一首并短歌……………八五
 過敏馬浦時作歌一首并短歌……………八四

上卷圖版系圖目次

| | | | | | |
|--------------------|----|-------------------|-----|----------------------|-----|
| 桂本萬葉集…………… | 卷頭 | 吉野離宮址前方の景趣…………… | 九五 | 舍人皇子御系譜…………… | 二三五 |
| 元曆校本萬葉集…………… | 卷頭 | 吉野の河内の現状…………… | 一〇二 | 石見の海岸地圖…………… | 二四五 |
| 金澤本萬葉集…………… | 卷頭 | 伊勢國の一部地圖…………… | 一〇九 | 韓島…………… | 二五七 |
| 香具山より耳梨山方面を望む…………… | 三 | くしろ(釧)…………… | 二〇 | みる(海松)…………… | 二五七 |
| かもめ(鷗)…………… | 一四 | 答志島…………… | 二二 | 有間皇子御系譜…………… | 二六六 |
| 舒明天皇御系譜…………… | 一七 | 草壁皇子御系譜…………… | 二六 | 紀伊國海岸略圖…………… | 二六六 |
| あづさ(梓)…………… | 三〇 | 藤原宮宮木引徑路圖…………… | 二六 | 香具山南方より雷丘飛鳥京址遠望…………… | 二八五 |
| ぬえどり…………… | 六 | 藤原宮址附近現圖…………… | 一四 | 二上山…………… | 二九三 |
| 網之浦附近現圖…………… | 三 | 香具山より藤原宮址を望む…………… | 一四 | 馬酔木…………… | 二九五 |
| 額田王系譜…………… | 六 | はんのき(榛)…………… | 一六 | 眞弓佐田丘の遠望…………… | 三〇六 |
| 香久山畝傍山耳成山…………… | 九 | 元明天皇御系譜…………… | 一七 | ひあふぎ(射子)…………… | 三三 |
| 三輪山…………… | 五 | 輓…………… | 一五 | 島の宮舊址…………… | 三四 |
| あかね、むらさき…………… | 五 | かぢのき(穀)…………… | 一六 | 明日香皇女御系譜…………… | 三九 |
| 藤原宮址より天香具山を望む…………… | 三 | さねかつら…………… | 二二 | 飛鳥川の上流…………… | 三三〇 |
| つが(樛)…………… | 九 | 大原の里の現状…………… | 三四 | 高市皇子御系譜…………… | 三四七 |
| 吉野離宮址附近地圖…………… | 四 | 大津皇子御系譜…………… | 三六 | 高麗劍の柄頭…………… | 三四九 |

| | | | | | |
|---------------------|-----|-------------------|-----|--------------------------|---------|
| 畝傍山近景…………… | 三八〇 | 太宰府都府樓の址…………… | 五〇七 | 往古の和歌浦址…………… | 七四七 |
| 志貴皇子御系譜…………… | 四三三 | ちがや(茅)…………… | 五〇 | 離宮址附近の吉野川…………… | 七五〇 |
| 高圓山…………… | 四三三 | 夏實川の景趣…………… | 五五五 | あかめがしは(久木)…………… | 七五七 |
| 淡路島附近略圖…………… | 四三八 | 大伴氏系圖…………… | 五五七 | 葛城王(橘諸兄)系圖…………… | 七九九 |
| 明石海峡を隔てて淡路島を望む…………… | 四四〇 | 齋瓮の形状…………… | 五五九 | 高圓山春日山御笠山…………… | 八〇六 |
| あぢがも(味鴨)…………… | 四四八 | むろの木…………… | 五六一 | 平城京址附近地圖…………… | 八〇八 |
| 大かべ…………… | 四五五 | 輦の浦全景…………… | 五六八 | 平城宮址…………… | 八三三 |
| 千鳥…………… | 四五五 | 濱木綿(はまおもと)…………… | 五九〇 | 恭仁京址附近略圖…………… | 八三五 |
| やぶらん…………… | 四七一 | 太宰府近傍略圖…………… | 六〇九 | 木津川を挿んで恭仁宮址及び加茂町を望む…………… | 八六一—八七七 |
| 現在の能登瀧川…………… | 四八八 | には(鳩)…………… | 六五七 | 恭仁宮址より鹿背山を望む…………… | 八六八 |
| 石花…………… | 四九〇 | 領巾振山近傍圖…………… | 六六一 | | |
| 西湖畔より富士を望む…………… | 四九一 | 領巾振山…………… | 六九五 | | |
| 雷岡より飛鳥京址を望む…………… | 五〇二 | 御園より宮瀧三船山を望む…………… | 七三三 | | |



修改 萬葉集 新講 上卷 次田潤 著

萬葉集卷第一

解 說

【組織】卷第一は全部雜歌である。「雜歌」は「相聞」「挽歌」と併せて萬葉集に於ける基本的三大部立の一つである。卷第一が全部雜歌であるのは、卷第二が相聞及び挽歌とから成る分類に對立して居る。而して卷第一の歌の排列法は「泊瀨朝倉宮御宇天皇代」「雄略天皇朝」「高市岡本宮御宇天皇代」「舒明天皇朝」「明日香川原宮御宇天皇代」「皇極天皇朝」などの如く、先づ天皇の御代を標記して、其の御代の歌を収めるといふ時代的排列法によつてゐる。尤も卷の終の大寶元年以後の作歌は、作歌年月を追つて記してある。【時代】作品の時代は卷頭に掲げた雄略天皇の御製と傳ふる歌が最も古く、卷末の和銅五年頃の作が最も新しいのであつて、前後約二百六十年間に亘つて居るが、最後の五六十年間の作品が最も多い。即ち大部分は近江・飛鳥・藤原朝頃の歌である。なほ文武天皇の大寶元年以後の歌は、題詞によつて其の作歌年月が知られる。【作者】歌の作者の大部分は天皇皇族及び皇室に奉仕した宮廷歌人であつて、雄略天皇・舒明天皇・天智天皇・天武天皇・持統天皇・元明天皇を始め奉り、志貴皇子・長皇子・御名部皇女・額田王（額田王の御孫）の外の外があり、臣下には柿本人麻呂・高市黒人・春日老長・奥麻呂・山上・憶良等がある。就中人麻呂の作品が最も多く、長歌四首短歌十一首が収められてゐる。此の外作者不明の歌も數首ある。【歌數】歌數

は合計八十四首で、長歌が十六首、短歌が六十八首を占めて居るが、その中長歌一首は同一の歌の異傳（原本に「或本歌」と記してある）である。【編纂】卷第一は卷第二と組織・排列・時代・作者・用字法その他種々の點から見て共通する所が多いので、此の兩卷は同一の手によつて編纂せられた卷で、而も兩卷は相俟つて一部の歌集を成してゐたものと思はれる。編纂者は不明であるが、品田太吉氏が此の兩卷を勅撰であると言はれたのは傾聽すべき説である。【用字法】此の卷の文字使用法は他の多くの卷々と同様に、一般に漢字の正訓と漢字の正音略音又は借訓とを併用したものである。正訓とは「神」「春日」「不知國」の如く、漢字の字義に即して其の訓讀を用ゐたのを云ふ。正音と略音とは字義に拘らず其の字音を借り用ゐた場合であつて、正音は「許曾」「助詞」「伊理比」（入日）の類であり、略音は「許年」（來ね）「散和久」（騒ぐ）の「年」「散」の類である。又借訓とは字義に拘らず其の訓を用ゐた場合で、例へば「鴨」（助詞）「友師」（乏し）の「鴨」「友」などが是である。【歌風】此の卷は長年月に亘る作品を集録してあるので、歌風の特徴は一概には言ひ難いが、天皇の御製には内容表現共に簡古にして雄大な御作が多く、又人麻呂の作などには修辭技巧に勝れ、而も力強く國家思想を歌つた作が多い。惣じて萬葉前期の作品を代表するに足る秀逸が多く収められて居る。

雜 歌

泊瀨朝倉宮御宇天皇代

大泊瀨稚武天皇

天皇御製歌

萬葉集卷一

一 籠もよ み籠持ち ぶぐしもよ みぶぐし持ち 此の岡に 菜採ます兒 家聞
 籠毛與 美籠母乳 布久思毛與 美夫君志持 此 岳爾 菜採 須兒 家吉
 かな 名告らさね くらみつ 大和の國は 押しなべて 吾こそ居れ 敷きな
 名告 沙根 虚 見津 山跡乃國者 押 奈戸手 吾許曾居 師吉名
 べて 吾こそ坐せ 我こそは 告らめ 家をも名をも
 倍手 吾己曾座 我許背齒 告 目 家乎毛名雄母

【釋】○雜歌 諸註にクサグサノウタと訓んでゐるが、新訓及び新釋にはザフカと訓んでゐる。音讀説に従ふべきであらう。「雜歌」は「相聞」「挽歌」と共に、萬葉集の作品分類上の三大部門の一であつて、相聞挽歌(此等の語義は後に説明する)に入れられない歌を一括したものである。従つて其の内容は、行幸遊宴遊獵壽旅其の他種々の場合に詠まれた作品を含んで居る。○泊瀬朝倉宮御宇天皇代 第二十一代雄略天皇の御代である。「泊瀬朝倉宮」はハッセノアサクラノミヤと訓む。「泊瀬」は朝倉宮の在る附近一帯の地を總稱したのであつて、ハッセの名は今初瀬町・初瀬川などに遺つてゐる。「朝倉」の名は大和國磯城郡朝倉村に現存してゐる。朝倉村大字黒崎と岩坂との間が、泊瀬朝倉宮の舊址であると云はれてゐる。「御宇」の「宇」は宇内の義であり、「御」は統治の義である。訓に就いては諸説があるが、アメノシタシラシメシと訓むべきであらう。なほ講義には、日本靈異記に「御」を「乎佐女多比之」、「宇」を「阿米乃之多」と註してある事などを證として、アメノシタヲサメタマヒシと訓んである。さて「しらしめす」は治め給ふの意である。「しらしめし」の「し」の上の「し」は、敬意を添へる古い助

動詞の「す」の連用形であり、次の「し」は過去の助動詞の「き」の連體形である。敬意を添へる助動詞「す」に就いてはなほ下に説明する。「天皇代」はスメラミコトノミヨと訓む。さて卷一卷二などに、時代を示すのに「何宮御宇天皇代」と記してゐるのは、上代の皇居が多くは御一代限りであつて、次の御代には又新たに地を下して、別に御造營になるのが常例であつたからである。○大泊瀬稚武天皇 雄略天皇である。日本書紀には「大泊瀬幼武天皇」と記してゐる。「大泊瀬」と申すのは、長谷之列木宮に皇居を營み給うた武烈天皇を、「小泊瀬稚鷯鷯天皇」と申し奉るのに對する稱である。上代では未だ漢名の御謚號を奉る事が無かつたので、皇居の所在地を御名に冠して稱へ奉つたのである。○天皇御製歌 支那に於て「御製詩」と呼ぶのに倣つたのである。後世では「歌」を省いて單に「御製」と云ふ。古語で訓むならばオホミウタと訓むべきであらう。

○籠もよ 「籠」は流布本の訓にコと訓んでゐるのがよい。僻案抄考略解燈放證などに之をカタマと訓んでゐるのは、日本書紀の彦火火出見尊の海神宮遊幸の條にある「無目籠」が、一書曰の方に「無目堅間」とあるのに據つたのである。然し小琴に記されてゐる通り、「無目籠」は目を堅く編んで水の滲透しないやうに造つた特殊の籠であるから、是を一般の籠の稱とするのは妥當でない。一般の籠を「こ」と云つた證は、和名抄に「籠古名竹器也」と註してあり、日本書紀に「大目鹿籠」をオホマアラコ、「竹籠」をタケノコと訓んであり、此の集に地名の「伊良處能島」を「射等籠荷四間」とも記し、又「田兒之浦」を「田籠之浦」とも記してあるのを以て明かである。次に「も」と「よ」は共に感動詠歎の意を表し、若しくは語勢を強め語調を整へる助詞である。下の「ぶぐしもよ」「もよ」も亦是と同じである。此の句の意義は、次の句の「み籠持ち」を俟つて始めて完全になるのである。○み籠持ち 「み」

は名詞に冠して愛でる意を添へる接頭語。下の「みふぐし」の「み」も同様。此の句は籠を手に持つての意。○ふぐしもよ「ふぐし」は掘申の義で、土中に刺し込んで茶などを根から掘り取るのに用ゐる、木製又は金屬製の先の尖つた籠のやうな道具である。「申」は「櫛」と同じ系統の語で、刺し立てるものを表す。金屬製の「ふぐし」は「かなふぐし」と言つたのであつて、和名抄に「鑑久之 鞏希 鞏希 又土具也」とある。さて此の長歌は、第一句から第四句までは二句づつが對句になつてゐて、而も四句の音数が三四・五・六となつてゐて、一句を進める毎に一音を増して音調を整へてある。○茶採ます兒 訓は小琴にナツマスコと訓んだのが正しい。茶を摘んでおいでの娘子よといふ意。「採ます」の「す」は、前に「しらしめし」の所で一言した通り、軽い敬意を添へる古い助動詞で、平安朝時代には既に滅びた。此の助動詞はサ行四段に活用するのであつて、「さ」(未然)「し」(連用)「す」(終止・連體)「せ」(已然命令)の四種の活用形がある。此の句に用ゐられた「す」は連體形である。而して此の助動詞は、此の御製の場合のやうに通例四段活用助動詞の未然形に附くのであるが、又上一段・サ行變格・下二段活用の助動詞に附く事もある。なほ注意すべきは、此の助動詞が添加する時に、屢動詞の語尾の母音に變化を生ずる事である。例へば四段活用の助動詞に附く時に、「聞かす」「思はず」が「聞こす」「思はず」となり、上一段活用の助動詞の「見る」「著る」に附く時、「見す」「著す」となるが如きである。下二段活用の助動詞には、「寝る」に附いて「寝す」となる一例があるのみである。此の助動詞は敬意を添へるものであるけれども、「給ふ」或は「坐す」の如き嚴格な意味を表すのではなく、稍軽く單に親しみの意味で用ゐられてゐる。其の用例は下に屢現れるから、此處には擧げない。さて此の句の最後の「兒」は、一般に女子を親愛の情を以て呼ぶ時に用ゐる語であるが、又男子を指す場合もある。○家聞

かな 流布本には此の句と次の句とを、「家吉閑名、告沙根」と訓んであるが、美夫君志に「家吉閑」をイヘキカナと訓んだのが妥當である。考には原文の「吉」を「告」の誤、「閑」を「閉」の誤と見て一句をイヘノラへと訓み、又古義には「吉閑」を「告勢」の誤として、一句をイヘノラセと訓んでゐるが、原文を改める必要はない。さて原文の「閑」をカナと訓むのは、其の音の *kan* の尾音の *o* をナ行音に借りたのである。これは「信濃」の「信」をシナ、「乙訓」の「訓」をクニ、「爾故余漢」の「漢」をカニ、「讃岐」の「讃」をサヌと訓むのと同類である。「聞かな」の「な」は希望の意味を表す助動詞で、動詞や助動詞の未然形に接續する。一句の意味はお前の家が聞きたいといふのである。○名告らさね 訓は代匠記精撰本に據る。お前の名前を告げなさいの意。「のる」(告)は「のぶ」(述)と同根の語で、言ふ告ぐ等の意を表す。「告る」の用例には「畏みと能良すありしをみ越路の峠たむけに立ちて妹が名能里つ」(三七三〇)の如きがある。「告らさね」の「さ」は、前に述べた敬語の助動詞「す」の未然形である。「ね」は對手に對して要求する意を表す助動詞で、動詞や助動詞の未然形を承ける。さて上代の男女間に於ては、相許す間柄でない、女が其の名を男に告げる事を忌み憚る風習があつた。卷十二に「紫は灰さすものぞ海石榴市の八十の衢に逢へる兒や誰」(三二〇二)に對して、「たらちねの母が召す名を申さめど道行く人を誰と知りてか」(三二〇二)と答へてゐるのは、此の風習を示す一例である。此の御製もさうした男女間の風習のあつた事を念頭に置いて解釋しなければならぬ。此の御製は此處で一段落である。○そらみつ 「大和」の枕詞。下に「天爾滿」(二九)と五音にして用ゐた例もある。枕詞は元修飾語として冠したものが多いのであつて、其の意義は初めは判然としてゐた筈であるが、發生の古いものは時代を降ると共に音に轉訛を生じたり、同音異義語や聯想によつて呼び起される他の語に轉用

せられるに至つたので、後世其の原義を知る事の困難になつたものが尠くない。「そらみつ」の如きも語義に就いては從來諸説があるが、なほ語義未詳とすべき枕詞である。試みに語義に關する數説を紹介するならば、(イ)燭明抄には、日本書紀の神話に饒速日命が天の磐船に乗つて虚空を翔け巡つて居られた時、大和の國土を見下して此の地に天降り給うたので、此處を「虚空見日本國」と名附けたのであると傳へて居るから、それに基づいて「虚空見つ大和」と言ひ始めたのであると解いてゐる。(ロ)檜楯手別記には、「そらみつ」は「そり満つ」の約まつたもので、空に高く進み上れる山の義で、「山」に懸けたのであると解いてゐる。(ハ)古義にはやはり饒速日命の神話に基づくのであると見て、「そらみつ」は虚御津の義で、天の磐船が泊つた津といふ意であると解いて居る。(ニ)又近時桑川定一氏は、これは新羅の國號「徐羅伐」(Seul)が王城の義であるから、其の發音が轉訛して傳へられて、大和國は帝京を置ける國の意で「そらみつ大和」と續けるに至つたのであらうと云ふ説を發表せられた。(『國語・國文』上代特輯號所載「そらみつ考」参照)從來一般に行はれたのは(イ)の説であるが、饒速日命の神話は一種の説明説話であるから、是に據つたものとする説は穩當でない。要するになほ後の研究を俟つべきである。○大和の國は「大和」に廣狹の二義がある。此の場合には畿内の大和の國を指し給うたものと見る説もあるが、廣く天の下即ち日本國を指し給うたものと見るべきである。○押しなべて「押し」は「押し開く」「押し伏す」「押し別く」「押し照る」等のそれと同様に、次の動詞を強調するための接頭語である。「なぶ」は「なぶ」の連用形で、「なぶ」は「なびく」に對して、靡かすの意を表す下二段活用他動詞である。外にも「薄於之奈倍降る雪に」(四〇一六)の如き用例がある。此處はすつと押し靡かせて、廣く皇威を及ぼす意である。○吾こそ居れ 訓は小琴に

據る。「こそ」は意味を強める係の助詞で、下の「居れ」が其の結である。上の句と合せて解くと、「吾こそ押しなべて居れ」即ち朕が廣く押し互して統治してゐるのだといふ意である。○敷きなべて 此處は原文に「吾許會居師告名倍手」とあつて、流布本にワレコソヲラシツケナヘテと訓んであるが意味が疏通しないので、小琴に「告」を「吉」の誤と見てワレコソヲレ、シキナベテと訓み改めてゐる。さて「敷く」は「知る」「占む」等と同根の語であつて、此等には何れも我が物とする意がある。「敷く」は領する意である。「敷く」の用例には「大君の敷きます國は」(四一五四)の如きがあり、又これに接頭語の「太」を添へた「太敷く」の例は後に見える。此の句の意は次の「吾こそ坐せ」に連なつて始めて完全になる。○吾こそ坐せ 流布本にワレコソヲラシ、考にワレコソヲレと訓んであるが、略解に引く宣長の説にワレコソマセと訓んでゐるのが妥當である。「ます」は居るの意の敬語動詞で、「ませ」は已然形で「こそ」に對する結の形である。天皇御自ら敬語を用ひ給ふのは古くからの慣例である。其の例は記紀歌謠を始め集中の御製にも屢見えてゐる。これは今日長上の者が、年少の者に對して敬語を用ゐると同様である。さて此の二句の意は、朕が廣く押し互して君臨して居るのだといふのである。「押しなべて云々」と「敷きなべて云々」とは、これ亦二句對句である。○我こそは告らめ 此の二句は流布本に「我許者背齒告目」とあつて、意味が疏通しないので、訓義に就いて從來種々の説が現れて居る。其の中で注意すべきものを擧げると、考には「許」の下に「會」を補つて、ワレコソハセトシノラメ(略解燈同説)と訓み、小琴には「者」を「會」の誤と見て、「我許會」をワヲコソと訓んでゐる。又美夫君志には「許」の下に一本に「會」があるのに據つて「我許會者」をワレコソハと訓み、次の句の「齒」を「止齒」の二字の誤として、「背止齒告目」をセトハノラメと訓んで居る。(講義同説)

此等の訓に據る時は、「せ」を妹背の「背」の義と解くのである。此の外新解には、類聚古集に「我許背齒告目」とあるのに據つて、アレコソハノラジと訓んで、否定の意志を表したものであると解いてある。今は元曆校本類聚古集等に「者」の無いのに従ひ、「我許背齒告目」を新考の訓によつてワレコソハノラメと訓む事にする。「告らむ」の「め」は助動詞「む」の已然形で、上の「こそ」に對する結である。さて意味はお前が名を告げないから、朕が先づ名告りを致さう。さあさあ早く名を告げよと云ふのである。「我こそは告らめ家をも名をも」は「我こそは、告らめ、家をも名をも」と三句に句切つて、「告らめ」は三音句と見るべきである。長歌の固定整備した形は、通例五七、五七、……五七、七の形であるが、斯かる標準的詩形の成立するまでの古歌や上古の歌謡には、屢五・三・七を以て結尾句としたものがある。後に講ずる「一三・一七」などもその例である。

【譯】籠を持ち掘申を手にして、此處なる岡に若菜を摘んでおいでの娘子よ。そなたの家が知りたい。名告りをなさい。此の天が下は自分が押し靡かせて居るのであり、自分が統べ治めて居るのである。先づ此の朕が、家も名も告げ知らせようから、さあさあ早くお名告りよ。

【評】記紀の傳ふる所によると、雄略天皇は剛毅英邁にましますと共に、一面に文雅に長じ給うたやうである。試みに古事記を繙くと、九首の御歌とそれに伴ふ傳説が傳はつて居る。それ等の御歌や傳説は、何れも優雅な御性情の一面を傳へてゐるのであるが、右に講じた御製は、其の何れの御歌よりも勝れてゐる。冒頭は三音句に始まつて、句を重ねるに従つて一音づつ増して、六音句まで進んで居るので、高古な格調が具はつて居り、次いで「此の岡に」「此の」によつて少女を強く捉へ、更に「家聞かな名告らさね」に至つて、少女に對する要求を強く表

現してあるのが巧みである。而して第二段に移ると、先づ「そらみつ大和の國は押しなべて吾こそ居れ云々」の六句には雄大な感が起り、天皇の御名告にふさはしい莊重な響があり、最後に前の「家聞かな名告らさね」を承けて、嚴かに「我こそは告らめ家をも名をも」と一首を纏めてあるのも勝れてゐる。かくて此の御製の上には、天皇の御性情が遺憾なきまでに現れて居るが、なほ此の御製に現れてゐる情景を想像して見ると、一層巧みな御歌である事を知るのである。即ち長閑に霞む大和の平野を、二三の臣下を従へさせられた威風堂々たる天皇がお通りになる時、彼方の岡に摘草に餘念のない少女の姿を御覽になつて、つかつかと其の傍にお立ち寄りになり、戯れに其の名をお尋ねになるといふ、簡素な古代の光景がありありと眼前に展開される。要するに此の御製は、上代の歌風を代表する傑作であつて、萬葉集の巻頭に掲げ奉つたのも偶然でないやうに思はれるのである。

高市岡本宮御宇天皇代

息長足日廣額天皇

天皇登三香具山望國之時御製歌

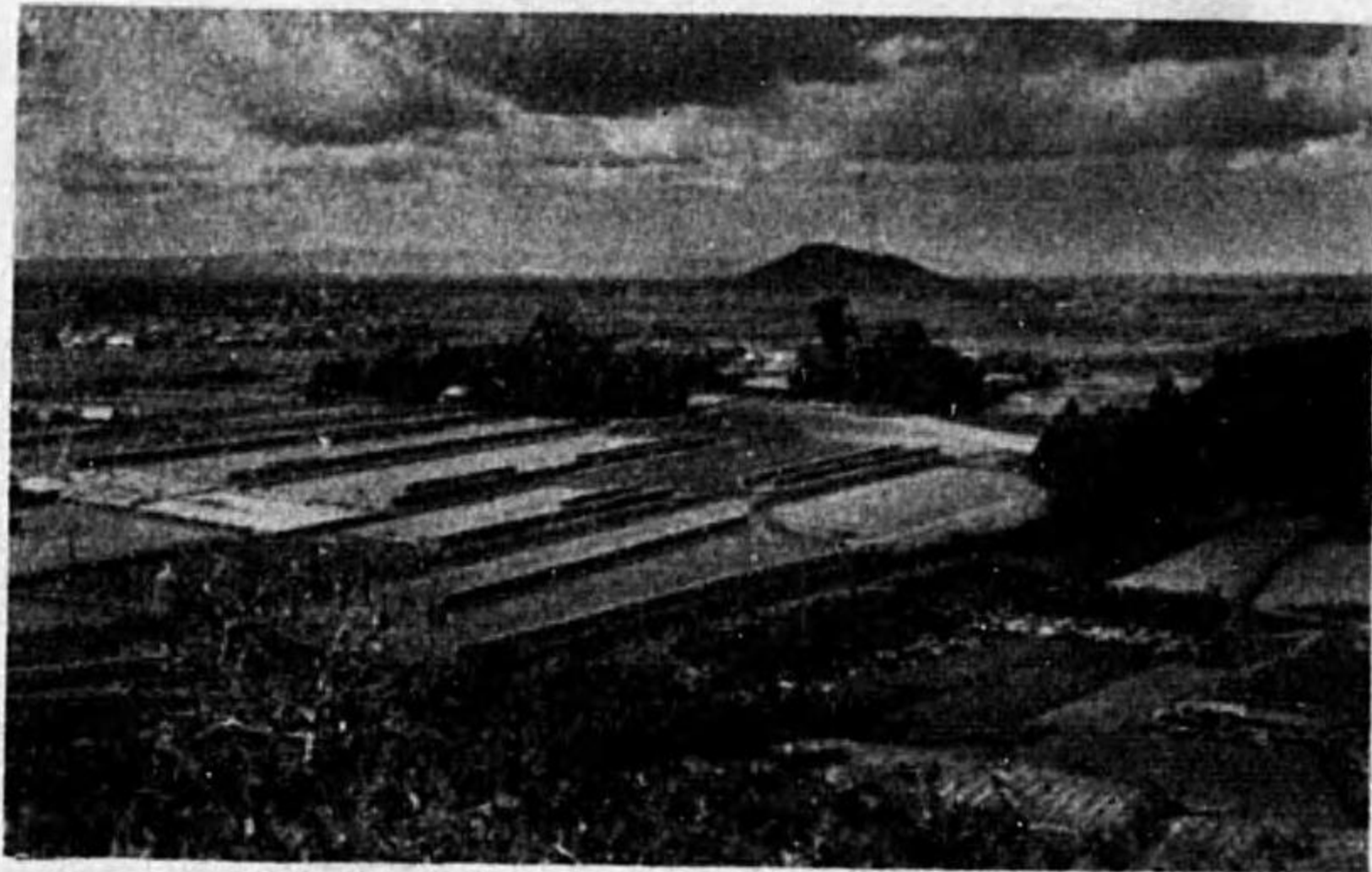
- ニ 大和には 群山あれど 取りよろふ 天の香具山 登り立ち 國見をすれば
 山常庭 村山有 等 取 與呂布 天乃香具山 騰立 國見乎爲 者
- 國原は 煙立ち立つ 海原は 鷗立ち立つ うまし國ぞ 秋津島 大和の國は
 國原波 煙立 龍 海原波 加萬目立 多都 何恰 國曾 蜻 島 八間跡能國者

【釋】〇高市岡本宮 「高市」は廣い地名で「岡本」は其の内にある。岡本宮の舊址は、大和國高市郡高市村大字岡で

あると云ふのが一般の説であるが、喜田博士の『帝都』には、高市郡飛鳥村大字雷いかづちに在る雷岡であると言はれた。高市の岡本宮に於て天下を知らしめたのは、第三十四代の舒明天皇であつて、雄略天皇からは十三代の後である。○息長足日廣額天皇 舒明天皇である。○天皇登香具山望國之時御製歌 スメラミコト、カグヤマニノボリマシテ、クニミシタマヘルトキノオホミウタと訓む。「香具山」は「香山」「高山」「芳山」なども記す。大和國磯城郡香久山村に在る。所謂大和三山の一で、萬葉歌人には最も親しみのある山である。高くはないが、大和平野の一隅に在つて、姿も美しく眺望も佳いので、上古以來頻繁に文學の上に現れて来る山である。「望國」はクニミと訓む。國見の義で、民狀視察の爲に行はれる事もあり、又單に眺望を楽しむ爲にする事もある。従つて國見は天皇に限らず民間にも行はれた。今も諸國に「國見山」と名づけられた山がある。

○大和には 此處では大和國を指す。原文の「常」はトコといふ字訓の一部を借りて、トと訓ませた略訓である。○群山あれど 多くの山があるけれどもの意。「群山」の「群」は「むら竹」「むら鳥」「草むら」「叢」等の「むら」で、「むれ」(群)の義である。此の句の下には、其の中でもといふ意を補つて見ると意味がよく通じる。○取りよるふ「取り」は「よるふ」の意味を強める爲に添へた接頭語。「よるふ」は「よる」(寄)「よそふ」(装)「よるづ」(萬)などと同根の語で、物が足り整ふことを表す。甲冑を「よるひ」(鎧)と言ひ、中古語に「屏風よるひ」「御厨子よるひ」など言ふ「よるひ」は、此の「よるふ」の連用形から轉成した名詞である。「鎧」は一に「具足」とも言ふ通り、足り具はつた物といふ意である。此の御製に於ては、香具山が山として具備すべき條件を具へてゐるのを云ふ。○天の香具山 流布本の訓にアマノカクヤマとあるが、古事記の倭建命の御歌に「阿米能迦具夜麻」とあるから、

「天」はアメと訓む。天の香具山は古事記の天石屋戸の條以下諸處に見えてゐて、神代以來知られてゐる山であるから、神聖なるといふ意で「天の」を冠したのも思はれる。併し『神代紀口訣』に引いて居る逸文『大和國風土記』に、「天上有山、分而墮地。一片爲伊豫之天山、一片爲大和國之香山」といふ傳説が見えて居り、又『釋日本紀』に引いて居る逸文『伊豫國風土記』にも同様の傳説が記されて居る。〔二五七〕参照。此等に據れば、香具山は天から降つた山であると云ふ傳説があつた爲に、「天の」を冠したのも思はれる。此の句の下には助詞の「に」を添へて見ると意味がよく通じる。此の「天の香具山」の一句は、上に對しては述語の役目をなし、以下の句に對しては其の天の香具山に登り立つてと續くのである。○國原は「國」には諸義があるが、此所では「海原」に對して見渡した其の邊一帶の土地を云ふ。「原」は「天の原」「野原」「河原」「海原」「海原」などのそれと同じで、廣く且平らな所を云ふ。「國原」は、香具山から眺められる大和の平野を廣く指したのである。○煙立ち立つ 「煙」は和名抄に



香具山 香具山 香具山 香具山 香具山 香具山 香具山 香具山 香具山 香具山

「烟和名、介布利」とあるから、古くはケブリと言つた事が知られる。後世ケムリと云ふのは其の轉訛である。次に原文の「立龍」の「龍」が流布本には「籠」とあるので、代匠記精撰本考略解は是に據つてタチコメと訓んでゐるが、煙が立ち籠めてゐては眺望が妨げられる道理であるから、此の訓は穩か

ない。流布本以外の多くの古寫本には「立龍」とあるから、是に據つてタチタツと訓むのが、意義の上から見ても、又次の句の「鷗立ち立つ」と對句になつてゐる點から見ても妥當である。「立ち立つ」は彼方此方から頻りに立ち上る意である。さて此の句は村里の彼方此方から炊煙が立ち上つて、民家の竈が賑はつてゐる様を歌はせられたのである。○海原は「うなばら」は「海原」の約まつた語で、其の「な」は「みなそこ」(水な底)「みなわ」(水な泡)「たなひち」(手な眩)「たなごころ」(手な心〓掌)等の「な」と同じで、「の」の意の古い助詞である。此の「海原」は昔香具山の麓に在つた埴安池であるが、今は香久山村大字池尻池之内等の地名に其の名残を留めてゐるのみで、池の跡さへ不明になつて居る。上代では大きな池や湖等をも皆「海」と云つた。○鷗立ち立つ



か も め

原文に「加萬目」とあるのは今の「かもめ」(鷗)である。墨繩には鷗は山中の池などに棲むべき鳥ではないから、是は鴨群の意で鴨鴛鴦等せしまたかづの水鳥の群れてゐるのを歌はせられたのであらうと云つてゐる。然し鷗は翼の強い鳥であつて、風に乗つて遠く山中の湖などに飛んで來る事は珍らしくないから、此の場合の鷗も難波の海から飛んで來たものと見るべきである。○うまし

國ぞ 原文に「怜何」とあつて、流布本に之をオモシロキと訓んでゐる。僻案抄の説に「怜何」は轉寫の時「何怜」を上下顛倒したのであつて、「何」は「可」に「怜」の偏を類推して附けたものであるとして、「可怜」に改めて之をオモシロキと訓んでゐる。又考は僻案抄の説を承けて、「可怜」を日本書紀神代卷の「可怜小汀」の訓註に、「可怜、此云ミ于麻師」とあるのに據つてウマシと訓んで居る。此の外「可怜」は日本書紀に「可怜御路」と用ゐてあり、又「何怜」と記した例は本集中に散見する。而して「怜」は「憐」と同義の文字であるから、「可怜」はアハレともオモシロシと

も訓まれるが、此所では音調の上からウマシと訓むのが穩當である。「うまし」は古くは味ばかりでなく、見る物聞く物など總て感覺に訴へる物を賞めて言ふ時に用ゐた形容詞で、美しく好ましい或は結構なといふ意である。「うまし國」は形容詞の連體形を以てせずして、終止形から直ちに名詞に續けて熟語を造つたのであつて、此の時代に屢用ゐられた形である。例へば「荒し男」「嚴し矛」「嚴し御世」「うまし少女」等がそれである。最後の「ぞ」は通例述語の語勢を強める爲に用ゐる係の助詞であるが、此の場合のやうに「ぞ」が體言を承けて文を終止した場合には、「なるぞ」の意を表す。同様の用例に「春の野に抜ける茅花會」(一四六〇)「しばしばも降らざる雪會」(四二二七)等がある。○秋津島「秋津島」は我が國の異稱としても用ゐるが、ここは「大和」に冠した枕詞である。「秋津島」の名義に就いて、日本書紀神武天皇の三十一年の條に、天皇が腋上のわきうへ嘸間丘(今の和國南葛城郡披上村大字柏原の南の國見山)にお登りになつて國見をし給うた時、國原の形狀が蜻蛉の臀おしなほ帖たなほ(交尾)してゐるやうに見えたので、「秋津洲」の名が起つたといふ傳説が記されてゐる。然し是は「秋津」が「蜻蛉」と同音である爲に生じた、民間語原説に基づく地名説話に過ぎない。蜻蛉を「あきつ」と言ふのは「秋つ蟲」の略で、秋に盛に飛ぶ蟲の義であると云ふ。一方「秋津島」は古事記に「大倭豊秋津島」とあるのを略したもので、「豊秋」は農事の收穫の豊かなる意、「つ」は「の」の意の助詞、「島」は人の住むべき土地を指して云ふ。従つて「秋津島」は「瑞穂國」と同じ意である。一説に「秋津島」は「明つ島」又は「現つ島」の義で、此の世に現存する美しい國の意であるとも云ふ。さて「秋津島」は第六代孝安天皇が秋津島宮を置かれた地で、今の和國南葛城郡秋津村大字室に宮址が在る。此の「秋津島」の名が後に「大和」に冠せられるに至つたのは、恰も欽明天皇の都せられた磯城島が、轉じて「大和」に冠せられる枕

詞となつたのと同じ事情に基づくのである。(『國號考』及び『大日本地名辭書』汎論「國號篇」参照)

【譯】大和の國には多くの山があるが、其の中でも姿の美しい天の香具山に登り立つて國原を見渡すと、廣い國土には、彼方此方に民家の炊煙が立ち上るのが見え、又埴安池の水面には、其處此處に鷗が飛び立つのが見える。さてもよい國である、此の大和の國は。

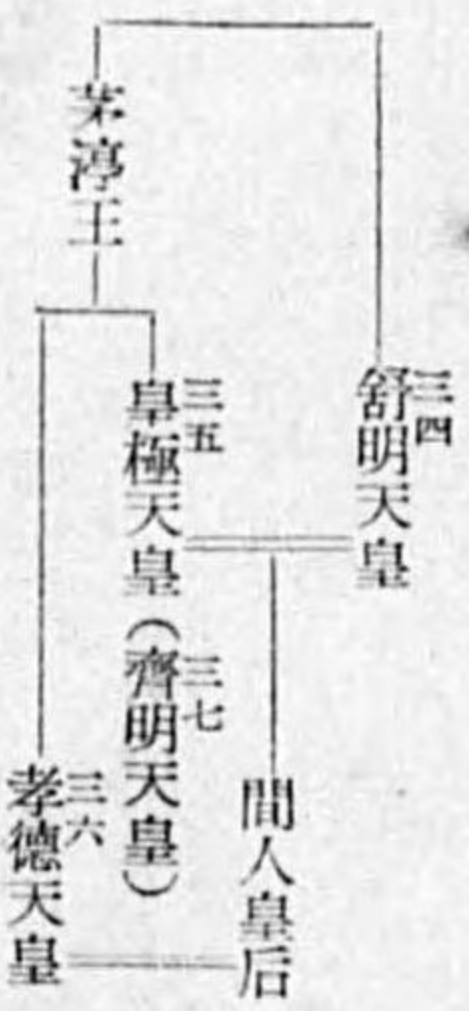
【評】「うまし國大和」は上代人の理想に適つた國原であつた。代々遷都の事はあつたけれども、概ね大和の平野の間を出なかつたのは其の爲である。神武天皇の御東征も、大和へ行かせられるのが當初からの御計畫であつたのでなく、此處まで御東征になり、此の青山四周の美しい平野を御覽になつて、始めて此處に帝都を奠め給うたのであらうといふ説があるが、如何にもさうであらうと思はれる。此の御製は平明にして而も簡潔なる語句によつて、高古莊重に歌はれてゐる。殊に「國原は煙立ち立つ、海原は鷗立ち立つ」の對句は、民家の股賑と禽獸喜悅の様とを印象的に寫して、一首の中心となつて居る。古事記に應神天皇が宇遲野に立たせられ、葛野を遠望し給うて、「千葉の葛野を見れば百千足る家庭も見ゆ國の秀も見ゆ」と歌ひ給うた事が見えて居る。其の趣はこれと似た所があつて、共に日毎日毎に開け行く國狀が、ありありと眼前に見えるやうな感がある。

天皇遊獵内野之時、中皇命使間人連老獻歌

三 やすみしし 我が大君の 朝には 取り撫て給ひ 夕には い寄り立たしし
八隅 知之 我 大王乃 朝廷 取 撫 賜 夕庭 伊 繼 立 之

御執らしの 梓弓の 長弭の 音すなり 朝獵に 今立たすらし 夕獵に 今
御執 乃 梓弓之 奈加弭乃 音爲奈利 朝獵爾 今立 須良思 暮獵爾 今
立たすらし 御執らしの 梓弓の 長弭の 音すなり
他田 渚 良 之 御執 能 梓弓之 奈加弭乃 音爲奈里

【釋】○天皇 舒明天皇。○内野 今の大和國宇智郡宇智村に其の名を存してゐる。此の長歌の反歌には「内大野」とある。今同郡阪合部村に大野といふ地があつて、此の邊であらうと言はれてゐる。續日本紀慶雲三年二月の條に、「丁酉車駕幸内野」とあるのも此の附近の野であらう。古御料の狩場があつたのである。○遊獵 カリシタマフと訓む。○中皇命 考に「皇」の下に「女」の字を補ひ、「中皇女命」と訓んで舒明天皇の皇女、即ち後に孝徳天皇の后に立ち給うた間人皇后であると云ひ、古義に「命」は「女」の誤であると云つて、考と同じく間人皇后であると云つてゐる。併し下にも中皇命の御歌があり、目錄に記す所も同じであるから、原のままの「中皇命」を姑くナカチスメラミコトと訓んで置く。喜田貞吉博士の「中天皇考」(『萬葉學論纂』所收)に據れば、中皇命は皇后にして後に帝位に即かせられた方を申すので、ここは皇極重祚齊明天皇であるといふ。○使間人連老獻歌 「連」は姓「老」は名である。「むらじ」(連)はもと韓語から出た語で、



主長の義であらうと言はれてゐる。此の題詞の文面では、此の歌の作者が中皇命であるか、間人老であるかが明瞭でないので従来兩説がある。中皇命の御歌は下にも(一〇・一一・一二)の三首が載つて居るから、此の歌も姑く

中皇命の御歌と解して置く。尤もさうすると、題詞に「御歌」と記されておかないのが穩當でないから、「歌」の上に「御」の字が脱ちたものと見るのである。

やすみし 古事記の雄略天皇の條の歌に「夜須美斯志和賀意富岐美」といふ例があるから、此處もヤスミシと訓む。下の「大君」に掛けた枕詞であつて、集中に用例が多い。語義の解釋には種々の説があるが、未だ確定説を見ない。(イ)釋日本紀には天の下の八方を知ろしめす意であると解き、(ロ)仙覺抄には八島知ろしめすの義で、最後の「し」は助詞であると解いてゐる。(ハ)冠辭考には、集中に「安見知之」と記してあるのが正字で、安らけく見そなはし知ろしめす意であつて、最後の「し」はあがめ詞であると云ひ、古事記傳にも此の説を採用して、最後の「し」を爲賜ふの意として居る。「やすみ」は眞淵や宣長の説の如く安見の義で、安らけく知ろしめすの意であると思はれるが、「し」の解釋にはなほ審かでない所がある。(ニ)古義には「安み知らす」の「ら」を省いて、それを歌ひ切つてシシと云つたのであると云ひ、(ホ)美夫君志には下の「し」は所知の意で、天の下を安らけく見そなはし知らす意味の稱言であらうと云つて居るが、此等の説もなほ穩當でない。私見によれば「安見し」の原形は「安見せず」であつて、其の構造は「神さびせず」「旅宿りせず」と同じで、「安見」といふ名詞を動詞に活用させて「安見す」と云ひ、更に其の下に敬語の助動詞の「す」が附いて、「安見せず」を生じたのであるが、「安見」のミの母音同化が下の音に及んで^ズがシとなり、スガシとなつてヤスミシシとなつたのであらうと思ふ。○我が大君「大君」は天皇を指し奉る。「我大王」の訓に就いて槻落葉にワゴオホキミと訓み、「吾」は古事記日本書紀には「倭賀」とあるを今ワゴとよむは、集中總て假名書には「和其」「和期」と書き、續日本紀にも「和已於保支美」とあればなり、と説

いてゐる。又美夫君志も此の説に従つて、今按ふるに熱田大神宮縁起にも「和期意富岐美」とあり、かくて集中假名にて「和期」「和其」「吾期」など書けるは十一所あり、然るに「和我於保伎美」と假名書せるは卷十八と卷二十とに一つづつあるのみなり、されば本集にては多きにつきて、「吾大王」「我大王」などあるは皆ワゴオホキミと訓むべきなり、と云つてゐる。要するに「我大王」が、ワガオホキミとワゴオホキミと二様に訓まれた事は明白である。ワガをワゴとも云ふのは、實地に歌ふ時の好音法によるのである。即ちオホキミのオの母音同化がワガのガに及んでワゴとなるのである。従つて此の歌の「我大王」も、假名書の例に倣つてワゴオホキミと訓むべきものやうにも思はれるが、記紀歌謡にはワガオホキミとあるから、總てをワゴオホキミと訓むのも如何であらうか。姑く「我大王」の如き書き方の場合にはワガオホキミと訓んで置く。○取り撫で給ひ 弓を手に持つて愛撫し給ふ意。○い寄り立たしし 原文の「伊縁立之」を流布本にイヨセタテシ(僻案抄略解同訓)、考にイヨセタタシシ、攷證にイヨリタタシ、燈にイヨセタテシ等と訓んであるが、今は古義の訓に従つてイヨリタタシシと訓む。訓の異なるに従つて句の意義も異なるのであつて、「いよせ」は他動詞となり「いより」は自動詞となる。句頭の「い」は他に「い隠る」「い漕ぐ」「いたどる」「い積る」「い這ふ」「い向ふ」「い行く」「い渡る」等の用例もあるやうに、動詞に冠して其の動詞の意味を強め、若しくは語調を整へる接頭語である。「寄り立たし」は、天皇が壁の如き所に立て掛けてある御弓の傍に寄り立ち給ふ意である。「し」の上の「し」は敬語の助動詞「す」の連用形であり、下の「し」は過去の助動詞「き」の連體形である。御弓の傍に寄り添ひ立つて愛で給ふ所といふ意である。(イヨセタテシと訓むならば、御弓をお側に寄せ立て給ふ意となる。) さて第三句以下の四句は、「朝には云々」「夕には云々」と對句に

なつてゐる。これは朝と夕によつて異なる趣を表現したのではなく、朝となく夕となく常に大御身を離さず愛撫し給ふ所の御弓、といふ意を四句に歌つたのである。○御執らしの「御」は敬稱の接頭語。「執らし」は「執る」に敬語の助動詞「す」を添へた「執らす」の連用形が名詞に轉じたものである。従つて「御執らしの」は「手にお執りになる物のといふ意で、次の「梓弓」の修飾語である。「御執らし」は轉じて直ちに弓の敬稱としても用ゐられるのであつて、春日祭の祝詞の「御弓」をミトラシと訓んで居るのは其の例である。「御執らし」と同じ構造から成る語に「御佩かし」「御著し」がある。「御佩かし」は日本書紀の訓註に、「御刀、此云彌波迦志」とある通り御太刀の意で、「御著し」は古事記の歌謠に「黒き美祁斯をまつぶさに取り装ひ」とある通り、御衣の事である。○梓弓の流布本にアツサノユミノと七音に訓んであり諸註是に従つてゐるが、集中には唯一箇所「安都佐能由美乃」(三五六七)と記した例があるのみで、其の他は總て「梓弓」又は「安豆左由美」の如く記してあるから、此所は古葉略類聚鈔の訓に據つてアツサノユミノと六音に訓むべきであらう。(新解全釋同訓)梓は上古の



あ 弓の材として一般に用ゐられたのであるが、後世弓の製法が變つた爲に、「梓」と稱する木は忘れられてしまつた。從來梓に就いては「あかめがしは」であるとし、或は「きささげ」であるとするなど種々の説が現れたけれども尙審かでないが、明治四十一年に理學博士白井光太郎氏の研究によつて明確にされた。

即ち白井博士は、「あづさ」といふ古名を方言に遺してゐる上州甘樂郡から、秩父三峯山あたりの實物を調査して、梓は「みづめ」一名「よくそみねばり」と稱する樺屬の喬木で、嵩口の柄や油の締木などを作るに用ゐるほど、材質

の強靱な樹である事を考證せられ、なほ大和紀伊地方の方言に「はんさ」又は「はづさ」と呼んで居るのが梓であつて、此等の地方には今日なほ多くの梓が存してゐる事を明かにせられた。(植物學雜誌)二五八號參照)梓が山形岩手長野等の山地に現存する事は、其の地方の人々から聞き及んで居るし、現に私も吉野山中で諸處に見受けしたのである。○長弭の原文の「奈加弭」に就いては、之をナカハズと訓んで中弭とする説、ナガハズと訓んで長弭とする説、その他「奈留弭」又は「奈利弭」の誤と見る説等がある。先づ長弭説を見ると、管見には「なが弭」とは末弭也。末弭は長く作れば長弭といふ也。弓の弦打の音も此の末弭の所にあたりて聞ゆる物なれば、なが弭の音すとはよめり」と云ひ、田安宗武の『玉函叢説』にもナガハズと訓み、管の長いのは玉や鈴を懸ける爲であると述べ、又美夫君志には長弭は猛獸などを突き止める爲のものであると云つてゐる。是に對し山田孝雄博士の講義には、「加」を濁音に用ゐるのは異例であつて、「奈加弭」はやはりナカハズと訓んで中弭の義とすべきであるとされ、而して「はず」には弓の弭と矢の筈とがあつて、「中弭」は弓の「本弭」「末弭」に對して、其の中間の弦と矢の嚙合ふ所を指して云つたのであらうと述べられた。更に最近吉田増藏氏は之をナガハズと訓んで、長弭とすべき事をも、「伊」漢土に於ける「弭」の字義は、漢魏以來唐初までは大體弓末と解された事、(ロ)我が國上古に於ける用例を見て、も、「弭」の字義は弓端即ち弓末である事、(ハ)「弭」の字の和訓はユミハズ或はユハズで、又單にハズとも言つた事、(ニ)「はず」の語義は「はつ」(果)と語原を等しくし、「はじ」(端)「はた」(端)等とも關係がある事、(ホ)「奈加」を濁音にナガと訓む例證には、和名抄に「長刀」を「奈加太知」、「長笛」を「奈加布江」、「霖」を「奈加阿女」と註した如き例が幾らもある事等を詳細に考證した結果、中弭説を妥當でないとし、「長弭」なる名稱は文獻には見えないが、

正倉院御物の御弓を見ると、弭の長さに長短があるから、其の弭の長いのを「長弭」と呼んだのであらうとせられた。而して「長弭の音」は、弓を射る時の弭の音で、弦の音が長弭に反響して鳴る音であると云ふのである。（『日本文學論纂』所收「奈加弭の考」參照）最後の説に従ふべきものと思ふ。○音すなり「なり」は所謂指定の助動詞で述語の語勢を強める作用がある。なほ是は名詞又は動詞を承ける助動詞であつて、動詞に接続する場合には、平安朝以後では其の連體形を承けるのが通則であるが、上代では一般に終止形に接続したのである。その用例は古事記に、「いたくさやぎて阿理那理」、集中に「鶯ぞ鳴きて伊奴奈流」（八二七）、「ほととぎす鳴きて故由奈里」（四三〇五）などがある。○今立たすらし「立たす」は「立つ」に敬語の助動詞の「す」が附いた形。「立つ」は「旅立つ」など云ふ「立つ」で、出發すること。「らし」は一般に或根據に基づいて推量する場合に用ゐられる助動詞である。此處では「長弭の音すなり」が推量の根據となつて居る。○夕獵に云々 此の歌は朝獵に出で立ち給ふ時に詠んで奉つたものである事は、反歌によつて明白である。然るに此處に「夕獵に今立たすらし」とあるのは、古義の説の如く、前に「朝には取り撫で給ひ夕にはい寄り立たしし」といふ對句があるから、それと照應させる爲に「夕獵に云々」を添へたのであつて、これは全く修辭の爲に軽く置いたまでの事である。○御執らしの梓弓の 此の二句は流布本に「御執梓能弓之」とあるので、從來はミトラシノアツサノユミノと訓んだのである。然し元曆校本には「御執能梓弓之」とあり、上にも「御執乃梓弓之」とあるから、今は此等に據つて「能」を「梓」の上に移して、ミトラシノアツサユミノと訓み改めた。なほ「御執らしの」以下四句は、前に歌つた句を繰返したのである。さて此の御歌の作者の中皇命は何處に居られるのであるか、といふ事に就いては諸説がある。古義には中皇命が後宮に在つて、弓弦

の鳴るのを聞き給うてお詠みになつたものと見てゐるが、新考には中皇命が内野の狩場にある行宮に居られて詠み給うた御歌と見てある。思ふに此の御作は、天皇が群臣を従へて皇居をお出ましになつて、内野の狩場へ向ひ給ふ時の光景を詠み給うたのであつて、弓弦の響は狩場に於ての事ではなく、早朝皇居を御出發になる時の光景である。

【譯】我が大君が朝には御手に執つてお撫でになり、夕には側に寄り添ひなどして愛で給ふ、梓弓の弦音が聞えてまゐります。今しも狩にお出掛けになるらしい。あれあのやうに梓弓の弦音が響いてまゐります。

【評】朝には云々夕には云々と歌つた對句を、「御執らしの梓弓の長弭の音すなり」で承けて一段とし、更にそれと對照的に「朝獵に云々夕獵に云々」の對句を置いて、再び「御執らしの梓弓の長弭の音すなり」を繰返して歌ひ收めた格調の上には、頻りに響き來る弓弦の音を活躍させてある。對偶法や反復法は、記紀歌謡の修辭法の主要なものであるが、此の御作に於てはそれらを極めて巧妙に用ゐて、格調と内容を全く融和させてある。内容表現共に、萬葉初期の長歌の特徴を代表する佳作であると思ふ。

反歌

四 たまきはる 宇智の大野に 馬並めて 朝踏ますらむ 其の草深野
玉 刻春 内 乃 大野爾 馬數 而 朝布麻須等六 其 草深野

【釋】○反歌 反歌は古くカヘシウタ又はミジカウタと訓まれてゐた。併し木村正辭博士が其の著美夫君志の別記に、荀子の「與愚以疑願聞反辭」を引き、なほ揚雄の註「反辭反覆敘說之辭、猶楚詞亂曰」を引いて、反歌は

反辭に倣つたものであると説かれて以來、音讀でハンカと訓む説が一般に行はれてゐる。さて反歌なる名稱は、支那の反辭に倣つたものであるかも知れないが、反歌の形態は反辭の刺戟を受けて發生したのではなく、其の萌芽は既に記紀歌謠の中に認められる。例へば仲哀天皇紀の歌謠に「彼方のあらら松原、松原に渡り行きて、椶弓にまり矢を副へ、うま人はうまんどちや、いとこはもいとこどち、いざ遇はな我は。たまきはる内の朝臣が、腹内は砂あれや、いざ遇はな我は。」といふのがある。此の歌の「たまきはる」以下は第二段であつて、而も其の形は萬葉に見る反歌と同様に短歌形式である。近世の學者本居内遠は、かやうな二段組織の長形式の歌謠の末節を、反歌の原形と認めてゐる。(『古調考』に據る)思ふに反歌の形式は、斯かる長形式の歌謠の末節が分離獨立して生じたのであつて、反歌は從來詠はれた歌が讀まれる歌となつたのを契機として發生したのである。次に反歌を伴なふ長歌の最も古いのは、此處に講ずる作であるから、反歌は舒明天皇の御代頃に發生したのであらう。(集中には反歌の無い長歌が四十首近くあるが、此等は概して集中の最も古い作品で、歌謠の性質を帯びたものが多い。)反歌の形態は殆ど全部短歌(外に旋頭歌が一首ある)であつて、その數は初めは一首であつたが、後には二首乃至數首を添へる事も行はれた。反歌の本質は、元來長歌に敍べた感情を統括純化するものであつたが、これも後には變遷して、長歌の内容を補足敷衍し、若しくは同一の内容を異なる態度で歌ふやうになつた。なほ集中には「反歌」を「短歌」と記した所がある。「短歌」は長歌を單に「歌」と呼ぶのに對して斯く記したのである。

○**たまきはる** 「内」「命」「世」などに懸る枕詞。代匠記や冠辭考の説によれば、魂極まるの義で、人が生れてから長らへる限りを遙かに懸けて云ふ語であつて、生きて居るうちといふ義で「うち」に冠し、轉じては「世」「命」な

どにも冠するのであるといふ。併し此の解釋は妥當とは思はれない。尙後の研究を俟つべきである。○馬並めて馬を並べて。「並む」は「並ぶ」の古語で、自動詞の時にはマ行四段に活用し、他動詞の時にはマ行下二段に活用する。ここは他動詞である。○朝踏ますらむ「す」は例の敬語の助動詞の終止形で、「らむ」は現在の推量を表す助動詞である。○其の草深野「其の」はかのの意味。「草深野」は上の「宇智の大野」と同じ野。「野」は「山越え奴由伎」(三九七八)「春の努爾」(八三七)などによつて知れるやうに、古くはヌと發音した。古語に「角」をツヌ、「篠」をシヌと云ひ、又「偲ぶ」をシヌブと發音したのと同じ類である。

【譯】今頃は廣い宇智の大野に、群臣と馬を並べて、あの草深い野原を踏み分けて、朝獵を催していらせられるであります。

【評】上古の山林原野には鳥獸が充ち満ちて、捕獲する人の手を待つてゐた。殊に渡鳥は地上に雲のやうな陰を投げて、峰から峰へ飛んで行き、高原の鹿の群は古事記に「其の立てる足は萩原の如く、指擧げたる角は枯樹の如し」と形容してゐるやうな壯觀を呈してゐた。上代人が農業を經濟生活の中心としたのは勿論であるが、其の暇には網や良や弓矢で盛に狩を行つたのであつて、當時の狩獵生活は記紀萬葉風土記等に反映してゐる。上古の民間に於ける狩獵は獲物を目的とする外に、農作物の被害を防ぐ爲にも行はれ、又上流社會に於ては一は武技を練る爲、一は壯快な娛樂として流行したやうである。右に講じた長歌は、斯かる狩獵生活を背景とするものであつて、其の反歌には狩場の情景が如實に想像せられてゐる。なほ大宮人が行つた鳥獸狩の盛觀は赤人の作歌(九二六・九二七)に詠まれて居り、貴族の鷹狩の有様は家持の作歌(四〇一一・四〇一五)によつて窺はれる。

幸_ニ讚岐國安益郡_一之時軍王見_レ山作歌

五

霞立つ 長き春日の 暮れにける わづきも知らず 群肝の 心を痛み ぬえ
 霞立 長 春日乃 晚 家流 和豆肝 之良受 村肝乃 心乎痛見 奴要
 こ鳥 うら歎_ナ居れば 玉襪_{たまたすき} 懸けの宜しく 遠つ神 吾が大君の 行幸の
 子鳥 ト 歎 居 者 珠手次 懸 乃宜 久 遠 神 吾 大王乃 行幸能
 山越_{やまこし}の風の 獨居る 吾が衣手に 朝夕_{あさゆふ}に 還らひぬれば 丈夫_{ますらを}と 思へる我
 山越 風乃 獨座 吾 衣手爾 朝夕爾 還 比奴禮婆 大夫登 念有 我
 も 草枕 旅にし有れば 思ひ遣る たづきを知らに 網の浦の 海人_{あま}處女_{をとめ}等
 母 草枕 客爾之有 者 思 遣 鶴 寸乎白 土 網能浦之 海 處女等
 が 燒く鹽の 思ひぞ焼ゆる 吾が下心_{したしころ}
 之 燒 鹽乃 念 曾所 燒 吾 下情

【釋】○幸 「幸」は行幸の意である。名詞の時はミユキと訓むが、此處は動詞であるからイデマスと訓む。「幸之時」はイデマシントキと訓む。○安益郡 和名抄に「讚岐國阿野郡」とある地で、今の綾歌郡の一部分である。此の地に行幸のあつた事は日本書紀に見えてゐないから、舒明天皇が十一年十二月に伊豫の温泉に行幸せられた序に、此の地方へも巡幸せられたものかと思はれる。○軍王 イクサノオホキミと訓む。傳は詳かでない。

○霞立つ 次の「春日」の枕詞とも見えるが、修飾句と見るのが妥當である。○長き春日 講義に「春は心のどかにして、冬の短き日を経たる心には甚だ長き心地するによりていふ」とある通りである。○わづきも知らず 「わづき」は他に用例もなく意義も明瞭でないので、此の一句の訓義に就いては諸説がある。代匠記には「わきも知らず」の「わき」の中間に「つ」が加はつたので、分ちも知らずの意であると云ひ(攷證同説)、また考には「手著」と似た語で、分ち著きも知らずの意であると云ひ、小琴には原文の「和」を「多」の誤と見て、タヅキモシラズと訓んで居る。又古義には原文の「豆」を衍字と見て、ワキモシラズと訓んでゐる。(新考同説)前後の句の意味から考へると、何時の間に日が暮れたのやら、それさへ知らずといふ意のやうであるが、訓義に就いては猶研究を要する。卷十二の「出づる日の入るわき知らぬ吾し苦しも」(二九四〇)又卷十の「春雨の降るわき知らず出でて来しかも」(一九一五)などの「わき知らず」と略同じ意味のやうである。○群肝の 「心」の枕詞。語義に關して冠辭考には「肝」は借字で「群肝」は「群き物」の義で、數多の意の「こころ」に言ひ懸けたのであるとし、古事記傳には腹中に多くの臟腑が群り集つて凝々しといふ意で、「心」に懸けたのであると云つてゐるが孰れも妥當でない。「群」は前に述べた如く數多の意である。思ふに「群肝」は内臓の事で、心のはたらきは群肝にあると考へて「心」に懸けたのであらう。○心を痛み 物思ひに堪へかねるのを「心痛し」といふ。「痛み」は形容詞「痛し」の語幹に語尾の「み」を添へて、副詞的修飾語としたのであつて、斯かる語形は奈良朝及びそれ以前に極めて屢用ゐられた特殊な形である。なほ是と同じ形の例を擧げるならば、下に出て来る「明日香風都を遠見いたづらに吹く」(五一)「すべを無見妹が名喚びて袖ぞ振りつる」(二〇七)或は「草枕旅を久流之美戀ひ居れば」(三六七四)「野を奈都可之美一夜寝にける」

〔四二四〕等がある。此の語形は主語を助詞の「を」で承けるのが特色であるが「を」の無い例もある。例へば「音のみぞ吾が泣くいたも術無三」(三三二一八)「戀思氣美慰めかねて」(三六二〇)の如きである。斯かる副詞的修飾語は理由又は原因を表すのであつて、此の歌の場合は心痛きによりての意である。一説に山田孝雄博士は此の語形は古く形容詞を動詞化してマ行四段に活用させた其の名残の連用形であつて、これは「悲し」に對する「哀しむ」或は「惜し」に對する「惜しむ」の關係と同じであると説いて、上の「を」は力強く言ふ爲の感動の助詞であると言つて居られる。(『奈良朝文法史』及び『萬葉集講義』卷第一参照)さて形容詞の語幹に「み」を添へたものは、右の用例の外に「——み思ふ」或は「——みす」といふ形で用ゐられる事もあるが、此等に就いては後にその條に述べる。○ぬえこ鳥 「こ」は「ゐのこ」(家)「ましこ」(猿)等の「こ」と同じ接尾語。「ぬえ鳥」は單に「ぬえ」(鶺鴒)とも云ふ。古くから怪鳥として人に忌み嫌はれた鳥で、學名を「とらつくみ」(虎鶺)と云ひ一名「ぬえじない」とも呼ばれる。燕雀類に屬する鳩ほどの鳥で、淡黄色に黒斑を混へた羽色が虎の皮に似てゐるので「虎鶺」の名がある。北國に繁殖し冬季に南方へ渡る鳥である。初夏の夜などにヒーヒョウと鳴く其の聲が、恨み泣くが如くで如何にも陰鬱な感じを與へるので、集中には「奴延鳥の呻吟ひ居るに」(八九二)の如く枕詞として用ゐてゐる。此處も次の「うら歎く」の枕詞である。○うら歎き居れば 原文の「ト歎居者」をウラナゲラレバ(流布本代匠記小琴略解古義等の訓)、ウラナゲキヲレバ(神田本新考の訓)、ウラフレラレバ(細井本の訓)等と訓む説もあるが、今は金澤文庫本・辭案抄考等の訓に據つてウラナキヲレバと訓む。「うら」の原義は表に對する裏であるが、轉じて心の中の意を表す。「うら



りどえぬ

悲し」「うら淋し」「うら戀ふ」「うら待つ」「うらやす」(心安)「うらやむ」(妬)等の「うら」が是である。次に「歎」は「居れば」といふ動詞に接して居るからナゲキと訓むべきであるが、それでは格調が面白くないからナキと訓むのである。○玉標「玉」は美稱の接頭語。「玉藻」「玉葛」「玉櫛」「玉橋」等の「玉」と同じである。標は肩に懸けるものであるから「懸く」の枕詞としたのである。なほ下に「歎火」の枕詞とした例がある。○懸けの宜しく 心にかけて思ふことの宜しき事にはの意で、下の「吾が衣手に朝夕に還らひぬれば」に懸る。即ち衣手が返るのは都へ還る兆とも思はれるから、それを「宜しく」と云つたのである。代匠記や考などに、此の句を直ちに下に續くものと見て、大君を神と申すのが如何にもふさはしく宜しき意に解いてゐるが、「宜しく」が連體形でなく連用形である點から見ても此の説は穩かでない。今は小琴や古義の説に従つて右のやうに解いた。○遠つ神 「遠つ」の「とほ」は「遠し」の語幹で、遠方又は遠い昔の意である。「つ」は「の」の意の古い助詞。「遠つ」は遠くのといふ意で、其の用例には「遠つ國」「遠つ人」「遠つ祖」「遠江」(遠つ淡海)等がある。さて「遠つ神」は代匠記の説の通り、遠く人間の境を離れた貴い神の意で、次の「吾が大君」に懸る修飾語である。○行幸の「行幸」を流布本にミユキと訓んであるが、考にイデマンと訓んだのがよい。天皇が行幸遊ばす山を指して「行幸の山」と歌つたのである。○山越の風の 流布本の訓にヤマコシノカセノとあるが、燈・放證講義にはヤマコスカゼノと訓んである。反歌に「山越乃風」とあるのに倣つて、此所もヤマコシノカゼノと訓んで置く。行幸遊ばす山の彼方から嶺越しに吹いて來る風がの意。○吾が衣手に「ころもで」は字面の通り衣の手即ち袖である。「そで」も亦衣手の義である。○朝夕に 流布本の訓にアサユフニとあるが、集中には「安佐欲比」「安沙余比」の如く「あさ」に對しては常に「よひ」と歌

萬葉集卷一

つてあるから、此處は考にアサヨヒニと訓んだのが妥當である。美夫君志に日の始と夜の始とを擧げて、毎日毎夜の意を表したのであると解いてゐる。○還らひぬれば「還らひ」は「還る」の未然形に、助動詞の「ふ」の連用形「ひ」が附いた形である。此の「ふ」の添うた語形を總て従來は波行延言と説明したのであるが、延言ではない。此の「ふ」はハ行四段に活用する助動詞であつて、四段活用の動詞の未然形を承けて、其の動作作用の反復又は繼續して行はれる意味を表す。集中には「久しく住ま波むと思ひて」(五七八)「語り繼ぎ言ひ繼が比けり」(八九四)「もみち葉の散ら布山邊」(三七〇四)「愛しく其が語ら倍ば」(九〇四)など幾らも用例がある。なほ此の助動詞は承接に際して、動詞の活用語尾を母音オに轉する事がある。例へば「咲く花も時に宇都呂布」(四二一四)「吾を除きて人は有らじと富己呂倍ど」(八九二)の如きである。此の「ふ」に就いて山田孝雄博士は『奈良朝文法史』に、繼續作用を示す助動詞であると説明されて居り、又安藤正次氏はその著『古代國語の研究』に、「贖ふ」「トふ」「數ふ」「歌ふ」などの「ふ」と根本に於て同一に歸する古代の動詞の語尾であると説かれてゐる。即ち助動詞と見るか語尾と見るか學者によつて見解が異なるのである。今は姑く助動詞と見做して置く。さて「還らひぬれば」を従來、風が吹き過ぎては又吹いて來る意に解いてゐたが、講義には、風が袖を吹き返すのを風自身がひるがへると歌つたのであると解いてある。卑見を以てすれば、海岸に近い處では午前と午後とで風の吹く方向が反對になるから、それを「還らひ」と言つたのであり、「吾が衣手に」と歌つたのは袖は風に殊に離り易いからである。○丈夫「ますらを」は増荒男の義で心の猛き男子の意。○草枕「旅」の枕詞。昔は旅で山野に野宿する時草を結んで枕としたから、「草枕」を「旅」に懸けたのである。○旅にし有れば「旅に出でゐるのである意。」「し」は事物を強く指示する助動詞であ

つて、集中に頻繁に現れて來る。○思ひ遣る 後世では推量する或は同情する意に用ゐるが、古くは漢語の「遣悶」と同じく、思ひを晴らし遣る義に用ゐた。集中に「思遣すべの田時も吾はなし逢はずて數多く月の經ぬれば」(二八九二)の如く用ゐてある。○たづきを知らに「たづき」は手著の義で手段方法術などの意。右に引用した歌にあるやうに「たどき」とも言ふ。「知らに」の「に」は後世の「ず」に當る古い打消の助動詞の連用形である。此の「に」に就いて少しく説明して置く。先づ「に」の用例を掲げるならば、「言はむ術せむ術知ら爾」(七九四)「さ夜ふけて行方を知ら爾」(三六二七)「そこも飽か爾と布勢の海に船浮け居て」(三九九一)「鶯の待ちかて爾せし梅が花」(八四五)の如きがある。此等の「に」は打消の助動詞「ず」の連用形とは多少用法を異にしてゐる。又「に」の外に「なく」といふ形があつて、是は「君が聞きつつ告げ奈久も憂し」(四二〇七)「我が泣く涙未だ干那久に」(七九八)の如く用ゐられてゐて、(此の「く」に就いては後に説明する)「告げなく」は告げぬこと、「干なく」は干ぬことの意味であるが、此の「なく」の「な」がやはり「に」と同系統に屬する否定の助動詞の未然形と認められるのである。さて打消の助動詞「ず」の活用は「ず」「ず」「ぬ」「ね」であるが、是はザ行に活用した助動詞とナ行に活用したものとの二種が、後世混合して出來た活用形であつて、前述の如く奈良朝時代以前に、否定の助動詞の未然形に「な」連用形に「に」があつたとすれば、古く打消の助動詞には「ず」の外に「な」(未然)「に」(連用)「ー」(終止形不明)「ぬ」(連體)「ね」(已然)のやうにナ行四段に活用したものが存在した事になる。然し萬葉時代には「な」及び「に」は右の如き特殊な用例を残して、其の他の活用形は既に消滅したのである。(『奈良朝文法史』『國語史概説』参照)さて此の句は術を知らないのでと云ふ意であつて、下の「思ひぞ焼ゆる」に續く。○網の浦 原文の「網」を「綱」の誤と

してツナノウラと訓み、和名抄に謂ふ津野郷であるとする説(考)があり、又「網」を「綾」の誤と見てアヤノウラとする説(古義所引の大町稻城の説)もあるが、原文には「網」と記されてゐるからアミノウラと訓むべきである。「網の浦」は其の地名が現在傳はつてゐないので從來未詳とせられてゐたが、近時白井繁太郎氏は次の如き考證によつて、今の香川縣綾歌郡坂出町の濱に當る事を明かにされた。今其の考證の概要を記して置く。明治三十二年に香川郡香西町の本津川の堤に建てられた「瀬居島漁場碑」(瀬居島は坂出町の沖合一里に在る)に「相傳、景行朝讃海有巨鱗。浦民畏之不敢出漁。天皇遣皇孫武鼓王除之。王結網掩殺鱗。莫遺類。百姓慶頼、因稱其地曰網浦云。」といふ古傳説が記してある。此の傳説は有名な讃岐の地方傳説で、香西成資著の『南海通記』にも『綾讃留靈王記』なる古書にある古傳説として、日本武尊の御子讃留靈王が大魚を退治した事が記されてゐる。此等の資料に見える記事を綜合して見た結果、「網の浦」は阿野郡福江の海岸即ち今の坂出町の濱である。なほ元祿の俳人岡西惟中の『白水郎のすさび』に、「名にし負ふ網のうら、泊の磯、松が浦眼にみちて云々」とあるのも、前後の關係から推して同



網之浦附近現圖

じ海濱を指したものであつたといふのである。(『國語國文の研究』第八號所載論文参照)○海人處女等 海人なる處女等の義。「處女」は集中に屢「未通女」とも書いてある。○焼く鹽の 藻鹽草を集めて其の鹽汁を煮て鹽を取るのをいふ。此の「の」は、如くにの意で、上の體言を承けて次の句の修飾語とする助詞である。即ち「網の浦の」以下

の三句は下に懸る譬喩的修飾語となつてゐる。今も讃岐國は坂出町から宇田都町一帯の海邊に鹽田が多く、坂出町は鹽の産地として著名である。○思ひぞ焼ゆる 流布本にオモヒゾヤクル(略解古義新考等同訓)とあるが、考及び攷證にはオモヒゾモユルと訓み講義も此の訓に従つて居る。原文に「所焼」とあるから自動詞にして、モユルともヤクルとも訓む事が出来る。今は「心は母延農」(八九七)「心には火さへ毛要都追」(四〇一)などの例を參考してモユルと訓んだ。「ぞ」は述語の意味を強める係の助詞。「句の意味は心が思ひに燃える即ち心を焦すことである。○吾が下心 「下」は「下思」「下戀」「下問」などと用ゐて、前述の「うら」と同じく表面に現さない意を添へる。此の「下心」は上の「焼ゆる」によつて敘述されてゐるのであつて、吾が心の中は思ひに焦れてゐるといふのである。

【譯】霞の立ち籠めた長い春の日も、いつ暮れて行つたのやらそれさへ知らないで、故郷戀しさの念に堪へかねて心の中で歎いて居ると、言葉に懸けて言ふだけでも嬉しい事には、神にまします我が大君の行幸の山の、彼方から山越しに吹いて来る風が、獨寝をして居る自分の袖に朝に夕に吹き還るので、心猛き丈夫だと思つてゐる我も、遠い旅に在る事であるから、心の思ひを晴らすべきすべがないので、恰も網の浦の海人の少女らが焼いてゐる鹽のやうに、私も故郷戀しさに胸を焦すことである。

【評】冒頭に眼前の光景を敘べて「霞立つ長き春日の云々」と歌ひ起したのは、望郷の念に堪へない旅人の心持を巧みに表現した感がある。旅に出て獨り故郷に思ひを寄せてゐる者にとつては、何を見ても物思ひの種となるものであるから、山越の風が朝夕に吹き還るのを見ても、慕郷の念に堪へられなかつたのは尤もである。「丈夫と思へ

る我も」の句によつて、自ら氣を取直さうとしてゐる事が表れてゐるが、初の方に「ぬえこ鳥うら歎き居れば」と歌ひ、最後に「思ひぞ焼ゆる吾が下心」と歌つてゐるのが、作者の眞情なのである。

反歌

六 山越の 風を時じみ 寐る夜落ちず 家なる妹を 懸けて偲びつ
山越乃 風乎時自見 寐 夜不 落 家在 妹乎 懸 而小竹櫃

【釋】○風を時じみ 「時じみ」はシク活用の形容詞の語幹「時じ」に「み」を添へて副詞的修飾語としたのであつて、前の「心を痛み」の「痛み」と同じ格の語である。「時じ」は古代の形容詞であつて、萬葉時代には其の活用形の一部が廢れたらしく、集中には「時自久ぞ雪は降るとふ」(二六)「この橋を等伎自久の香の木の実と名づけけらしも」(四二二)「冬ごもり時敷時と見すて行かば」(三八二)の如く、其の連用形と連體形が用ゐられて居り、その他には「何時も何時も來ませ我が背子時自異めやも」(四九二)のやうな、未然形に相當する特殊の形が存するだけである。「ときじ」は又「非時」或は「不時」の字で記されて居る。其の語義に就いて、代匠記には不斷の義であると云ひ、考には時を定めない意であると解き、古事記傳には時ならぬ意であると解いて居る。此の歌に於ては時を定めず風が吹く意にも解せられ、又時ならぬ寒い風が吹く意にも解せられるが、長歌の内容から推して、時を定めず吹く意と見るべきであらう。○寐る夜落ちず 「ぬる」は寢る意で、ナ行下二段活用動詞の連體形。上代に於ては此の動詞を單獨に用ゐて寢る意を表す場合もあるが、又「家思ふと伊乎禰す居れば」(四四〇〇)「夜を長み伊能年ら

えぬに」(三六八〇)の如く、「寐を寢」といふ特殊な形を用ゐた場合も多い。此の場合の「寐」は寢ることの意の名詞である。さて「寐を寢」を約めて「いぬ」と言ふ。次の「落ちず」は洩れずの意。(此の用法は現代語にもなほ存して居る。)集中に屢現れて來るが、又祝詞にも「鳴の八十嶋墮つる事無く」(祈年祭)の如く用ゐ、古事記にも「うち見る島の崎々かき見る磯の崎淤知受云々」(神代卷)の如き例がある。一句の意は連夜引續きの意。○家なる妹 「家なる」は家にあるの意。「妹」は夫婦兄弟其の他親しい間柄に於て、一般に男子から女子を親しんで呼ぶ時に用ゐるが、又女子相互の間にも用ゐる。此處は妻を指して居る。○懸けて偲びつ 「懸けて」は前述の通り心にかけての意。「しぬぶ」は後世の「しのぶ」と同じで、此處は心の中で戀ひ慕ふ意。古く「しのぶ」を「しぬぶ」と言つたのは、「野」を「ぬ」と言つたのと同類である。尙「しぬぶ」の用例を二二擧げるならば、「君が形見に見つと思奴幡む」(三三三)「思ひ姿えて志怒布らむ」(一一三二)「まを鏡懸けて之奴敵と」(三七六五)などがある。最後の「つ」は完了の助動詞であるが、此處は事實を確説してゐるのである。

【譯】山越しの風が時を定めず吹いて來るので、旅寢をする夜はいつの夜も洩れることなく、家に留まつてゐる妻を心に懸けて慕ふ事である。

【評】長歌に歌つた感情を要約統一して、短歌形式を以て端的に歌つた反歌の例である。

後崗本宮御宇天皇代 天豐財重日足姬天皇(讓)位後即三位後崗本宮

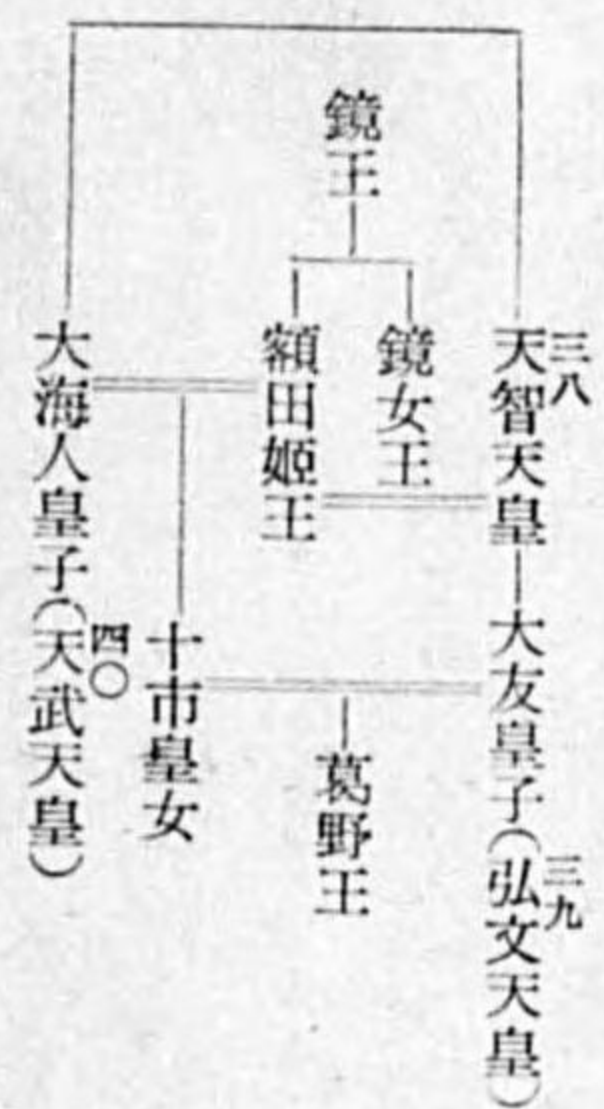
額田王歌

萬葉集卷一



△
 (八) 熟田津に 船乗せむと 月待てば 潮もかなひぬ 今は榜ぎ出でな
 熟田津爾 船乗世武登 月待者 潮毛可奈比沼 今者許藝乞 榮

【釋】○後崗本宮御宇天皇 齊明天皇を申す。「後崗本宮」は前に舒明天皇が皇居を營み給うた、飛鳥の崗本宮の舊地に營まれた宮であるから、「後」と云ふのである。○天豐財重日足姬天皇云々 「天豐財重日足姬天皇」は皇極天皇の御名で、後に重祚して齊明天皇となり給うた。原文に「位後即位」とあるのは、美夫君志の説の通り、此の上にあるべき「讓」の字が脱落したのであらう。○額田王 額田王は日本書紀天武天皇の二年正月の條に、「天皇初娶鏡女王額田姫王、生三十市皇女」とある其の額田姫王と同じ方であらうと言はれて居る。即ち額田王は鏡王の



御子、鏡女王の御妹で、大和國平群郡額田郷(今の生駒郡平端村)本多村に當る)に住んで居られたので、額田王と呼ばれたのである。始め大海人皇子(後の天武天皇)の寵を蒙つて、十市皇女(大友皇子の妃となられた方)を生み奉り、後に皇子の御兄なる天智天皇にも召されたやうである。さて額田王を「女王」と記してないのは、古くは女王をも單に「王」と言つたからである。額田王は萬葉第一期の代表的な女流歌人であつて、歌は本集卷一二四・八に長歌三首、短歌九首が傳はつてゐる。

○熟田津に 「熟田津」を従來は今の愛媛縣の三津濱の古名としてゐたが、昔の津は道後温泉の近くであつて、此の附近は後世埋没して陸地となつたのであるから、今の三津濱ではない。道後温泉の地形の變遷に就いては、後

に卷三(三三三)の條で説明する。「に」はに向つての意ではなく、卷三の「百磯城の大宮人の飽田津に船乗しけむ年の知らなく」(三三三)或は卷七の「何處にか舟乗しけむ高島の香取の浦ゆ漕ぎ出來し船」(一一七二)に於ける「飽田津に」や「何處に」の「に」と同じく、「に於て」即ち「で」の意である。(講義及び新釋參照)さて齊明天皇紀によれば、當時新羅は唐の後援を得て百濟を侵略し、百濟は救を我が國に求めたので、朝廷は百濟の再興を圖る事に決し、中大兄皇子は齊明天皇を奉じて筑紫にお下りになり、朝倉宮を行宮として軍士を奮勵せられたのである。今其の記事の中から、此の歌に關係のある部分を引いて見れば、「七年春正月丁酉朔壬寅、御船西征始就于海路。甲辰、御船到于大伯海。時大田姫皇女産レ女焉。仍名是女曰大田皇女。庚戌、御船泊于伊豫熟田津石湯行宮。三月丙申朔庚申、御船還至于娜大津。居于磐瀬行宮、天皇改レ此名曰長津云々」とある。「大伯」は備前國邑久郡であり、「熟田津石湯」は即ち道後温泉であり、「娜大津」は今の博多港である。即ち此の歌は其の西征の供奉に加はつてゐた作者が、伊豫の熟田津から筑紫を指して進發せられる際に詠んだものである。○船乗せむと 「船乗す」は船に乗る事であるが、此の歌にあつては船を乗り出す意に用ゐてある。○月待てば 月の出るのを待つて居るとの意。潮の干満が月と關係のある事は言ふまでもない事であつて、此の歌に「月待てば」とあるのは、潮の満ちるのを待つ意も含んで居る。○潮もかなひぬ 「潮も」は上の「月待てば」に對して、月も出で潮もかなひぬの意を表してゐる。「かなふ」は目的にかなふ意で、此處では船を乗り出すのに都合がよくなつた意である。○今は榜ぎ出でな 原文の「許藝乞榮」を流布本にコギコナと訓んで居り、考小琴古義には異訓も見えるが、代匠記初稿本の訓コギイデナが良い。「乞」をイデと訓む例には「乞吾君」(六六〇)「乞如何」(二八八九)等がある。「いで」

は他を促す時に發する感動詞。「な」は前に講じた「家聞かな」の「な」と同じで、希望を表す助詞である。

【譯】熟田津で船を乗り出さうとして、(船の用意をして)月の出るのを待つて居ると、やがて月が出て、潮も満ちて好い工合になりました。さあ船を漕ぎ出さうではありませんか。

【評】供奉の男女が岸に立ち並んでゐると、やがて波が足もとへひたひたと寄せるやうになり、又海上には月が現れて、波の上に銀のやうな光を投げ始めた。かやうな光景がありありと想像せられるやうな歌である。第四句まではゆるやかに歌つて來て一度句を切り、最後に八音の結尾句を置いて意志を力強く表示した格調が、女流の作とは思はれない程雄渾である。

中大兄近江宮御宇天皇三山歌一首

二三

香具山は 畝火を愛しと 耳梨と 相争ひき 神代より かくなるらし 古昔

も 然なれこそ 現身も 妻を 争ふらしき

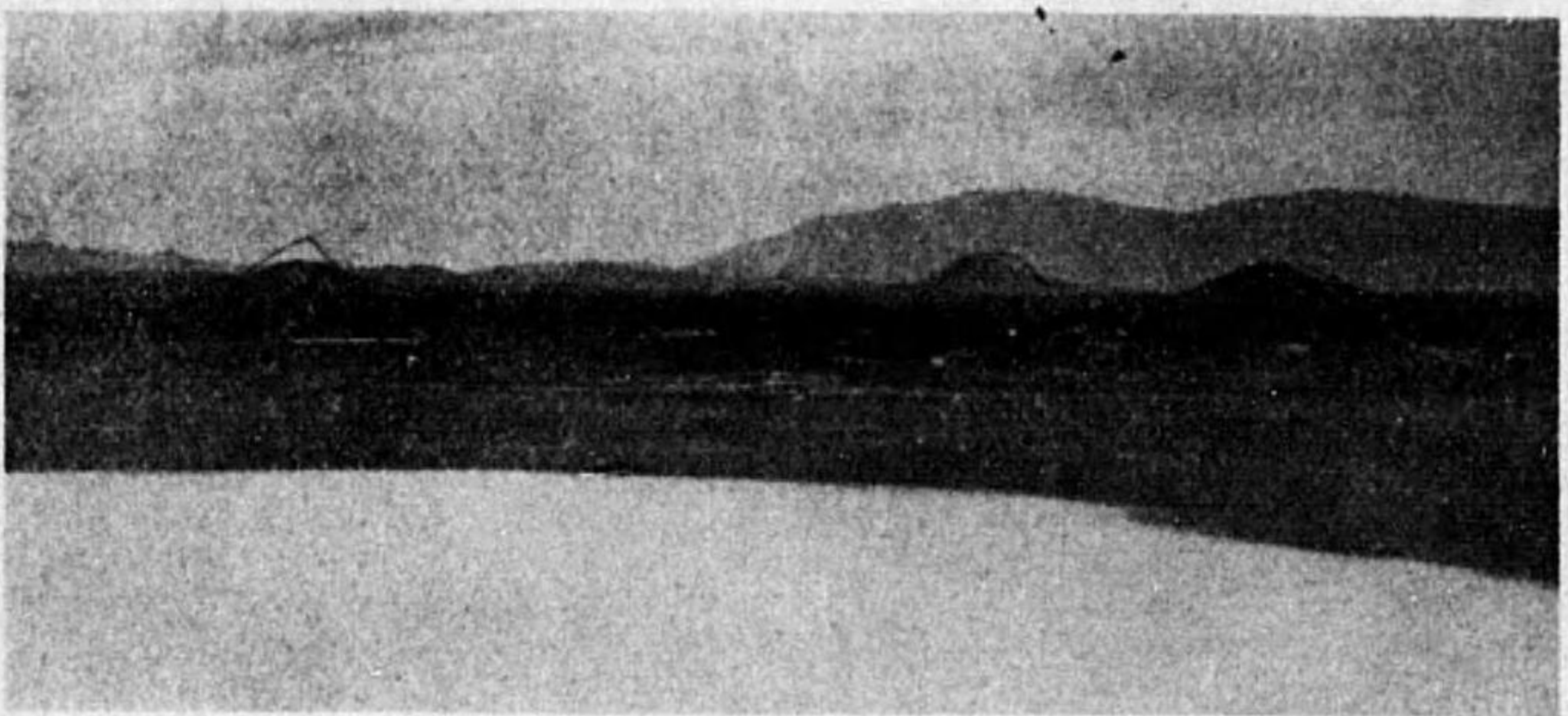
【釋】○中大兄 中大兄皇子で後の天智天皇である。此處には齊明天皇の御代の歌を擧げてゐるのであるから、當時の御名を掲げ奉つたのである。○近江宮御宇天皇 「中大兄」の註記である。「近江宮」は近江の天津宮であつて、一に志賀宮ともいふ。「二九」參看。○三山歌 「三山」は所謂大和三山であつて、香具山耳梨山畝火山をい

ふ。此の三山は大和平野に鼎の足のやうに聳え立つてゐて、飛鳥川が其の間を流れて居る。高さは何れも百四五

山成耳

山傍畝

山久香



十米乃至二百米であつてさまで高くはないが、平野の到る所から眺められ、其の三山で圍まれた地域は藤原京の在つた所であり、飛鳥京は其の東南に續く地であるから、萬葉歌人にとっては最も親しい山であつた。

【四三頁 地誌參照】此の三山歌は三山其のものをお詠みになつたのではなくして、三山の妻争の傳説をお詠みになつたのである。此の事に就いては尙下に述べる。

○香具山は 原文に「高山」とあるのは、「高」の字の古音を借りたのである。○畝火を愛しと 畝火山が女山で、それを男山なる香具山が愛すべきものとしてといふ意。「愛し」は「惜し」と同じ系統の語で、いつくし愛づべしなどの義を表す形容詞。「をしどり」(鶯鶯)の「をし」も此の「をし」である。仙覺抄には香具山を女山とし、耳梨山と畝火山を男山とし、「畝火ををし」を「畝火男男し」の義と解いて居り、代匠記以下の諸註は此の説に従つてゐる。然るに木下幸文の『亮々草紙』や、古義に引く所の大津眞潮の説などには、畝火山を女山とし耳梨山と香具山とを男山として、「をし」を愛しの義としてゐる。美夫君志新考講義全釋等は後説に従つ

てゐる。後の説の方が妥當である。○相争ひき 香具山と耳梨山とが、互に畝火山を妻にしようとして相争つたのを云ふ。此の御歌は此處で一段落である。三山妻争の説話は『播磨國風土記』にも見えて居る。其の文は下に引く。○かくなるらし 原文の字面を見て明かであるやうに、カクニアルラシの約言である。此のやうに妻争は神代以來ある事であるらしい意。○然なれこそ 然にあればこそ意。「なれ」は已然形であつて、此の下には後の語法ならば、通例順續の條件を示す接續助詞「ば」を添へるのであるが、當時は動詞助動詞の已然形のみで、既定の事實を條件として表す語法があつた。其の例は「後も逢はむと於母倍こそ露の命も繼ぎつつ渡れ」(三九三三)「吾妹子が如何に於毛倍かぬば玉の一夜も落ちず夢にし見ゆる」(三六四七)その外下に講ずる歌に幾らも見えて居る。「一九」の「思ほしめせか」を参照。○現身も 「うつせみ」は「現し身」と同じで、シガセに轉訛したのである。假名書の例に「宇都世美」とある。「現し身」は又「うつせみ」とも言つたのであつて、「宇都世美」と記した例がある。さて「現し身」は形容詞「現し」の語幹を、直ちに名詞の「身」に續けたのであつて、「現し心」「味酒」「黒髪」「麗し女」「賢し女」「利心」「愛し妻」「安寐」等と同類の語形である。前に説明した形容詞の終止形を名詞に續けて造つた熟語とは異なる。さて「現し」は「うつつ」(現)と同根の語であつて、現に在るの意を表す。「現し」の單獨の用例には、集中に「打布もまこと吾妹子吾に戀ひめや」(七七二)「後れ居て君に戀ひつつ宇都之家めやも」(三七五二)などがある。「現身」は此の世に現に生きてゐる人の意で、上に「神代」と言ひ「古昔」と言つたのに對して、現世に住む人を指したのである。(集中には、「うつせみの」を「世」「命」「人」「身」などに冠して枕詞とした例が數多ある。)原文に「虚蟬」と記したのは、「空蟬」「打蟬」などと記すのと同様に皆借訓である。○妻を 是は三音句であ

る。古歌に結尾を五三七で結んだもののある事は既に述べた。○争ふらしき 原文の「相格」を流布本にアヒツツと訓んであるが、管見にアラソフと訓んだのが妥當である。「格」は「格闘」の「格」で「捨」に通じ、闘ふの義がある。「らしき」は推量の助動詞「らし」の連體形で、上の「こそ」に對する結である。助動詞「らし」は平安朝になると終止連體已然の三形共に「らし」となつたが、上代には「らし」の外に「らしき」といふ活用形があつた。「らしき」の用例には「諾しこそ見る人毎に語り繼ぎ偲びけ良思吉」(一〇六五)「諾しかも蘇我の子等を大君の遣はず羅志積」(日本紀)などがある。なほ奈良朝時代には、係助詞「こそ」に對する結を形容詞や助動詞の連體形を以てしたのであるが、是に就いては後に述べる。

【譯】香具山は、女山の畝火山を愛すべきものと思つて、耳梨山と妻争をしたといふことである。して見れば神代の頃から、妻争はあつたものと見える。昔もさうであつたればこそ、現世の人々も妻を争ふものと思はれる。

【評】三山の妻争の説話に就いて多少の考察を試みようと思ふ。三山妻争の説話は、謡曲「三山」(世阿彌作)の素材となつて居るが、此の二つの説話を比較して見ると、時代を経る間に幾多の分子を取入れ、又時代の生活や思想の影響を受けて、著しい變遷があつた事を知るのである。三山の妻争と同型の説話は、萬葉集に幾つも見えて居るが、其の最も單純なものは山を擬人する思想、例へば妹背山の如きものである。山を擬人して歌つた作の多くは、山に男女の性を區別してゐるのであるが、中には二つの山の間に、簡單な戀物語が傳はつてゐたらしく思はれるものもある。例へば「背の山に直に向へる妹の山言聽せやも打橋渡す」(一一九三)の如きである。かくて二つの山が三つになつたのが即ち三山妻争の説話である。三山妻争の説話は廣く分布してゐたものと見えて、岩手に

次のやうな民間説話が傳はつてゐる。昔岩手山は其の近くに聳ゆる姫神山と夫婦であつたが、早池峯山が姫神山を欺いて奪ひ取つたので、今も此の三山は仲が悪く、早池峯と姫神が晴れると必ず岩手が曇り、岩手と姫神が晴れると必ず早池峯に雲が懸ると言はれてゐる。(『日本傳説集』參照)さて三山妻争の説話は、後に成長して純然たる戀愛物語となつた。本集の卷九(一八〇・一八〇九)にある茅沼壯士と菟原壯士が菟原處女を争つた説話の如きは、其の複雑なものであり且最も勝れた物語であるが、又卷十六(三七八六・三七八七)に見える櫻兒の傳説や、同卷(三七八八)以下三首に見える甕兒の物語や、卷三(四三一)卷九(一八〇七)卷十四(三三八四・三三八五)等にある勝鹿眞間娘子の説話などは、二人若しくは二人以上の男性が、一人の女性を妻にしようとして争つた點に於て、明かに三山妻争の説話の型に屬するものである。而して稍後世に生じたであらうと思はれる此等の妻争の説話には、それぞれ其の時代の戀愛生活や貞操觀念などが反映してゐて興味深いのであるが、三山妻争の説話は其の更に古い形式を保存するものとして興味がある。

反歌

一四

香具山と 耳梨山と 會ひし時 立ちて見に來し 印南國原
 高山與 耳梨山與 相之時 立 見爾來之 伊奈美國波良

【釋】○會ひし時 「會ふ」は行き逢ふ義から轉じて相聞ふ意を表す。日本書紀の神功皇后卷に「たまきはる内の朝臣が腹内は砂あれやいさ阿波な我は」とある其の「會ふ」も是と同じで、敵對行動に出るのをいふ。○立ちて見に

來し 此の句の主格は省かれてゐる。此の「見に來し」者は三山妻争の仲裁を試みようとした阿菩大神である。『播磨國風土記』揖保郡越部里の條に、「出雲國阿菩大神、聞大倭國敵火香山耳梨三山相聞、此欲諫止上來之時、到於此處乃聞闕止、覆其所乘之船而坐之。故號神阜。阜形似覆船」とある。即ち阿菩大神は出雲の神であつて、三山の妻争を仲裁する爲に、出雲を出立して播磨の神阜(新考に據れば神阜は今の揖保郡林田村の南方なる神岡村の地である)まで來た時に、三山は既に和解したと聞いて其の地に鎮座せられたと云ふのである。○印南國原 「印南」は後に兵庫縣の郡名となつた。「國原」は其の邊一帶の平野を指す。印南野は東は明石川から、西は加古川に至るまでの、明石加古印南三郡に互る方三里餘の平野であつて、萬葉集中に屢現れて來る地名である。四三八頁 地圖參照 此の句には述語が省かれてゐる。其の印南の原は此處であるといふのである。『播磨國風土記』によれば、阿菩大神が仲裁に來る途中鎮座せられたのは揖保郡神阜であつて、印南郡ではない。此の點に就いては從來種々に解せられたが、要するに此の御歌は皇子が印南野を旅行せられた時の御作であるらしく、従つて印南國原をお詠み込みになつたのであつて、必ずしも傳説地を嚴格に示されたのではない。即ち長歌に三山の傳説をお詠みになつた關係から、三山に關係のある阿菩大神の説話を思ひ浮べ給うて、其の傳説地を漠然と此處であるぞと、お歌ひになつたものと見て差支ないやうである。

【譯】昔香具山と耳梨山とが、敵火山を我が妻にしようとして相聞つた時、出雲の阿菩大神が立つて見に來られたと傳へられてゐる印南野は此處だなあ。

【評】右に講じた三山の歌は、中大兄皇子が播磨地方にいました時に詠み給うたものであるらしい事は、既述の

通りである。なほ此の御歌は、中大兄皇子と大海人皇子とが共に額田王を御寵愛になつてゐた頃に、中大兄皇子が御胸中の御惱を三山の古傳説に託して、詠み給うたものであるやうに見た學者がある。(『玉勝間』『長等の山風』『萬葉集美夫君志』等参照)併し此の御歌は、單に三山の妻争の古傳説を詠み給うたものと見ても差支ないやうである。

二五

渡津海の 豊旗雲に 入日さし 今夜の月夜 清く照りこそ
渡津海乃 豊旗雲爾 伊理比沙之 今夜乃月夜 清 明 已曾

右一首歌今案不似反歌也。但舊本以此歌載於反歌。故今猶載此歌。

亦紀曰天豐財重日足姬天皇先四年乙巳立天皇爲皇太子。

【釋】○渡津海の「わたつみ」はもと海の主宰神なる「綿津見神」の名であるが、轉じて海の義に用ゐられる。即ち「わたつみの」は海原のの意。さて「わた」は渡の意で海を指し、「つみ」は山の神なる「大山津見神」の「つみ」と同じである。其の「つみ」の「つ」は、「天つ神」「外つ國」などの「つ」と同じく「の」といふ意の助詞であり、「み」は支配者を指す古代語であるらしい。内藤虎次郎博士は「つみ」は帝王又は神の義を表す朝鮮の古語であると解釋して居られる。(『日本文化史研究』五一頁参照)参考の爲引いて置く。○豊旗雲に「豊」は「豊葦原」「豊明」「豊御酒」「豊榮登」「豊壽ぐ」等の「豊」と同じで、盛大なる又は豊饒なるの意を添へる美稱の接頭語。「旗雲」は旗のやうに横に長くたなひいてゐる雲をいふ。文徳實錄に「天安二年六月庚子、早且有白雲、自良亘坤、時人謂之旗雲。」と

ある。○入日さし「入」日の光がさし照つてゐるの意。「さし」の下には助動詞の「ぬ」を補つて見るべき所である。以上三句は現在の光景を歌つたのである。○今夜の月夜「今夜」は「許余比」の如き假名書の例に據つてコヨヒと訓む。此の宵の義。「月夜」は「都久欲」と記した例に倣つてツクヨと訓む。「月夜」の「夜」は軽く添へた語で、月を指してゐる。今も「よい月夜だ」などと云ふのは是と同じ用法である。○清く照りこそ 原文の「清明已曾」の訓釋に就いては古來諸説がある。流布本にスマアカクコソ、僻案抄にサヤケシトコソと訓んで居るが、何れも妥當でない。考には日本書紀に「清白心」とあるのに倣つて、此の句をアキラケクコソと訓んで居る。又古義には集中に「野邊さへ清照月夜かも」(一〇七〇)「雨晴れて清照有この月夜」(一五六九)の如く、「清く照る」と用ゐた例が多いので、此處も「清明」の「明」を「照」の誤字と見て、一句をキヨクテリコソと訓んで居る。なほ新解には原の儘をキヨアカリコソと訓んで居る。從來一般に行はれたのは考の訓アキラケクコソであつて、略解燈證檜燭手美夫君志新考講義等は是に従つてゐる。而して最後の「こそ」に就いては、之を係の助詞と見て「こそあらめ」の意と見る説(代匠記考略解新考講義)と、「こそ」を願望の意を表す助詞とする説(燈古義美夫君志私解)とがある。一體集中に於て、文の最後に用ゐられた「こそ」の用法を分類して見ると、次の三種に歸するのである。即ち最も多いのは、「夢に見えこそ」「妹に告げこそ」の如く、動詞の連用形を承けて願望の意を表す場合である。其の外には「息の緒に吾は思へど人目多みこそ」(二三五九)の如く副詞句を承け、若しくは「贖ふ命は妹が爲こそ」(三三〇一)「絶えずて人を見まく欲れこそ」(七〇四)の如く、下に来るべき用言を省いて理由を強く指示する意味に用ゐた場合である。然るにアキラケクコソと訓めば、「あきらけく」は形容詞の連用形である。形容詞の連用形を承けて

「こそ」が願望を表した例は無く、又「こそ」が形容詞を承けて、「こそあらめ」の意を表した例も外に無い。よつて考の訓は穩當でない。此の歌は「こそ」で終止してゐるから、「こそ」の用法から見ると、其の上の「清明」は動詞の連用形でなければならぬ。新解に之をキョクアカリと訓んであるが、月の照る事を「あかる」と言つた例は無いから、これも穩かでない。思ふに「明」に「照」の義があるから、今は「清明已曾」を古義の訓に従つてキョクテリコンと訓んで置く。一句の意はどうか清かに照り渡つて欲しいものだといふのである。○右一首云々 此の左註の意味は、右の一首は三山歌の反歌とは思はれないが、舊本に反歌として載せてあるから、今假に此處に載せる事にしたといふのであつて、編纂者の加へた註である。如何にも是は三山歌の反歌ではない。考に此の一首は、右の三山歌をお詠みになつた時と同じ時に、印南地方の海濱でお歌ひになつたものであらうと云つて居る。併しこれも臆測に過ぎない。要するに此の一首には題詞が脱ちてゐるのであらう。

【譯】海上遙かにたなびく雲に入日が赤々とさしてゐる。どうか今宵の月は、清く照り渡つて欲しいものである。

【評】海雲：入日月と排列せられた素材が何れも重要な役目をつとめて居り、作者の感情が此等の天象を追うて推移する徑路が、極めて自然に歌はれてゐる。第三句目で一度切れてゐるのも、内容にふさはしい雄渾の調となつてゐる。尤も名詞が多く動詞や助動詞が少い爲に、韻律の美を缺く憾がある。

近江大津宮御宇天皇代

天命開別天皇

天皇詔：内大臣藤原朝臣、競憐春山萬花之艶、秋山千葉之彩時、

額田王以歌判之歌



冬ごもり 春さり來れば 鳴かざりし 鳥も來鳴きぬ 咲かざりし 花も咲け
冬木成 春去 來 者 不 喧有之 鳥毛來鳴 奴 不開有之 花毛佐家

れど 山を茂み 入りても取らず 草深み 取りても見ず 秋山の 木の葉を
禮籽 山乎茂 入 而毛不 取 草深 執 手母不見 秋山乃 木 葉乎

見ては 黄葉をば 取りてぞ惚ぶ 青きをば 置きてぞ歎く そこし恨めし
見而者 黄葉乎婆 取 而曾思奴布 青 乎者 置 而曾歎久 曾許之恨 之

秋山吾は
秋山吾者

【釋】○近江大津宮 天智天皇の皇居。「大津宮」に就いては(一九)の條に説明する。○天命開別天皇 天智天皇の御名。○内大臣藤原朝臣 藤原鎌足である。○競憐春山萬花之艶云々 考に「春山ノ花ノニホヒト秋山ノモミヂバナ色トヲアラソハセタマフトキ」と訓んで居る。「競憐」はあはれを競ふこと。「萬花」は種々の花の意で、「千葉」は種々の黄葉の意である。○判之歌 兩者の優劣を歌を以て判じたのである。「判」はコトワルと訓む。

○冬ごもり 原文に「冬木成」とある。攷證の説によれば、「成」は「盛」に通ずる文字であるから、モリと訓ませたのであるといふ。「冬ごもり」は「春」の枕詞。考の説に冬は萬づの物が内に籠つてゐるが、春になると張り出るか

ら此の枕詞があるのであると云ふ。此の説は從來廣く行はれたのであるが、次に引く新解の説の方が勝つて居るやうである。即ち「こもり」を用いた句には、「雨ごもり」「水ごもり」「藪ごもり」「夜ごもり」「月ごもり」等があり、又一方に「夜をこめて」がある。又「冬ごもり」を用いた例歌に、古今集の序中に「難波津に咲くやこの花冬ごもり今を春べと咲くやこの花」や、本集卷三に「冬ごもり時じき時と見すていなば益して戀ひしみ云々」等がある。此等の「こもり」の用例によれば「冬ごもり」には冬がまだ残つてゐる、即ち冬の終頃に春を待つ意がある。是が轉じて春の枕詞になつたものらしいといふのである。(『萬葉集新解』五二―七頁参照)○春さり來れば 春がやつて來るとの意。從來「さり」は助詞の「し」と、存在を表す動詞の「あり」とが複合して、音が約まつたものであると解釋されてゐたが、是は徳田淨氏並に山田孝雄博士の説に従つて、「去る」といふ四段活用動詞と見るのが正しい。「去る」は「去」の字義の外に、「しさる」(後去るの義)「ゐさる」(居去るの義)などのやうに、廣く移動進行を表す時にも用ゐられる。即ち「去」の字義の外に、「來」の字義にも用ゐられるのである。従つて「春さり來れば」は春となつて來ればの義を表すのであつて、「秋さらば」「夕されば」「朝さらば」或は「夜さり」なども此の意で解かれる。(『萬葉集講義』卷第一、九五頁参照)○鳥も來鳴きぬ 「ぬ」は完了の助動詞であるが、此處では調を助ける爲に軽く添へたのである。○花も咲けれど 「咲けれど」は「咲く」に助動詞「り」の已然形が附いた形で、咲いてゐるけれどもの意。「鳥も來鳴きぬ」に對して「花も咲けり」と言ふべきを、「ど」で承けて下へ續けたのである。○山を茂み「茂」を流布本にシゲミと訓んだのを考にシミ、略解・放證・古義・新考同訓)と訓み改めてゐるが、流布本の訓の方が穩かである。(シミとシゲミの可否に就いては、山田孝雄博士の説が『アララギ』第十五卷第四號に掲載されてゐる)

る)「茂み」は上の「心を痛み」「風を時じみ」の場合と同じく、形容詞の語幹に「み」が附いて副詞的修飾語となつたもので、山が茂つてゐるのである。○入りても取らず 原文の「取」を「見」「聞」「聽」などの誤字とする説がある。「見」「聽」などの誤と見るのは、前の對句の鳥と花とを、後の對句でそれぞれ承けたものとしての説である。併し後の句を見ると、専ら春秋の木を比較してゐるのであつて、此處は春の木の花に就いて「山を茂み入りても取らず」と「草深み取りても見ず」の、二句の對句で述べたものと見るのが妥當である。従つて「取」は原の儘でよく通じる。さて「山を茂み云々」の意味は講義の説の通り、春は草木が繁つてゐるばかりでなく、昆蟲なども多く出る頃であるから、婦人の身には何となく山に分け入り難い點があるのを、春山の缺點とするといふのである。○取りても見ず 原文の「執手母不見」を僻案抄にタヲリテモミズ(考略解同訓)と訓んであるが、小琴にトリテモミズと訓んだのに従ふべきである。此の句で春の山に就いての敘述を終つたのであつて、此處で一段落である。○黄葉をば 此の句を考にモミヅヲバと訓み、略解・燈・放證・古義・美夫君志等は是に従つて居るが、流布本の訓にモミチヲハとあるのが妥當である。「秋山の毛美知を挿頭し」(三七〇七)の如き假名書の用例がある。「もみち」は又「もみちば」と歌つた例も多くあつて、樹木の葉の赤く又は黄色に色附いたのを指して言ふ。假名書の外には多く「黄葉」と記してあるが、「黄變」「赤葉」などと記した例もある。「もみち」は元來動詞の「もみづ」の連用を名詞としたのである。「もみづ」の活用に就いては、四段活用説と上二段活用説とがあるが、是は上代に於て四段に活用したのが、平安朝時代に入つて上二段活用に轉じたとするのが正しいやうである。(『國語國文』卷第九號所載池田併治氏論文参照)○取りてぞ偲ぶ 「しぬぶ」は心の中で私に慕ふ意にも用ゐるが、

でる賞美するの意である。その用例には「更に梅を之奴波む」(四二七八)「在り通ひ見つつ思努波めこを」(四一八七)などがある。「ぞ」は「偲ぶ」の意を強める助詞。○置きてぞ歎く 其の儘にさし置いて悞

「黄葉をば云々」と「青きをば云々」とは二句對句である。○そこし恨めし 「そこ」は場所を示す代名

じて「それ」と同じく其の事其の點などの意に用ゐられる。同様に「ここ」を「これ」の意に用ゐた例も

の用例には「則許思へば心し痛し」(四〇〇六)「會己故に心なぐやと」(四一五四)などがあり、「ここ」の用

己思へば胸こそ痛め」(一六二九)の如きがある。「し」は「そこ」を強く指示する爲の助詞。次に原文の「恨之

見代匠記以下諸註の訓に従つてウラメシと訓むのがよい。小琴には「恨」を「怜」の誤と見て「怜之」をオモシロシ

訓み、古義にはそれをタヌシと訓んで居るが、「怜之」と記した古寫本は見當らないから、此等の説には従ひ難

意味は攷證や美夫君志の解の通り、青い木の葉はさし置いた儘未だ色附かないのを歎くのであるが、此の點だけ

が秋山の缺點として恨めしく思はれると云ふのである。○秋山吾は 流布本にアキヤマソワレハ、僻案抄にアキ

ヤマソワレハと訓み、考には「山」の下に「會」が脱ちてゐると云つてゐる。今は小琴の訓に従つてアキヤマソワレハ

と訓んで置く。秋山の方を私は勝れて居ると思ふといふ意。即ち此の一句によつて判断を下して、一首の結尾句

としたのである。

【譯】春になりますと今まで鳴かなかつた鳥も來て鳴き、又含んでゐた花も咲きは致しますけれど、春の山はとか

く木が繁つてゐますので、女の身としては分け入つて花を手折る事も出來ず、又草が深いので親しく手に取つて

見る事も出來ません。然るに秋の山の木々の葉を見ます時には、其の美しい紅葉をば親しく手に取つて賞美し、

青い葉はさし置いてまだ色附いてゐないのを歎くのでございます。此の青い葉のある點だけが、秋の山に對する恨であります。そこで私は秋山の方が勝れてゐると思ひます。

【評】此の作は二句對句を連ね用ゐた形式的修辭法も巧みであるが、其の内容は更に勝れてゐる。即ち元來優劣の判断に迷ふ春花秋葉を比較するに當つて、作者は自分が女性であるといふ立場から、春の山の分け入り難い點を擧げて、秋の山の方に左袒してゐるのであるが、なほ「青きをば置きてぞ歎くそこし恨めし」と歌つて、秋山にも一點の難を打ち、それによつて優劣の判じ難い心持を示して居る。而して最後に至つて、強く「秋山吾は」と言ひ放つたのも非凡と言ふべきである。春秋の優劣を判する事は、もと支那で行はれた遊びであつて、我が國でもそれに倣つて試みられたやうであるが、物に見えたのは此の歌を嚆矢とする。是より後には花と紅葉とを闘はせたり、鶯と時鳥の優劣を判じたりした例が屢見えて居る。貫之の歌に「春秋に思ひみだれてわきかねつ時につけつ移る心は」(拾遺集)とあるのは判じ煩つた例である。讀人知らずの歌に「春はただ花のひとへに咲くばかり物のあはれは秋ぞまさされる」(同)とあるのは、秋に心を寄せた例であり、孝標の女が源資通に春秋の優劣を問はれた時、「淺緑花もひとつに霞みつつ朧に見ゆる春の夜の月」(更級日記)と答へたのは春に心を寄せた例である。

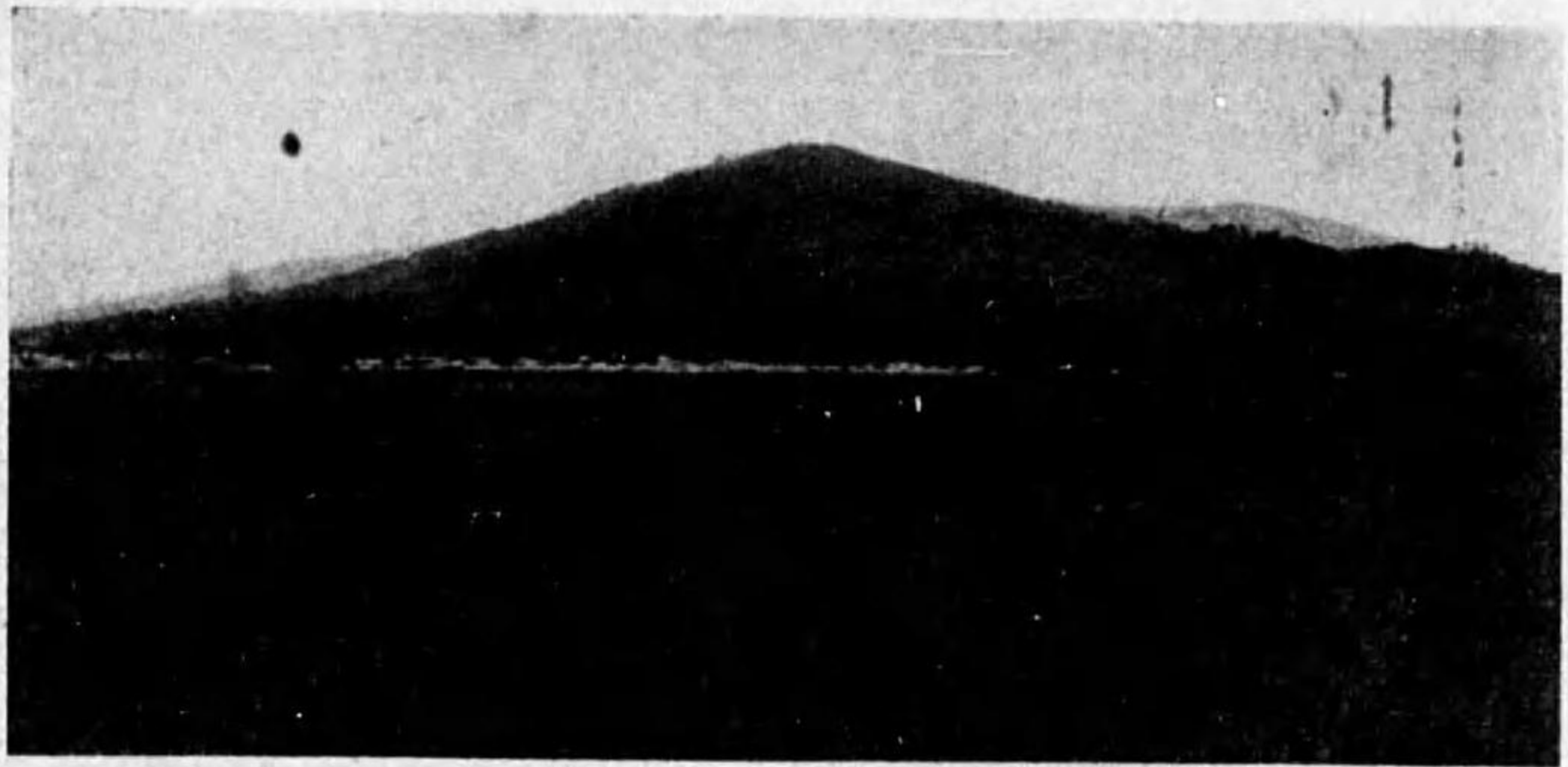
額田王下近江國時作歌井戸王即和歌

一七 うま酒 三輪の山 青丹よし 奈良の山の 山の際に い隠るまで 道の隈
味酒 三輪乃山 青丹吉 奈良能山乃 山際 伊隱 萬代 道隈

い積るまでに つばらにも 見つつ行かむを しばしばも 見放けむ山を 心
 伊積流萬代爾 委曲毛 見管行 武雄 數數毛 見放 武八萬雄 情
 無く 雲の 隠さふべしや
 無 雲乃 隱障 倍之也

【釋】○額田王下近江國時作歌云々 此の詞書の文面には疑問があるので、從來種々の解釋が行はれた。先づ代匠記精撰本には「井戸王即和歌」は、「一九」の「綜麻形乃云々」(此の歌は本書には省いた)の歌の題詞であらうかと疑つて居る。次に考には、此の歌の左註に「山上憶良大夫類聚歌林曰、遷都近江國時、御覽三輪山御歌焉。」とあるのは、高貴の御歌である事を示すものであつて、此の長歌は男子の歌らしく思はれ、一方下の「綜麻形乃」の歌に「わが背」とあるのは即ち女子の作であつて、是こそ却つて額田王の歌であらうと云つて、此の詞書を「大海人皇子命下近江國時御作歌」と改めて居る。次に燈には、右の詞書の「額田王」と「井戸王」とは誤つて御名を置き換へたのであると云つて、此の作を井戸王の歌とし、下の「綜麻形乃」の歌を額田王の歌と見て居る。要に此の詞書には錯簡があるらしいが、今は姑く原文を尊重して、此の長歌及び反歌を額田王の御歌として置く。而して「井戸王即和歌」は下の「綜麻形乃」の歌の詞書であるか否かは疑問であるが、此の長歌及び反歌には無關係のもののやうに思はれる。

○うま酒 「三輪」に懸る四音の枕詞である。「うま酒」はうまき酒の義で、酒を賞め稱へていふ語。これが「三輪」の枕詞となつたのは、古語に神酒を「みわ」と云つたからである。和名抄に「日本紀私記云、神酒和語云三」とある。



萬葉集卷一

集中に「哭澤なみさの神社かみに神酒かみす祈れども」(二〇二)「齋いひ串立くしだてて神酒かみす奉る云々」(三三九)などであるのは、神酒を盛つた器の甕かみを地に掘り据ゑて、神に供へることを云ふのである。集中には此の枕詞を五音にして、「うま酒を」又は「うま酒の」と詠んだ例がある。なほ此の枕詞を「三輪山」の別名「三諸山」に懸けた例もあり、又うま酒を醸かむ意から「神南備山」に冠した用例もある。○三輪の山 三輪の山よと呼び掛けたのである。次の句への続き方は、其の山を云々と続くのである。「三輪山」は一に「三諸山」とも呼ばれた。大和國磯城郡三輪町の東北方に聳えてゐる姿の美しい山であつて、全山鬱蒼たる森林で覆はれて居る。其の西南の麓に、古來名高い三輪の神を祀れる官幣大社大神神社がある。記紀に見ゆる古傳説によれば、大國主命が國土避讓の時、自らの和魂を此の山に鎮めて、皇室の近き守神とせられたのが神社の起原である。○青丹よし

「奈良」の枕詞。「よ」は呼び掛ける意の助詞であり、「し」は指示する意の助詞である事は、枕詞の「麻裳よし」「玉藻よし」「眞菅よし」などの「よし」と同様である。「青丹」に就いては種々の説がある。(イ)仙覺抄には「青丹」を色の青い土繪具の義として、昔奈良山から青丹を産したので、

此の枕詞を生じたのであると云ひ(古事記傳同説)、(ロ)僻案抄には「に」を助詞として、青い色を賞でる意から「檜」に懸けたのであると云ひ、(ハ)冠辭考には「あをに」を「八百土」の轉訛した語と見て、「八百土」を平らすの義によつて「奈良」に懸けたのであると解いて居る。(ニ)長井金風氏は檜の實は青くて玉のやうに美しいから「青瓊よし」の語を生じたのであると解釋して居る。要するに未だ明確な解釋が下されてゐないのであるが、從來廣く行はれたのは仙覺及び宣長の説である。○奈良の山の平城京の北部即ち春日山から西北に連なる一帯の丘陵であつて、今の郡山街道を北行して歌姫越に差掛るあたりの山彙が、古の奈良山である。これを越えて山城の木津に出で、相樂を経て近江へ行くのである。而して奈良山から南方の三輪山までは、直徑五里許りであつて、其の間には何等眼を遮るものが無いから、三輪山はよく見えるのであるが、奈良山を向へ越してしまふと、三輪山は全く見えなくなる。○山の際に「山際」をヤマノハニ(流布本燈)、ヤマキハニ(拾穂抄)、ヤマノカヒ(僻案抄)など訓む説もあるが、攷證の訓のヤマノマニ(美夫君志新考講義同訓)が正しい。又考には「山際」の下に「從」を補つて、ヤマノマユと訓んで居るが、原文の儘をニを添へてヤマノマニと訓むべきである。「際」の字義は間又は界の義であるから、「山の際」は山と山との間を指したのである。○「隠るまで」「い」は語調を強め且整へる爲の接頭語。(既出)下の「い積る」「い」もこれと同じ。「かくる」(隠)は古事記に「青山に日が迦久良ば」(神代卷)「媛女の伊加久流岡を」(雄略記)、日本書紀に「我が大君の詞句理ます」(推古紀)等の假名書の用例があるので、古くは「隠ら」(未然)「隠り」(連用)「隠る」(終止連體)「隠れ」(已然命令)と四段に活用した事が判る。古く四段に活用した動詞で、後世下二段活用に轉じたものは幾らもある。次に「まで」は多く用言の連體形を承ける助詞であるか

ら、此の句はイカクルマデと訓む。流布本代匠記僻案抄考略解等の訓にイカクルマデとあるのは誤である。

○道の隈 道の曲り目をいふ。卷十三に「道の隈八十隈毎に嗟きつつ吾が過ぎ行けば」(三三四〇)といふ例がある。

「隈」は總て曲つて隠れてゐる所を云ふのであつて、川岸の曲り目を「川隈」といふ。「道の隈い積るまで」には、通つて來た道を振り返つて歌つたのであつて、道が段々遠く距つて、曲り角が幾つも幾つも後になつて行くまでの意。○つばらにも「委曲毛」を流布本にマクハシモ、元曆校本古葉略類聚鈔等にクハシクモ、僻案抄にイクタビモ、古義に「毛」を「爾」に改めてツバラカニと訓んで居るが、考の訓のツバラニモが妥當である。卷十八に「都波良都婆良に吾家し思ほゆ」(四〇六五)の如き用例がある。「つばら」は又「都婆良可」に今日は暮らさね(四一五二)の如く「つばらか」とも言つた。此の語は「つぶら」「つぶさ」等と關係のある語であつて、後世の「つまびらか」に當る。即ち委曲に詳細に十分にといふ意である。○見つつ行かむを 眺め眺めして行きたい山であるものをの意。「行かむを」は「行かむ山を」と言ふべき所であるが、下に「見放けむ山を」と歌つてゐるから、「山」を下に譲つて此處には省いたのである。「を」は下に現れる「隠さふ」の客語を示す格助詞であると共に、感動助詞の役目をも兼ねてゐる。○見放けむ山を 「放く」は下二段活用の他動詞で、四段活用の自動詞「さかる」(離)に對して、離す又は隔てるの意を表す。「放く」は元來「避く」「裂く」「咲く」「退く」等と語根を同じうする同系統の動詞であつて、此等には何れも離れる意がある。「見放く」は「天の原布里左氣見つつ」(四二二五)の「振り放け見る」と同義で、眼を遠くへ放つて望み見る意。「む」は此處では作者の意志を表してゐる。一句の意は眺めたい山であるのにそれをと云ふのである。○心無く 流布本に此の句を下の「雲乃」に續けて、ココロナキクモノと訓んで居るが、ココロナ

クで切つて一句とする小琴の説に従ふべきである。「心無く」は無情にも意で、下の「隠さふべしや」に懸る修飾句。○雲の 三音の句である。○隠さふべしや 「隠さふ」は「隠す」といふ動詞に、動作の繼續を表す助動詞の「ふ」が附いたのである。「ふ」はハ行四段に活用する。「隠さふ」の用例には「加久佐波ぬ赤き心を」(四四六五)の如きがある。「や」は反語の助詞であるから、一句の意はかくの如く隠すべきであらうかと恨み嘆く意になる。

【譯】なつかしい三輪の山よ。あの山が奈良の山の中に隠れてしまふまで、又行く道の曲り角が後に積り重なるまで、十分に眺めながら行きたい山であるものを、度々振り返つても見たい山であるものを、無情にもあんなに雲が隠すべきだらうか。さても名残惜しいことである。

【評】此の歌は額田王が天智天皇に召されて、大海人皇子の許を去つて近江の大津宮へ赴かれる際の、去り難き哀惜の情を三輪山に託して歌はれたものであらうと云ふ説がある。如何にも此の長歌並に反歌には、單なる近江への旅路の歌とは思はれぬまでに、故郷に對する悲痛な惜別の情が表れてゐる。先づ冒頭には枕詞を置き、中間には對句を用ゐて、作者の纏綿として盡きせぬ名残惜しさを歌ひ來つて、最後に倒置法を以て絶叫するやうに力強く恨みの情を表現してあるので、徐々に高まり行く感情がさながらに一首の格調の上に流露してゐる。

反歌

三輪山を 然も隠すか 雲だにも 心あらなむ 隠さふべしや
三輪山乎 然毛隠 賀 雲谷 裳 情有 南武 可苦佐布倍思哉

右二首歌、山上憶良大夫類聚歌林曰、遷都近江國時、御覽三輪山御歌焉。

日本書紀曰、六年丙寅春三月辛酉朔己卯、遷都于近江。

【釋】○然も隠すか 「も」は感動の助詞。最後の「か」は疑問若しくは感動詠歎の意を表す助詞であつて、此處では詠歎を表してゐる。○雲だにも せめて雲になりとももの意。○心あらなむ 原文の「南武」は類聚古集に據つたのであつて、流布本には「南畝」とある。僻案抄に「畝」を「武」に改めてアラナムと訓んでゐるが、古義には「畝」にム音があること云つてゐる。又講義には「畝」とあるのに據つて、「畝」の吳音モを採用して「南畝」をナモと訓み、「なも」は係の助詞「なむ」の古形であると解いてある。「なも」は「天下乃公民乎惠賜比撫賜隨神所思行佐久止詔」(宣命)の如く、宣命や古事記に係の助詞として頻繁に用ゐられてゐるが、集中には「なも」は文の最後に用ゐた例が、東歌に二つあるのみである。然るに「なむ」も集中では「大船に楫しもあら奈牟」(二五四)「海つ路の和ぎなむ時も渡ら七六」(一七八)「ほととぎすなほも鳴か那牟」(四四三七)の如く、總て文の終止にのみ用ゐられてゐて、その用例は「なも」の用例よりも遙かに多い。因つて今は類聚古集の文字を採用してナムと訓んで置く。さて「なも」「なむ」は元來係の助詞であるが、動詞の未然形を承けて文を終止した場合には、他に欲求する意を表す。此の句は心があつてくれよの意である。○右二首歌云々 此の左註の意味は、『類聚歌林』に右の二首を、天智天皇の六年三月に都が飛鳥から近江の大津へ遷された時の御歌と記してある、と云ふのである。此の註は卷一の編者が異説として参考の爲に掲げたのである。○類聚歌林 編者の山上憶良に就いては後に述べる事にして、此處では『類聚歌林』に就いて説明して置く。『類聚歌林』は山上憶良の編纂に成る歌集であつて、主として萬葉前

期に屬する古歌を聚めて、之を歌の性質によつて分類したものであつたらしい。なほ作家や歌の詠まれた事情に關する考證をも添へてあつた事は、本集の左註に引用せられた記事によつて明かである。此の書の名は本集の卷一二九の左註に見える外、清輔の『袋草紙』や順徳院の『八雲御抄』等にも見えて居るから、鎌倉時代までは傳はつてゐたのであるが、今は散佚して見る事が出来ない。

【譯】懐しい三輪山をあんなにまあ隠してしまふことか。(誠に恨めしいことだ)せめて雲になりとも情があつて欲しい。あんなに隠すべきであらうか。

【評】長歌の結尾句「隠さふべしや」の力強い感情の籠つた句を再び繰返して、同じ感情を純化し強調した反歌である。一首が五七五七七と三つに切れて居るのが、如何にもかこち恨む作者の心にふさはしい格調となつて居る。

天皇遊獵蒲生野時額田王作歌

二〇 あかねさす 茜草指

紫野行き 武良前野遊

標野行き 標野行

野守は見ずや 野守者不見哉

君が袖振る 君之袖布流

【釋】〇天皇 天智天皇である。〇遊獵蒲生野時 「遊獵」は左註に日本書紀の記事を引いてある通り、天智天皇の七年五月五日に行はれた藥獵である。藥獵は五月五日に、山野に出て藥草を採集する行事である。是はもと支那で主として端午の日に行はれた行事であるが、我が國にも早くから傳はつて、夙に推古天皇の御代に行はれた事が日本書紀に見えてゐる。即ち推古天皇紀に「十九年夏五月五日、藥獵於菟田野云々」とある。又本集卷十六

に「四月と五月の間に藥獵仕ふる時に」(三八八五)とあるのを見ると、四月から五月にかけての鹿茸(鹿の袋角)を採る爲の鹿狩も藥獵と言つた事が判る。「蒲生野」は近江國蒲生郡の野で、今の東海道線近江八幡驛の東方、蒲生郡武佐村附近の野である。此の地に内野及び蒲生野の名が存してゐる。さて此の歌は其の蒲生野に藥獵を催し給

うた時、供奉してゐた額田王が、皇太弟大海人皇子に詠みかけた作である。

なほ次に講する大海人皇子の御返歌によれば、額田王は當時天智天皇の御寵愛をも得て居たのである。



あかねさす



あかねさす

〇あかねさす 「あかね」(茜草)は一名「あかねかづら」とも呼ばれる。山野に日蔭の雜草に混つて生える、方莖中空の蔓草である。葉莖に刺があり、葉は節毎に四枚づつ輪生し、花は淡黄白色の總狀花で眞夏に開く。其の根は紅黄色を帯び、染料を採る事が出来る。平安朝の物語類に散見するあかね染は、此の根から採つた染料で染めたものである。「あかねさす」はあかね色のさし出るの意で、紫の色を染めるのに用ゐるものであるから、「紫」に懸けて枕詞としたのである。此の枕詞は此の外になほ、赤い日の義によつて「日」の枕詞

に用ゐ、又轉じて「晝」にも冠する。〇紫野行き 「紫野」は地名ではなく、紫草の生えてゐる野の義である。「行き」は歩くの意。下の「標野行き」の「行き」も同じ。紫草は高さ二尺ばかりに達する野生の草で、莖にも葉にも細毛がある。葉は長楕圓で五生し、花は白色で夏日梢頭に咲くが、小さいから目立たない。根は深紫色で染料と

して用ゐられる。これが染料として用ゐられた事は、「託馬野つまのに生ふる紫草衣むらさきに染め」(三九五)「戀しくば下にを思へ紫の根摺ねずりの衣色に出づなゆめ」(古今集卷十三)などによつて知れる。伊勢物語に「紫の一本ゆゑに武藏野の草はみながらあはれとぞ見る」と歌はれたのも此の草である。○標野行き「しめ」は動詞「しむ」(占)の連用形から轉じた名詞で、注連の意にも標の意にも用ゐられる。「標野」は御料地として占めて置かれる野即ち禁野の意であつて、蒲生野を指す。前の「紫野」を語を換へて「標野」と云つたのである。○野守は見すや「野守」は標野を守る守部即ち番人である。「野守は見すや」は「君が袖振る」の下に置き換へて見るべき句である。此の歌の「標野」や「野守」に寓意があると見る説と無いと見る説とがある。略解・小琴・攷證等には寓意は無いと見てゐるが、檜端手には「野守」は天皇を指し奉つたのであると云ひ、古義には「野守」を女王の警護の者共を指したものとしてゐる。又美夫君志には、「標野」は官女達の中であつて皇子が心を懸けて居られた女を指したもので、多くの官女の群れてゐる紫野や標野を彼方此方と戯れ給ふ様を見て、嫉妬して詠まれた歌であると云つて、「野守」を女王自身と見てゐる。なほ新考には、「野守」は只傍人を指したものであると云ひ、講義にも汎く傍の人々を指したのであるが、此處は禁野であるから、それをわざと「野守」と云つて、語に綾を添へたのであると解いてゐる。かやうに種々の見解があるが、最後に擧げた新考講義の説のやうに、周囲の人々を「野守」と云つたものと見るのが穩當であらう。○君が袖振る「君」は大海人皇子を指してゐる。袖を振るのは別れる時や招く時などに、相手に向つて、當時の風俗である。當時の袖は後世の袂のやうに幅の廣いものでなく、筒袖の形に似たもので、其の肩折は、りも長く作つてあつたから、之を振る事が出来たのである。

【譯】紫草の生えてゐる野を歩きながら、御料の野を歩きながら、なつかしい君は頻りと私に向つて御袖をお振りになりますか、人目につきは致しますまいか。そんなに御袖をお振りになつて。

【評】「あかねさす紫」と云つて色を重ね、「紫野行き標野行き野守は云々」と歌つて「野」や「行き」を繰返した修辭が、頻りに袖を振り給ふ皇子の御姿をさながらに寫し出してゐて巧みである。なほ四五句の倒置法が、心私にあたりを憚る作者の心情を格調の上に表してゐるのも面白い。

皇太子答御歌 明日香宮御宇天皇

三

紫の にはへる妹を にくくあらば 人妻故に 吾戀あれひめやも

紫草能 爾保敵類妹乎 爾苦久有 者 人媼故爾 吾戀 目八奇

紀曰、天皇七年丁卯夏五月五日、縱獵於蒲生野。于時大皇弟諸王内臣、及羣臣皆悉從焉。

【釋】○皇太子答御歌 大海人皇子(後の天武天皇)が右の額田王の歌に答へ給うた御歌。○明日香宮御宇天皇 後の天武天皇である事を註したもので、「明日香宮」は「明日香清御原宮」の略稱である。○紫の 額田王の歌に「紫野」とあるのを承けて答へ給うたのである。從來「紫の」を「にはへる」の枕詞と解いてゐるが、今は講義の説に従つて「紫」を色と見て、「紫のにはへる」を「妹」の修飾句と見て解釋する。「紫のにはへる妹」は紫の色が匂ふやうに美しい妹の意。○にはへる妹を「にはへる」は「にはへる」に完了の助動詞「り」の連體形が附いた形である。「にはへる」

は香氣に就いて云ふ外に、色彩がつやつやと美しく映發する意にも用ゐる。例へば「朝露に仁寶布黃葉の散らまく惜しも」(二一八七)「筑紫なる爾抱布兒故に」(三四二七)「春の苑紅爾保布桃の花」(四一三九)等の如き用例が幾らもある。此處では血色の美しくつややかな容色を云ふ。次に助動詞「り」は動作の完了の外に、動作の繼續や結果の存續を表す。主として四段活用動詞の命令形を承けるが、『國語と國文學』第八十九號所載橋本准文(參照)又サ行カ行變格活用の動詞に附く事もある。なほ山田孝雄博士は、此の「り」は元來動詞の「あり」であつて、是が四段活用動詞の連用形に附いたもの、即ち「にほひあり」が約まつて「にほへり」となつたものであると説明せられてゐる。(『奈良朝文法史』參照)「妹」は男から妻を始め、廣く女を親しんで呼ぶ詞である。然し女同志の間で用ゐることもある。此處は額田王を指す。○人妻故に「故に」は元來理由を表す語である。然るに小琴に此の句を、「人の妻なるものを」と解き、略解攷證古義美夫君志新考は何れも此の説に従つてゐるが、「故に」を「なるものを」と解釋する事の妥當でない事は、講義に指摘せられた通りである。なほ「塵泥の數にもあらぬ吾故に思ひ侘ぶらむ妹が悲しさ」(三七二七)「うらもなく去にし君故朝な朝なもとなぞ戀ふる逢ふとはなけど」(三一八〇)「うち日さす宮道に逢ひし人妻故に玉の緒の思ひ亂れて寝る夜しぞ多き」(二三六五)等の「故に」も、古くは「なるものを」と解いてゐたのであるが、これは一般に何々の爲に、何々によつての意に解くべきである。さて一句の意は、戀ひすべきではない人妻なる御身の爲にの意であつて、下の反語によつて意味は明かになる。○吾戀ひめやも「吾」を流布本考攷證にワガと訓み、略解燈新考等にワレと訓んで居る。「われ」は古くは「あれ」と言つたから、今は古語によつてアレと訓む。「戀ひめやも」の「め」は、未來の助動詞「む」の已然形、「や」は反語の助詞、

「も」は感動の助詞である。一句の意は私は戀ひしようか、しないの意である。

【譯】紫の色のやうに美しい御身を憎い人と思ふならば、人妻であるそなたの爲に、かくも戀ひするやうな事を私はどうして致さう。

【評】第一句の「紫の」は、額田王の歌に「紫野」とあるのをお承けになつたのであつて、當時贈答歌に履行はれた慣例である。極めて率直に力強く表現せられた御歌である。

明日香清御原宮天皇代

天淳中原瀛真人天皇

十市皇女參_ニ赴於伊勢神宮_ニ時、見_ニ波多横山巖_ニ吹黃刀自作歌

三 河の上の ゆつ磐群に 草生さず 常にもがもな 常處女にて
河 上乃 湯都盤村ニ 草武左受 常丹毛翼 名 常處女煮手

【釋】○明日香清御原宮天皇「宮」の下には「御宇」の二字が脱ちてゐる。「明日香」(「飛鳥」とも記す)は大和國高市郡の今の高市村及び飛鳥村附近の總名であつた。「清御原宮」は天武天皇の宮である。日本書紀天武天皇の元年の條に、「九月己丑朔癸卯、(車駕)自嶋宮移_ニ崗本宮_ニ。是歲營_ニ宮室於崗本宮南_ニ。即冬遷_ニ以居焉_ニ。是謂_ニ飛鳥淨御原宮_ニ。」とある。是より曩天智天皇は、都を近江の大津に遷し給うたが、五年の後崩御になり、引續き壬申の亂となつた。亂後に即位し給うた天武天皇は、再び飛鳥に崗本宮を營んで其處に坐しましたが、やがて其の南方の淨御

原宮に遷都し給うた。淨御原宮の舊址は今の高市村大字上居であつて、「上居」即ち「淨御」の字の音讀であると言はれて居たが、喜田博士は上居は多武峯を隔てて存する下居に對する名であるとして、舊址は飛鳥村大字雷と飛鳥の中間(香久山の南方十四町許りの地點)に當る事を考證せられた。(喜田博士著『帝都』七三―七九頁參照)此地は藤原宮に遷都のあるまで、即ち天武天皇の元年冬から持統天皇の八年十二月まで、二十一年間都の在つた地である。一四三頁 地圖參看○天淳中原瀛真人天皇 アメノヌナハラオキノマヒトノスメラミコトと訓む。天武天皇の御名である。○十市皇女 トヲチノヒメミコと訓む。天武天皇の皇女で、御母は額田王である。弘文天皇の妃となつて葛野王を生み奉つた。三六頁 系譜參看○參_三赴於伊勢神宮_二時 十市皇女が伊勢神宮の齋宮にお立ちになつた事は史籍に見えてゐないから、唯の參拜に下向せられた時の事であらう。左註にも引いてある通り、天武天皇紀四年の條に、「二月乙亥朔丁亥、十市皇女阿閉皇女、參_三赴於伊勢神宮_二とあるのは、此の詞書と同じ時の事であらう。守部は十市皇女が神宮へ參拜に赴かれたのは、御父皇と大友皇子との御仲違を悲しみ給うて、其の和解を神宮に祈らせられる爲であつたであらうと云つてゐるが、此の説には贊同し難い。○波多横山巖 「波多」は和名抄に「伊勢國壹志郡八太_太」とある地で、今の松阪町から北西へ三里許り隔たつた、一志郡川合村及び高岡村の地が是に相當する。「横山巖」の所在は明確に知られてゐない。考には松坂から初瀬越を経て大和へ行く道に八太里(今川合村に大字八太の地名がある)があり、其處から一里許り彼方の垣内といふ村に横山があり、其處の川邊に巨岩が多く在るのが、横山の巖であると云つて居る。又宣長は『菅笠日記』に「三渡より二里、八太といふ驛あり。八太河は板橋なり。渡りて田尻村といふより漸々山路にかかりて、谷戸大仰なんといふ里過ゆく。大きな川あり、

雲出川の川上とぞいふ。川邊を登り行くあたりの景色いとよし。大きな岩ほども山にも道にも川の中にもおほくて、所々に淵のあるを見くぢしたるいとおそろし。彼の吹黄の刀自歌よめりしも、此わたりならんと縣居の人の曰れしは、實にさもあらんかし。」と述べてゐる。是に對する異説としては、守部の檜楯手別記に、近江國甲賀郡鮎川の附近であると述べてゐるが、此の説は妥當でない。要するに考及び『菅笠日記』の記述に據れば、「横山巖」は川合村の八太から西一里程の、雲出川沿岸の巨岩を指してゐるものと思はれる。○吹黄刀自 傳未詳。卷四に同じ人の作歌が二首ある。「刀自」は戸主の義で、主婦又は老婦の意。「吹黄刀自」は皇女の乳母か老侍女であらうと思はれる。

○河の上の 流布本にカハカミノ(攷證檜楯手講義同訓)と訓んだのを、略解にカハノヘノ(古義燈・新訓新解同訓)と改めて居る。カハカミもカハノへも、共に河岸の邊を指すのであるから、何れの訓に従つても差支ない。河邊を指す場合にカハカミと云つた例には、「可波加美の根白高草」(三四九七)の如きがある。又海岸をウナカミと歌つた例としては、卷五の鎮懷石の歌序に「臨海丘上」とあつて、其の歌に「宇奈可美の子負の原に」(八一三)とあるのを擧げる事が出来る。然し又「うへ」を邊の意に用ゐた例は、「霞立つ野上の方に行きしかば」(一四四三)「荒妙の藤原が宇倍に」(五〇)等幾らもあるから、今は略解の訓に従つてカハノへと訓んで置く。「河上」若しくは「川上」の文字を用ゐた例は(五六・四九・一九三)にも見える。○ゆつ磐群に 古事記の「湯津石村」や祝詞の「湯津磐村」と同じ語である。從來「ゆつ」は五百箇の約言で、數多の意であつて、古事記の「湯津香木」「湯津津間櫛」「由都麻都婆岐」(ゆつ眞椿)等の「ゆつ」も是と同語であると解かれてゐる。然しイホツが約まつてユツとなつたとす

るは不穩當であり、又「磐群」に更に數多き意の「ゆつ」を冠するのは重複の感がある。なほ中臣壽詞の「由都五百篋」も、從來の解釋に従へば重言となるのである。かやうな點から見て「ゆつ」と「いほつ」とは別の語と思はれる。「思ふに「ゆつ」の「ゆ」は、「齋薺」「齋笹」「齋楓」「齋庭」等の「ゆ」で、其の「ゆ」は「忌む」と同系語の「齋む」の語幹の「ゆ」と同じで、清淨或は神聖の意であらう。「つ」は「秀つ枝」「外つ宮」などの「つ」と同じく、「の」の意の古い格助詞である。従つて「ゆつ磐群」は清淨なる岩石の群である。○草生さす 草が生えすの意。「むす」は自然に生ずる意。此の句は磐群に草が生ずる事なく、常住不變であるが如くにの意で、下の敘述の譬喩になつてゐる。○常にもがもな 「が」は願望の意を表す助詞で、感動助詞の「も」を承けて文を終止するのが常である。「都べに行かむ船毛我」(三六四)「山は無く毛我」(四〇七六)の如きである。又「も」は此の歌のやうに「が」の上と下とに置かれる事がある。他の例を示せば、「奈良の都に行く人毛我母」(三六一二)「吾が思ふ君は千歳に母我毛」(〇二四)「天橋も長雲鴨高山も高雲鴨」(三二四五)などが是である。最後の「な」は餘情を含め語調を整へる時に用ゐる助詞で、一旦終止した文の下に付き、又屢「がも」の下に附く。例へば「我は戀ひむ奈後は逢ひぬとも」(三四七七)「我が背の君は罹麥が花に毛我母奈」(四〇一〇)の如く用ゐられる。○常處女にて 「とこ」は「常夏」「常宮」「常闇」「常世」などの「とこ」であり、又「常磐」「常磐木」などの「とき」と同じで、常住不變の義を表す。「處女」は未婚の女を示す文字であるのを、「をとめ」(少女)に借りたのである。「をとめ」は小つ女の轉じた語で少女の義。「にて」はであつての意。

【譯】此の川邊の清淨な巖の群に草がむさず、何時までも變る事のないやうに、私共も何時までもうら若い少女であつての意。

ありたいもので御座います。

【評】天武天皇紀に據れば、七年正月天皇は天神地祇を祠る爲に、齋宮を倉梯河のほとりに建て給うたのであつて、その祭祀の日即ち四月七日の條の記事に、「仍取平旦時警蹕既動、百寮成列、乘輿命蓋、以未及出行、十市皇女卒然病發薨於宮中。由此鹵簿既停不得幸行、遂不祭神祇矣」とある。此の點に就いて從來、十市皇女は背の君の御跡を慕ひ給うて、自害し給うたのであらうと言はれてゐる。ともかく天武天皇と額田王の間に生れ給うた皇女は、終生悲劇中の人物であらせられたのである。かやうに御惱多き御境涯であつた事を念頭に置いて、右の歌を讀む時、吹黄刀自が「常にもがもな常處女にて」と皇女の爲に祈つたのも故ある事と思はれて、一層あはれが深く感ぜられる。

天皇御製歌

二五

み吉野の 耳我の嶺に 時なくぞ 雪は降りける 間なくぞ 雨は降りける
 三吉野之 耳我 嶺爾 時無 曾 雪者落 家留 間無 曾 雨者零 計類
 其の雪の 時なきが如 其の雨の 間なきが如 隈も落ちず 思ひつつぞ來し
 其 雪乃 時無 如 其 雨乃 間無 如 隈毛不落 思 乍 敘來

其の山道を
山道乎

【釋】○天皇御製歌 天武天皇の御製である。其の内容から推察すると、吉野山中で詠み給うたもののやうである。○み吉野の「み」は美稱の接頭語。○耳我の嶺に 流布本にミカノミネ、古葉略類聚鈔にミミワカミネと訓んであるが、元曆校本神田本等にミミガノミネ(僻案抄考略解新考講義等同訓)と訓んでゐるのが穩當である。卷十三の(三二九三)に是と大同小異の歌があつて、それには「三吉野之御金高爾」とあるので、墨繩古義等にはミカネノタケと訓んで、金峯山(吉野町の東南に聳え南は大峯山に連なる山)であるとして居る。又考には「みみかのみね」は、其の山が甕を伏せたやうな形である所から得た名であると云ひ、美夫君志には考と同じやうに訓んで、「みか」は嚴の義で、其の山が大きく嚴めしい意の名であると云つて居る。要するに「耳我嶺」の名義は詳かでない、又何れの山を指したのか不明である。金峯山を指したとする説は捨て難いが、『大和志』に「吉野山在吉野山村、一名金御嶽。耳我嶺在窪垣内村上方、山勢盤紆頗幽勝。」とあるのに據れば、金峯山と耳我嶺とは別の山の名である。思ふに卷十三の「御金高」は金峯山であるが、耳我嶺は別の山であらう。○時なくぞ いつと云つても定めずに即ち間斷なくの意。次の或本の歌には「時じくぞ」とある。○間なくぞ 「間」を古義にマと訓んでゐる(新考新訓全釋同訓)が、今は流布本の訓に従つてヒマと訓んで置く。○時なきが如 「ヒ」と「は」は「如し」の語幹である。當時は語幹の「こと」を「ことく」(又は「ことし」と同じに用ゐた。「こと」の用例を二三擧げるならば、「夢の其等道の空路にわかれする君」(三六九四)「常にいまさね今も見る其等」(四四九八)「梅の花今咲ける期等散り過ぎず」(八一六)等がある。○間なきが如 上の「時なくぞ」以下此の句まで八句は、所謂連對句であつて、「時なくぞ云々」と「間なくぞ云々」とが對句であり、又「其の雪の云々」と「其の雨の云々」とが對句になつてゐる。○隈

も落ちず 「隈」は上に解いた「道の隈」の「隈」と同じであり、「落ちず」は既に述べたやうに洩れずの義である。一句の意は道の曲り目に来る度毎にの意。○思ひつつぞ來し 原文の「來」を流布本にクルと訓み、僻案抄にはコシと訓み、その後の諸註は此の孰れかの訓を採用して居る。クルと訓めば現在を歌ふ意になり、コシと訓めば顧みて歌ふ意になる。今はコシと訓んで、回想してお詠みになつたものと見る。○其の山道を「その」は「かの」若しくは「この」の意味にも用ゐる。「山道を」は「思ひつつぞ來し」の句に立ち返つて、敘述を全うしてゐるのである。【譯】吉野山中の耳我の嶺には、何時といふ事なく雪が降り、間を置かず雨が降つてゐる。其の雪が時を定めず降るやうに、又雨が絶えず降るやうに、自分は山道の曲り目に来る毎に、絶えず物思ひをしながら、此處までたり來た事である。

【評】右の御製は天武天皇が皇太弟の頃、位を辭して吉野に遁世し給うた時、吉野山中の道すがらお詠みになつたものであるといふのが僻案抄の説である。併し代匠記には、早く行つて見たいと思し召す路次の情をお歌ひになつたのであると云ひ、古義には女子の許に通ひ給ふ時に詠み給うた戀歌であると云つて居る。如何なる場合の御製であるか明かでないが、内容から推察すると、物思ひに惱んで居られた時の聖作であるやうに思はれる。尤も原本には此の御製の次に、或本歌として次の一首を掲げて居る。

み芳野の 耳我の山に 時じくぞ 雪は降るとふ 間なくぞ 雨は降るとふ 其の雪の 時じきが如 其の雨の 間なきが如 隈も落ちず 思ひつつぞ來し 其の山道を (二六)

此の異傳は前の御製と大同小異であるが、「雪は降るとふ」「雨は降るとふ」とあるから、稍内容が變つて來る。な

ほ此の御製と類似の長歌二首が卷十三に載せてあるから、左に掲げて見よう。

み吉野の 御金の嶽みかねのたけに 間なくぞ 雨は降るとふ 時じくぞ 雪は降るとふ 其の雨の 間なきが如 其
 の雪の 時じきが如 間も落ちず 吾はぞ戀ふる 妹が正香ただかに (三二九三)〇反歌を省く
 小治田せはだの 年魚道あゆみちの水を 間無くぞ 人は抱むとふ 時じくぞ 人は飲むとふ 抱む人の 間無きが如
 飲む人の 時じきが如 吾妹子に 吾が戀ふらくは 止む時もなし (三二六〇)〇反歌を省く

此等の類似せる四首の長歌の中で、果して何れが原形であるかは輕々しく斷言し難いが、最後の一首は眞淵が言つたやうに、格調から見て御製よりも古いもののやうであり、内容も他の三首と異なつて居るから、恐らく是が最も古いのであつて、其の他は是を吉野の歌に改作したのであらうと思はれる。なほ卷十三所收の二首の長歌には反歌があるが、其の内容には長歌と合致しない點があり、又其の風格は長歌に比して新しみがあるから、是は後人が別の短歌を反歌として附け加へたのであらうと思はれる。

天皇幸于吉野宮時御製歌

ノ二七

良き人の 好しとよく見て 好しと言ひし 吉野よく見よ 良き人よく見つ
 淑人乃 良跡吉 見而 好常言 師 芳野吉 見與 良人四來三

【釋】〇天皇幸于吉野宮時御製歌 天武天皇が吉野離宮に行幸遊ばされた時の御製である。吉野離宮の舊址は、花の吉野山の東北一里許りの所で、今の吉野線の大和上市驛から上市町を経て、吉野川に沿うて溯ること一里半

許りの所に在中莊村大字宮瀧の地である。九四頁の地圖参照此處は背後に山を控へ、前に吉野川が流れて、山水の美を兼ねてゐるので、古く應神天皇の御代に離宮が營まれ、雄略天皇も此處に行幸になり、其の後齊明天武持統文武元正聖武の各朝に互つて、行幸が屢あつた事が、國史に散見して居る。従つて萬葉集には從駕の臣の詠歌が甚だ多い。而して此の御製は、左註に「紀曰八年己卯五月庚辰朔甲申、幸于吉野宮」とある時の行幸に際して、詠み給うたものらしく思はれる。

〇良き人の「良き人」は善人の義で、貴い人若しくは勝れた人を指すのであつて、此處では昔此の景勝の土地を見出した古人を指し給うたのである。其の古人は素より誰と定まつてゐるのではない。〇良き人よく見つ 「良人四來三」を流布本にヨキヒトヨキミと訓んで居る。代匠記や考には之を「善き人よ君」の義とし、其の「善き人」を、契沖は皇后皇子を始め御供の人々を指し給うたものであると云ひ、眞淵は「善き人」も「君」も共に從駕の臣下を指し給うたものと見て居る。次に檜嶋手古義等には、ヨキヒトヨクミと訓んで、「よき人」を御供の臣であると見、「よくみ」をよく見よの義として居る。併しこれは僻案抄及び略解に引く荷田御風の訓に従つて、ヨキヒトヨクミツと訓み、初の二句に歌はせられた事を繰返して、結句とし給うたものと見るのが妥當である。

【譯】古の賢い人が、如何にも佳い景色の處であると、よく見てさう言つた此の吉野を汝等はよく見よ。如何にも佳い所ではないか。さても古の人はよく見あらはしたものだ。

【評】此の御製は各の句頭と、第二・四・五の句中とに「よし」といふ形容詞の活用形を置いて、聲調を輕快にしてある。是と相似た同語の反復は集中に幾らもある。

來むといふも 來ぬ時あるを 來じといふを 來むとは待たじ 來じといふものを (五二七)
 白珠は 人に知らえず 知らずともよし 知らずとも 吾し知れらば 知らずともよし (二〇一八)
 秋の野に 咲ける秋萩 秋風に 靡ける上に 秋の露置けり (一五九七)
 梓弓 引きみ弛べみ 來ずば來す 來ば來其をなど 來ずば來ば其を (二六四〇)

此の種の技巧は、漢詩の頭韻の影響であるかも知れないが、此の御製も右に掲げた四首も、技巧に捉はれないで表現が寧ろそれによつて助けられてゐる所に、技倆を認める事が出来る。

藤原宮御宇天皇代

高天原廣野姫天皇

天皇御製歌

春過ぎて 夏來るらし 白妙の 衣乾したり 天之香具山
春過 而 夏來 良之 白妙能 衣乾 有 天之香來山

【釋】藤原宮御宇天皇代 持統天皇及び文武天皇の御代であるが、ここは持統天皇朝を示して居る。「藤原宮」は大和國高市郡鴨公村大字高殿の邊、即ち今の八木町の南、大和三山の中間の地に在つたのであつて、今も其の地に宮所大宮京殿宮ノ口などの字がある。一四三頁 地圖參看藤原宮は天皇の六年五月に起工し、八年に完成して飛鳥淨御原宮から遷都し給うたのである。なほ下に講ずる〔五〇〕の條に詳しく述べる。○高天原廣野姫天皇 タカマノハラヒロヌヒメノスメラミコトと訓む。持統天皇の尊稱である。持統天皇は天智天皇の第二皇女で、天武天皇の皇后

であらせられた。天武天皇の崩後即位し給うたのである。一六頁の 御系譜參看

○春過ぎて まだ春だ春だと思し召してゐた中に、もはや春は過ぎ去つてゐた事を表してゐるので、次の句に對して大切な役目をつとめてゐる。○夏來るらし 此の句を流布本にナツキケラシと訓み、元曆校本類聚古集等に



藤原宮址よ天香山具山望む

にナツゾキヌラシと訓み、代匠記精撰本に「來」の下に「計」を脱したものと疑ひ、又原の儘をナツキタルラシと訓むべきかと云つて居る。代匠記・僻案抄等の訓に従つて、原の儘をナツキタルラシと訓むのがよい。「來る」は「毎年」に春の伎多良(八三三)「何處より積多利しものぞ」(八〇二)「み冬つき春は吉多禮ど」(三九〇)などによつて明かである如く、四段に活用する動詞であつて、「來到る」の約まつた語である。○白妙の 「たへ」は織物の總稱であつて、今も「はぶたへ」といふ語に名残を存して居る。「たへ」は元來殺の木の皮の纖維を原料として織り上げた、白い艶のある布である。色が白いから之を「しろたへ」と呼んだのであつて、集中に屢「衣」袖「袂」など衣服に關したものの枕詞として用ゐてゐる。併しここは古義の説の通り枕詞ではなく、「しろたへの衣」と續けて修飾語として用ゐたのである。

當時の平常の衣服は、今の朝鮮の風俗に見るやうに、一般に白布を用ゐたのである。○衣乾したり 流布本の訓にコロモサラセリとあるが、古葉略類聚鈔の訓にコロモホシタリとあるのがよい。衣が乾してあるといふ意。代

匠記の説に、これは更衣の季節になつて、春まで著てゐた衣を仕舞ふ爲か、又はこれから用ゐる夏の衣の濕氣を取り去る爲に、民家に白衣を掛け乾して居るのを御覽になつて、時節の移り變る事を感じ給うたのであると云つて居る。是に對して講義には、今も朝鮮で野山の草の上に直ちに白布を敷いて乾すのと同様に、山の草木の上に廣げて乾してゐるのであつて、民家の庭先に掛け乾して居るのではないと解いてある。孰れとも断定し難いが、要するに青々と繁つた香具山を背景として、白い衣が強い初夏の日光に照らされて居るのを御覽になつて、直感的に夏の來た事を感じ給うたのである。藤原宮から天の香具山までは五六町の距離であるから、白衣を乾してある有様は手に取るやうに見えるのである。

【譯】まだ春だと思つてゐたけれども、もはや春は過ぎて夏になつたらしい。あの天の香具山に衣を乾してあるのが、如何にも夏らしく白く光つて見える。

【評】此の御製を新古今集に「春過ぎて夏來にけらし白妙の衣乾すてふ天の香具山」と改めて載せてゐる。「衣乾すてふ」と言へば、かねて聞き及んでゐたやうに衣が乾してあるといふ意味になつて、内容は複雑になるが、表現から言へば、「衣乾したり」で切つてある方が印象が鮮明で實感的である。私は嘗て大和の萬葉遺蹟を遍歴して、藤原宮の舊跡に立つた時、恰も天の香具山の麓の民家に乾してあつた白衣が、眞夏の強烈な光に照らされて居るのを眺めて、此の御製の情景をしみじみ味はひ得たことを、今も心に思ひ浮べるのである。

過三近江荒都一時柿本朝臣人麻呂作歌

し二九

玉禰 畝火の山の 檜原の 日知の御世ゆ 生れましし 神の盡 樛の木の
 玉手次 畝火之山乃 檜原乃 日知之御世從 阿禮座 師 神之盡 樛 木乃

いや 繼ぎ繼ぎに 天の下 知らしめししを そらにみつ 大和を置きて 青丹
 彌 繼 嗣 爾 天 下 所 知 食 之 乎 天 爾 滿 倭 乎 置 而 青 丹

よし 奈良山を越え いかさまに 思ほしめせか 天離る 鄙にはあれど 石
 吉 平 山 乎 越 何 方 御 念 食 可 天 離 夷 者 雖 有 石

走る 淡海の國の 樂浪の 大津の宮に 天の下 知らしめしけむ 天皇の
 走 淡 海 國 乃 樂 浪 乃 大 津 宮 爾 天 下 所 知 食 兼 天 皇 之

神の命の 大宮は 此處と聞けども 大殿は 此處と云へども 春草の 茂く
 神 之 御 言 能 大 宮 者 此 間 等 雖 聞 大 殿 者 此 間 等 雖 云 春 草 之 茂

生ひたる 霞立ち 春日の霧れる 百磯城の 大宮處 見れば悲しも
 生 有 霞 立 春 日 之 霧 流 百 磯 城 之 大 宮 處 見 者 悲 毛

【釋】○近江荒都 近江律令によつて歴史上に名高い大津宮である。大津に都を選されたのは天智天皇の六年三月で、天皇崩御の後壬申の亂に近江の軍が敗れて全く荒廢に歸したのは、遷都の後僅か四五年を経たばかりの時である。從來帝都は神武天皇以來多くは大和の國內にあつて、大和以外に遷都のあつた例は二三度あつたのみである。然るに天智天皇は大なる抱負を抱かせられてゐたやうであるから、或は豪族の多い飛鳥の地をお避けになる



爲か、或は三韓や唐の船の出入する難波津に便利な地に都せられる必要があつたのか、或は又東國に對する政策の爲であつたのか、兎に角思ひ切つて遠く大津への遷都を御決行になつたのである。大津は單に湖上の要津であるのみならず、東海北陸二道の咽喉であり、且水陸の要路であつて、當時の帝都としては好適の地であつたのであらう。然し當時は此の遷都に反對する者が多かつたので、遷都の非を諷した童謡わづらが頻りに起り、時には放火さへ行はれたのである。かくて天皇は十年の十二月に崩御になり、その翌年には壬申の亂が起り、亂後天武天皇はまた元の飛鳥にお還りになつて、淨御原に都を奠め給うたのである。大津宮の位置に就いては、喜田博士の説に「大津宮の位置は今の大津市では無くて、是より遠く北の方、辛崎に近い滋賀村なる滋賀里の地であつた。是は天皇が都を此處に定められた翌年に、宮城の西北の山に崇福寺を營んだといふ記事から推定する事が出来る。崇福寺は大津京荒廢の後も猶久しく保存されて、恐らくは平安朝の末頃までも儼然として維持されたものの様に思はれる。今も猶その礎石の一部は完全に保存され、最近に碑を立てて其の場所を表彰することとなつた。」(『帝都』二二―二頁)と考證して居られる。さて此の歌は、都が飛鳥に復せられてから十數年を経た後、當時の代表的歌人である人麻呂が、壬申の亂後全く荒廢に歸した宮城の跡を見て、無量の感慨に打たれて歌つたものである。○柿本朝臣人麻呂 人麻呂は萬葉第二期、即ち藤原朝時代を代表する第一流の歌人であるのみならず、後世歌聖と仰がれた和歌史上屈指の歌人である。然し閑歴に關しては史書に何等の記載が無いので、傳記は詳かでない。ただ集中に收められた彼の作品によつて、閑歴の一端を窺ふ外は無い。人麻呂は持統文武兩朝に微官を以て仕へ、その間駕に隨行して吉野伊勢紀伊へ赴き、又近江の志賀宮舊址を訪ひ、遠くは讃岐筑紫方面へも使したの

である。從駕の際には應詔の歌を詠み、又羈旅の作を詠んで居る外に、日並皇子高市皇子明日香皇女等の皇族方の薨去を悼んだ長篇の挽歌を數首詠んでゐる點などから見て、宮廷歌人として仕官してゐたもののやうに思はれる。晩年(文武天皇の四年以後)に石見國に一地方官となつて赴任し、和銅二三年頃「鴨山の磐根し纏ける吾をかも云々」(二二三)を辭世の作として、石見國で歿した。大和國北葛城郡新庄町に大字柿本なる地名があり、近くに柿本神社といふのがあつて、彼の出生地であると傳へられ、又石見國美濃郡小野村大字戸田にも柿本神社といふのがあつて、彼の誕生地であると傳へられて居るが、何れも確證は無い。然し恐らく人麻呂は大和の人であらう。なほ大和國添上郡樺本町に柿本寺があり、附近に歌塚といふのがあつて、人麻呂の墓であると言ひ傳へて居る。集中に人麻呂作歌として載せられた歌は、卷一・二・三・四・五に長歌十六首、短歌六十餘首がある。人麻呂は短歌にも勝れた作を遺して居るが、歌風の特徴は寧ろ長歌に在る。近江の舊都や吉野離宮に關する歌、或は皇子や皇女の殯宮の時の挽歌等には、人麻呂の神天皇國家に對する思想並に精神が強調せられて居るのが特色である。而して表現の上では、長歌は概ね長形式を用ひ、前半を敘事的に歌ひ、後半を抒情的に歌つてゐる事、對句反復語枕詞序詞などの修辭的技巧を極めて豊富に且精妙に用ひて、莊重雄大に表現して居る事などが特色である。要するに人麻呂は集中の代表的抒情歌人である。なほ集中には「柿本朝臣人麻呂之歌集出」と註した歌が、長歌二首・短歌三百三十首・旋頭歌三十五首收められて居る。然し此等の作品は、必ずしも全部人麻呂の作とは認め難いのである。

○玉禪 「懸く」の枕詞となることは前に述べたが、此處では「畝火」の枕詞となつてゐる。代匠記の説によれば、

采女うねめが青衣あゐぎを著、領巾ひれや襷たすきを掛けて天皇の御僕みひめに奉仕するから、玉襷たまたすき掛くる采女といふ意によつて、ウネメと音の近いウネビに言ひ懸けて枕詞としたのであると云ふ。(天武天皇紀十一年三月の條に、「辛酉詔曰、(中略)自今已後膳夫采女等之手纏肩巾並莫服。」とあるから、古くは采女は領巾や襷を懸けてゐた事が知られる。)又荷田在満は、襷は項うねに掛けるもので、項に物を掛ける事を「うなぐ」と言ふから、ウネといふ音に冠して枕詞としたのであると云つて居る。(冠辭考所引)此等によつて此の枕詞の意義は明かである。○樞原の 神武天皇の都し給うた地。畝傍山の東南麓の地で、今の官幣大社樞原神宮の所在地に當る。○日知の御世ゆ 前の句と此の句とで、神武天皇の御代このかたの意を表す。「日知」は天皇の稱詞として用ゐてある。語義に就いて考には、天つ日嗣を知ろしめす義で天皇を申すのであると解き、古事記傳には古事記の「聖帝世」の「聖帝」をヒジリと訓んで、「ひじり」は日知の義で「聖」の訓であつて、日の如く天下を知ろしめす意であると解いてゐる。斯くて攷證講義には、「ひじり」は「聖」の義訓であると解いてある。然るに柳田國男氏は「ひじり」の原義は日を知る人、即ち漢語の「日者」(卜筮家の義)に相當すると云はれ、其の説を承けて南方熊楠氏は、曆の無かつた古代に於ては生活に影響關係の深い日光に最も注意を拂ひ、日景ひまじの方向と増減を見て季節及び時日を知つたのである。従つて日の次第や善惡を知つた人、即ち曆と占とを兼ねた者が、聖人として尊ばれたのであると解かれた。(『續南方隨筆』三三六—三三四頁参照)最後の説は最も傾聽すべきものやうである。さて原文の「從」は、萬葉集ではヨ・ヨリ或はユ・ユリと四通りに訓む字である。「よ」「ゆ」「ゆり」は共に「より」と同じ意味の助詞であつて、「ゆ」「ゆり」は「よ」「より」よりも古い助詞であると考へられるが、集中には何れも皆用例がある。此等の中「ゆ」「ゆり」の二つは平安朝時代に

は既に滅びた。此の場合の「ゆ」は「古由言ひ繼ぎ來らし」(三九七三)「うべし神代由始めけらしも」(四三六〇)等の場合の「ゆ」と同じで、何々以來の意である。○生なれましし 出現し給うた所のといふ意。「ある」「生」は「あり」「有」(「あらはる」(現)等と語根を同じうする下二段活用)の自動詞で、此の世に出現する生れ出るの意である。他の用例を擧げるならば、「阿禮まさむ御子の繼ぎ繼ぎ」一〇四七)「天の原より生來し神の命」(三七九)などがある。「ます」は居るの意の敬語動詞の「坐す」を、敬語の助動詞に轉用したものであつて、動詞の場合と同じく四段に活用する。即ち「歸り來麻佐む時のため」(三七七四)「天皇の敷き麻須國の」(四二二)「早歸り麻世」(三七四七)の如きである。「ましし」の後の「し」は助動詞「き」の連體形。○神の盡 流布本に「神之書」とあるが、「書」は元曆校本・類聚古集等に據つて「盡」に改めて、略解の訓に従つてカミノコトゴトと訓むのである。假名書の例には「今の世の人も許等期等目の前に見たり知りたり」(八九四)の如きがある。「ことごと」は事事の義で「悉く」と同義である。此の一句は歴代の天皇は皆悉くといふ意。○樛つの木の 「繼ぎ繼ぎ」の枕詞。これはツガの音に近いツギに言ひ續けて、同音を繰返して枕詞としたのである。かやうに同音の繰返しによつて下へ接續する枕詞は、外にも「有り」に懸る「有馬菅」や、「待つ」に懸る「眞土山」、「父」に懸る「ちちの實の」、「後」に懸る「能登川の」等がある。さて「樛」(「梅」とも記す)は集中には「つが」とも「が」とも歌つてある。樛は我が國の中部及び南部の深山に多く生ずる松杉科の常緑喬木で、幹の高さは四五丈にも達し、葉は扁平の線形で先端が二つに割れて居る。夏季に花を開き、其の後松毬まつかきに似た卵形の毬果を結ぶ。材



が つ

は良材であつて、建築や器物に用ゐられる。「とがまつ」ほんつが等の異名がある。「つが」といふ稱呼は主として關東に用ゐ、關西では「とが」と呼んで居る。○「いや」は「いよいよ」と同じ意の副詞的接頭語。「續ぎ續ぎ」は代々相繼いで意。此の句の下には大和に都し給うてといふ意味を補つて解くべきである。○「知らしめし」を「所知食」を僻案抄以下諸註にシロシメスと訓んでゐるが、集中の假名書の例は總て「天の下之良志賣之ける」(四四六五)の如く記してあるから、此處も流布本の訓に従つてシラシメスと訓むのがよい。「知らす」は「知る」に敬語の助動詞「す」が附いた形で、「めす」は「見る」に同じ敬語の助動詞が付き、承接に際して音が轉じたものである。「知る」は前述の如く「敷く」「占む」と同じ語根から分化した語で、我が物とする義がある。又「見る」は「聞く」「知る」「食す」と共に、此等には有形無形の物を身に受け入れるといふ通義がある。従つて「知らす」及び「見す」の複合した「知らしめす」は、天皇が天下を治め給ふ意に用ゐられる。同様に「聞こしめす」「聞こし食す」なども天下を治め給ふ意になる。最後の「を」は、ものをの意の感動助詞。○そらにみつ 前に出た「そらみつ」と同じく「大和」の枕詞である。○大和を置いて 大和を後にしての意。○青丹よし 「奈良」の枕詞。(既出)○奈良山を越え 「奈良山」は「一七」で説明した。此の句は下の「石走る淡海の國の」に懸つてゐる。○いかさまに 如何やうにどのやうにの意。○思ほしめせか 「思ほす」は「思ふ」に敬語の助動詞の「す」が附いて、母音同化によつてオモホスとなつたのである。「めせ」は上に説明した「知らしめす」の「めす」の已然形であるが、此處では「思ほす」を更に鄭重に言ふ爲に添へてある。さて「めせか」はめせばかの意。前に述べた通り、當時は接續助詞の「ば」を添へずして、動詞の已然形のみで既定事實を條件とする語法があつたのである。此の事は動詞ばかりでなく、助動詞

の「す」(敬語)「つ」「ぬ」「けり」「たり」「す」「なり」等の場合も同様である。而して此等の動詞助動詞の已然形は、直ちに係の助詞の「か」「かも」「こそ」「や」等にも接續する。助動詞の場合の例を二三擧げるならば、「よばひに在り通は勢」(古事記)「うち靡き臥し努禮言はむ術知らに」(七九四)「歌ひつつ釀み祊禮かも」(古事記)「心さへ消え失せ多列や言も通はぬ」(一七八二)等がある。さて此の二句は前の「天の下知らしめし」の次に置いて見るべき句であつて、下の「大津の宮に天の下知らしめしけむ」に懸つてゐる。どのやうに思し召したもののかの意であつて、天皇の思し召す所を畏れ憚つて、わざと推察の限でないものやうに歌つたのである。日本書紀天智天皇の六年の條に、「三月辛酉朔己卯、遷都于近江。是時天下百姓不願遷都、諷諫者多、童謡亦衆、日々夜々失火處多。」とある。かやうに近江への遷都は、當時一般に歡ばれなかつたのであるが、人麻呂は此の點を上二句に極めて婉曲に歌つてゐる。○天離る 「鄙」の枕詞。「さかる」は他動詞「さく」(放)に對する自動詞で離れる意。「遠ざかる」「家離る」「里離る」などの「さかる」も同じである。「天離る」は天が遠く離れてゐる事を示す語で、鄙はそのやうに都から遠く隔たつた所であるから、「鄙」の枕詞となるのである。此の枕詞を『信濃漫録』や古義に、天に離る日の義で「ひ」(日)に懸る枕詞となつたと解いてゐるのは從ひ難い。○鄙にはあれど 「鄙」は都に對して地方をいふ。此所では近江の大津を指す。僻案抄に、近江へ遷都があるまでは田舎であつたが、大津宮が營まれてから一度帝都となつて榮えた事を言外に含めて、「鄙にはあれど」と歌つたのであると云ひ、又檜幡手には、都から離れた鄙とは云ふものの、實は程近い近江國の意であると解き、古義に引く大神景井の説には、本文の「有」の上には「不」の字が脱ちたのであると言つて、ヒナニハアラネドと訓んで居る。併し此等は餘り深く考へ過ぎた

説である。此の句は下の「天の下知らしめしけむ」に懸けて見れば意味はよく通じる。○石走る「淡海」の枕詞。「石走」を流布本にイハハシル(代匠記備案抄古義新解同訓)、神田本にイシハシリ、考にイハハシ(略解燈放證繪婦手美夫君志新考同訓)と訓んでゐる。語義に就いて冠辭考には、「石走」は「石走間近君爾戀度可聞」(五九七)や「石走間生有貌花之」(二二八八)「明日香河湍瀬由渡之石走無」(一一二六)等の如く、石橋の義で、川の中に石を並べ置いて渡るやうにしたもので、其の石の間といふのを「淡海」のアハに言ひ懸けて枕詞としたのであると解いてゐる。又古義には「石流垂水水乎」(一一四二)「石走垂水之水能」(三〇二五)等の例に倣つて、此處もイハハシルと訓んで、石の上を走る溢水といふ意から、同音の「淡海」に冠したのであると説いて居る。右の兩説は何れにも道理があるが、今は姑く流布本の訓に據つてイハハシルと訓んで置く。語義に就いては更に研究を要する。

○淡海の國の「淡海」は淡海即ち淡水湖の義で、其の音を約めてアフミと云つたのである。國名の「近江國」は琵琶湖に基づいた名である。即ち「近江」は和名抄に「近江阿知津」とあるやうに、「近つ淡海」の略で、是は濱名湖のある遠江、即ち「とほつあふみ」(遠つ淡海)に對する稱である。○樂浪の「ささなみ」は今の滋賀郡から湖西一帯に互る古名であるから、其の範圍内にある地名、例へば志賀大津平山栗林連庫山等に冠する。是は枕詞であると云へるが、狭い地名の上に廣い地名を冠する事は地名の稱呼には一般に行はれるのであるから、枕詞と見る必要はない。「ささなみ」の本文の「樂浪」は、「神樂聲浪の志賀津の浦」(二三九八)「神樂浪の志賀津の海人」(二二五三)等とも記してあるのを見て知られるやうに、本來「神樂聲浪」と書くべきのを略したのである。「神樂聲」をササと訓ませるのは戲訓であつて、上古の神樂の囃詞に「ササ」と言つた事から起つたのである。(墨繩參照)従つて「樂浪」はササナミと訓むべきであつて、ササナミと訓むのはよくない。○知らしめしけむ 最後の「けむ」は連體形であつて、此の句は直ちに次の句に續くのであるから、此の句の下に「其の」といふ語を補つて見ると意味がよく通じる。○天皇の「天皇」はスメロギと訓む。假名書の例に「須賣呂伎の神の命みことの聞きこし食をす國」(四〇八九)とある。「すめろぎ」は又「すめらぎ」「すべらぎ」とも言ふ。天下を統べ治める君の義であつて、皇祖神又は御歴代の天皇を廣く指し奉る語であるが、又當代の天皇を申す事もある。「七七」の「皇神」參照。此處は時の天智天皇を指し奉る。最後の「の」は同格の語を重ね用ゐる時に、其の中間に挿む助詞であつて、「なる」又は「即ち」の意である。

○神の命の「~~天~~天皇をいふ。「みこと」(命尊)は御事の義で神の尊稱として用ゐる。○大宮は「大宮」は大御屋の義で皇居を云ふ。「大」は共に尊稱の接頭語で「大御門」「大御言」「大御食」等の「大御」も同じである。此處は大津宮を指す。○大殿は「大殿」は上の「大宮」と同じく宮殿を指す。「大宮は云々」と「大殿は云々」とは對句である。○春草の茂く生ひたる 本文の「春草」を流布本にワカクサと訓み、備案抄燈は是に従つてゐるが、元曆校本古葉略類聚鈔等の訓にハルクサとあるのに従ふべきである。此の二句は次の「霞立ち云々」と共に、下の「百磯城の大宮處」に懸る對句の修飾句である。○霞立ち 流布本の訓を始め多くはカシミタツと訓んでゐるが、カシミタツと訓めば「春日」の修飾語となる。此處では下の「霧れる」に續くのであるから、攷證に従つてカシミタツと訓むのが妥當である。此の句を「春日」の枕詞とする説は穩當でない。○春日の霧れる「霧れる」は四段に活用する「霧る」に、動作の繼續若しくは結果の存續を表す助動詞の「り」が附いたのである。「る」は「り」の連體形。「霧る」は霧が立ち籠める即ち霞むことであつて、「霧」は此の動詞の連用形が名詞となつたのである。此の他「光」

「氷」「眺」などは何れも動詞の連用形から成れる名詞である。○百磯城の「大宮」の枕詞。百石城の義で、多くの石を集めて堅固に築き上げた宮の意である。「城」は固を作った一定の場所を表す語であつて、「石城」「水城」「奥津城」などの「城」と同じである。尤も此の枕詞の解釋には異説がある。即ち喜田博士の説に、古く「八」といふのは多數といふ意味で、「やしき」(屋敷)といふ語は宮殿の周りに多くの石を周らしたものを云つたのであるが、それが普通の人家に濫用される様になつて、天皇の御所を更に大きく「ももしき(百敷)の大宮」と言ふに至つたとある。(『尾參遠郷土史論』参照)又武田博士の新解には、「しき」は礎石で宮殿建築には多くの礎石を置くから、「ももしきの」といふ枕詞を生じたのであると解いてある。○大宮處 宮城の在つた所をいふ。人麻呂が大津宮を訪れた當時、なほ宮殿が存してゐたであらうと考へた人もあるが、恐らく廢墟となつてゐたのであらう。壬申の亂の前に度々宮城の炎上した記事が國史に見え、又懷風藻の序によれば、天智天皇の頃まで在つた詩が、壬申の兵變に罹つて湮滅した事が見えて居るから、壬申の兵亂に宮殿が焼亡した事は國史に記されて居ないけれども、其の時災厄に罹つたものと推察せられる。○見れば悲しも 「かなし」は可愛しいとほしなどの意にも用ゐられるが、此所は後世の用法の如く、物悲しの意を表してゐる。「も」は詠歎の助詞。

【譯】歌火山の麓なる樞原に宮を定め給うた神武天皇の御代以來、出現遊ばした歴代の天皇は皆、相嗣いで大和の國內に都を營んで天下をお治めになつたのに、(天智天皇は)如何なる歎慮があらせられたのか、吾々の知り得る所ではないが、因縁の深い大和の地を後にして奈良山を越えて、遠い田舎ではあるが近江國なる樂浪の大津に都をお遷しになつて、其の宮で天の下をお治めになつた、其の~~悲し~~天皇の大宮は此處であると聞いては居るが、

又大殿は此處だと人は言ふけれども、(今はその面影もなく)あたりには徒らに春草が生ひ繁つて居り、霞が立ち籠めて春の日もぼんやり霞んで居る此の大宮の跡處を見ると、誠に悲しい心持がすることである。

【評】集中に挽歌(哀傷の歌)の多い事と、皇室を稱へ帝都を讚し、又古京を悲しむ作の多い事は、特色として目立つのである。それには理由がある。當時の國民思想は著しく現實主義的であつて、生を愛し現世を享樂すると共に、一面には衰亡死滅に對する悲哀を感じる事が、後世よりも強かつたが爲である。多くの挽歌があり、又其の中に優れたものが多いのは其の爲であらうと思はれる。次に皇室又は帝都に關する作の多いのは、當時の國民が天皇は現神いまの神と信じて居る事と、皇室を此の世に於て最も尊嚴なるものとし、最大の尊敬を拂つて仕へてゐたからである。古京に對して感慨の涙を濺いでゐるのは、偉大なるものの衰亡に對する哀愁から起るのであつて、これは現實主義と皇室崇敬の至情とが、絡まつて起り來るものやうに思はれる。

而して此等の思想を最もよく代表した歌人は人麻呂である。元來人麻呂は多感の歌人であつたから、鏡景歌よりも抒情歌が得意であつた。また抒情歌の中でも挽歌が最も多く、(特に皇族の薨去を哀悼した作が多い)又皇室や皇居や古京に關する作も随分多い。さういふ特色から見ると、此の長歌の如きは人麻呂の代表的作品の一つと謂つてよいと思ふ。即ち英邁なる天智天皇の御偉業は崩御と共に中絶し、絶大なる抱負を抱かせられて御經營になつた帝都は、僅か四年にして壬申の亂後忽ち廢墟となつて、琵琶湖畔の春草茂き所に、ただ點々礎石を遺してゐた悲哀な光景に對して、無量の感慨に打たれて一氣に詠んだのが此の名篇である。さて此の歌は先づ前半に於て、枕詞を頻繁に用ゐながら悠揚として迫らざる調子を以て、大なる抱負の下に遷都遊ばされた當時を懷古して歌ひ、

後半に於て舊都に對する感慨を敘するに當つて、「大宮は云々」「大殿は云々」の對句を置き、更にそれと對照的に「春草の云々」「霞立ち云々」の並立句を以て、廢墟に立てる作者の高調に達した感情を熱情的に歌つてゐるので、敘事的部分と抒情的部分とが相調和してゐて極めて巧みである。此の歌は人麻呂の作としては寧ろ初期に屬するものであるが、彼が得意とした歌風は既に此の一首によく表れて居るのであつて、人麻呂の代表的傑作の一たるを失はない。

反歌

三〇

樂浪の 志賀の辛崎 幸くあれど 大宮人の 船待ちかねつ
樂浪之 思賀乃辛崎 雖 幸 有 大宮人之 船麻知兼 津

【釋】○志賀の辛崎 「志賀」は今の滋賀郡に當り、「辛崎」は八景の一の唐崎の地である。此のあたりは大津宮のあつた頃、湖上交通の要津であつた。○幸くあれど 「幸く」は恙なくの意で、ここでは昔ながらに存する意を表す。「幸く」は名詞の「幸」から出た副詞で、動詞の「幸はふ」名詞の「さきはひ」などと同根の語である。上にカラサキと歌つたのを承けて、同音を繰返してサキクと云つたので、音調が美しくなつてゐる。○大宮人 大宮仕へをする人、即ち皇居に奉仕する人。○船待ちかねつ 船を待ち受けてゐても其の甲斐のない意。「かねつ」は得なくなつたといふ意。「かぬ」は下二段活用動詞で、他の動詞の連用形に接して、難し或は能はずの意を表す。「つ」は完了の助動詞。「かぬ」の用例は「飛び立ち可爾つ鳥にしあらねば」(八九三)「白露に争ひ金て咬ける萩」(二二一六)等

集中に多く見える。辛崎は當時大宮人が舟遊などを催した所である。

【譯】樂浪の滋賀の唐崎は昔ながらに在るけれども、昔此處に寄せた大宮人の船は、いつまで待つても、もはやそれを待ち受ける事は出来なくなつてしまつた。

【評】第三句までにサ行の音が頻りに響くので、美しい韻律が感ぜられる。第四句以下に深い歎息を洩したのも巧みである。是と次の反歌とは、共に長歌に歌ひ残した情景を詠歎的に歌つてゐる。

三一

樂浪の 志賀の大わだ 淀むとも 昔の人に またも逢はめやも
左散難彌乃 志我能大和太 與杼六友 昔 人二 亦 母相 目八毛

【釋】○志賀の大わだ 「大わだ」を拾穂抄・僻案抄・燈放證・美夫君志講義等に、大海の義で琵琶湖を指したものと見て居るが、代匠記考略解古義等には「わた」を曲の義として、入江を指したものと見て居る。「樂浪の志賀の大わだ」とあるから、湖水全體を指したのではなく、湖の一局部と見なければならぬ。従つて後説の如く大きな入江になつてゐる處を指したと見るのが穩當である。思ふに「わた」は「陽」(「はらわた」とも言ふ)や「蟻」の「わた」と同系語で、屈曲したものを云ふのである。「川曲」「河勾」「河曲」等の地名が諸國にあり、又「川曲」「水曲」等の語のあるのを参考すべきである。さて此の附近は、泥沙が堆積して地形が一變してゐるので、何處を指したのか詳かでない。○淀むとも 燈に此の「大わだ」の水は絶えず勢多の方へ流れて居るので、たとへ此の水が淀む時はあつても、と假定して歌つたのであると解いて居る。(僻案抄・燈放證・美夫君志等同説)次に代匠記や古義等には、大曲

の水が常に淀んでゐて、恰も人を待ち受けるものやうに思はれるので、かく歌つたのであると解釋して居る。大曲の地形から推量すると、後説に従ふのが妥當である。此の場合の「とも」の意は既定事實を條件とする助詞「ども」に近い。一句の意は淀んでゐても。○昔の人 昔大津宮に仕へた人。○またも逢はめやも 「また」は再びの意。「逢はめ」の「め」は「む」の已然形。「やも」の「や」は反語の助詞、「も」は詠歎の助詞である。

【譯】樂浪の滋賀の入江の水は昔のままに淀んで、人待ち顔であるけれども、昔ここに船を寄せた大宮人に、再び逢ふことが出来ようか。二度と逢ふことはないのだ。

【評】湖上に船を浮べた昔日の賑かさを懐古して、眼前の寂しい光景に及ぼして感慨の情を歌つてゐる。結句の字餘りが深い詠歎を現してゐる。

高市古人感傷近江舊堵一作歌 或書云高市連黒人

三三 古の人 人にわれあれや 樂浪ささなみの 古き都を 見れば悲しき
古 人爾和禮有 哉 樂浪乃 故 京乎 見 者悲 寸

【釋】○高市古人 或書に「黒人」とある如く、「古人」は「黒人」の誤であらうと云ふのが諸註の説である。考には「古人」と記したのは此の歌の初句の「古」の字から誤に陥つたのであらうと云つて居る。黒人の傳は詳かでない。卷一・三九十七に此の人の短歌が十八首ある。此等によつて人麻呂とほぼ同時代に、宮廷に仕へた人である事が知られる。○感傷 考にカナシミテと訓んでゐる。○舊堵 「堵」を「都」の誤と見る説もあるが、集中に「都」の代りに

に「堵」を用ゐた所が一二あるから、誤ではなく音の通じる爲に代用したのであらう。

○古の人 原文の「古人爾云々」を流布本にフルヒトニワレアルラマヤと訓んであるが、類聚古集古葉略類聚鈔等の訓にイニシヘノヒトニワレアレヤとあつて、代匠記精撰本以下諸註是に従つて居る。但し新訓新解にはフリニシヒトニワレアレヤと訓み、また生田耕一氏はフルヒトニワレアラマヤモ及びフルヒトニワレアレバカモの二つの試訓を提唱されて居る。(『萬葉難語難訓攷』所載論文参照)次に「古の人」は、古の大津宮時代の人の意と見るのが通説であるが、花田氏の私解には古を戀ひ懐かしむ昔氣質の人の意に解いてある。又新解には「古りにし人」を、回顧に暮れる昔べの人と解いてあり、生田氏は「古人」を(イ)大津宮に仕へ當時の盛況を目のあたり見た老人、(ロ)舊都にとつて昔なじみの人、(ハ)世に用ゐられぬ人朽ち果てた人の三様に解し得る事を述べて居られる。今は姑く訓義共に従來の一般説に従つて置く。○われあれや 此の句を燈臺繩美夫君志新考等に反語の意味に解いてゐるのは従ひ難い。是は既に述べた通り、用言の已然形に助詞の「ば」を添へる事なくして、既定事實の條件を表してゐるのであつて、此所では其の已然形が直ちに疑問の係助詞の「や」に接してゐる。類例を二三擧げるとらば「厭きこと有哉君が來まさぬ」(一五〇一)「湯の原に鳴く蘆鶴は吾が如く妹に戀哉時わかす鳴く」(九六一)「今よりは逢はじと爲也白妙の我が衣手の干る時もなき」(二九五四)等がある。従つて此の句は吾あればにやの意である。而して句末の「や」は下の「悲しき」に懸つてゐる。古義に「大津宮の世の人にてあらば、都の荒れたるが悲しかるべき理なり。されば我はその京都の全盛なりし時にあへる古人にてあればにや。」と解いて居る通りである。○見れば悲しき 「悲しき」と連體形で結んだのは、上の係助詞「や」に對する結である。

【譯】自分は大津の宮の榮えてゐた當時の人でもあるのか、樂浪の舊都を來て見ると、不思議なほど悲哀の情が起ることである。

【評】「古の人にわれあれや」といふ句に、多少理窟めいた所があるけれども、感動の餘りわれとわが身を怪しんだのが、感慨の深い事を示してゐて面白い。

三三 樂浪の國つ御神のうらさびて 荒れたる都 見れば悲しも

樂浪乃 國都美神乃 浦 佐備而 荒 有 京 見 者悲 毛

【釋】國つ御神 「國」は上の句から續いて、樂浪の國の意を示してゐる。「國」は一地域を指すのであつて、「吉野の國」「泊瀬の國」などの「國」と同じである。「國つ御神」は一般には「天つ神」即ち天神に對する地祇であるが、此處では樂浪の國土の靈を指してゐる。上代人は國土に神靈が宿つてゐるものと考へて、之を神として崇敬したのである。後に講ずる人麻呂が讚岐の狹岑島で、石中の死人を見て詠んだ歌の冒頭に、「玉藻よし讚岐の國は國からか見れども飽かぬ神からかこた貴き云々」(二二〇)と歌つてゐるのも、讚岐國を國と云ふと共に、一方では直ちに神として歌つた例である。「(二二〇)参照。此の外集中には山川國土を直ちに神として歌つた例が幾らもある。○うらさびて 「うら」は前に「うら歎き居れば」の條に説いた通り心の中の意を表す。「さび」は形容詞の「さぶし」(淋)に對する上二段活用の動詞「さぶ」の連用形である。「さぶ」は淋しい状態になる事、即ちさびれる意である。「且夕に左備つつ居らむ」(五七二)の如き用例がある。此の「さび」を燈や古義に「勝さび」「神さび」「山さび」「翁さ

び」等の「さび」と同じであると解釋してゐるのは誤である。此等の「さび」は後に説明する通り接尾語で、「うらさび」の「さび」は動詞である。「うらさぶ」は心が沈み衰へる意。用例に「夕さればあやに悲しみ明けくれば裏佐備暮らし」(一五九)「君は此の頃宇良佐備て嘆かひ坐す」(四二二)等がある。此の句を考證古義美夫君志等に、國つ御神の御心が荒んで、遂に世の亂を起して都も荒れたのを云ふ、と解いてゐるのは穩當でない。又新考講義等に、神の廣前もさびれはてた意に解いてゐるのは、神の觀念に於て妥當を缺くやうである。

【譯】樂浪の國土の神の御心が滅入つてしまつて、(昔の榮えは夢と消えて)荒涼たる光景となつた舊都を見ると、まことに哀愁の情を催すことである。

【評】人爲に歸する事の出来ない荒廢の様を、しみくと歎じてゐる歌である。一直線に歌ひ去つた句法の上に、深い悲しみの情が現れて居る。

幸三子紀伊國時川島皇子御作歌 或云山上臣憶良作

三四 白浪の濱松が枝の 手向草 幾代までにか 年の經ぬらむ

白浪乃 濱松之枝乃 手向草 幾代左右二賀 年乃經去良武

【釋】幸三子紀伊國時 左註に「日本紀曰、朱鳥四年庚寅秋九月、天皇幸紀伊國也。」とある。「庚寅」は持統天皇の四年である。而して「朱鳥」は天武天皇の最後の年の年號であるから、左註の「四年」は「五年」とあるべき所であるが、これは日本書紀の古本と今本との間に、一年の相違があるのに依るのであると云はれて居る。○川島皇子

天智天皇の皇子で、御母は色夫古娘（いろむらめ）である。皇子の詩は懷風藻に載つて居る。○或云山上臣憶良作 一説には憶良の作と傳へられて居るといふのである。卷九（一七一六）に是と殆ど同じ歌を載せて、其の題詞には「山上歌」と記し、左註に「或云河島皇子御作歌」とある。

○白浪の 考に「白浪」を「白神」又は「白良」の誤であらうとし、之を地名と見てゐるのは妥當でない。是は第二句の句頭の「濱」に續く修飾語的枕詞である。古義に「白浪の穂」と懸るのを轉じて、「濱」の「は」に懸けたのであると言つてゐるのは穩當でない。略解新考講義等にある通り白浪の打ち寄せる濱といふ義である。○手向草 神に手向ける料をいふ。昔は旅の安全を祈る爲に、道々の神に白い布帛の幣（ぬま）を手向ける風習があつた。此の歌は、濱邊の松の枝に誰が手向けたとも知れない幣が懸つてゐるのを見て詠んだのである。○幾代までにか 本文の「左右」を「マデ」と訓むのは、兩手を眞手（まて）といふのによる。「二手」又は「諸手」を「マデ」と訓ませた例もある。講義に「までは過去を溯つて考へる時にも用ゐるので、此の場合の如きは今の俗語にいふ「ほど」に當ると言はれて居る。「か」は下の「經ぬらむ」に懸る疑問の助詞。

【譯】白浪の打ち寄せる此の濱邊の松の枝に、神に手向けた幣が懸つて居るのは、誰が手向けたものか知れないけれども、一體今日までに幾年ぐらゐ年を経たのであらうか。

【評】苦痛の多い憂い旅にある作者にとつては、ふと見出した路傍の松に結んである手向草に對して、恰も同情者を得たやうな感が起り、又其の幣の古びて居るのが、何となくはかなく悲しいものに感ぜられたのであらう。

幸三子吉野宮之時柿本朝臣人麻呂作歌

三六

やすみしし 吾が大君の 聞こし食す 天の下に 國はしも さはに有れども
八隅 知之 吾 大王之 所 聞 食 天 下 爾 國者 思 毛 澤 二 雖 有

山川の 清き河内と 御心を 吉野の國の 花散らふ 秋津の野邊に 宮柱
山川之 清 河内跡 御心乎 吉野乃國之 花散相 秋津乃野邊爾 宮柱

太敷き坐せば 百磯城の 大宮人は 船並めて 朝川渡り 船競ひ 夕河渡る
太敷 座 波 百磯城乃 大宮人者 船並 舩 且川渡 舟競 夕河渡

此の川の 絶ゆる事なく 此の山の 彌高からし いははしる 瀧の宮處は
此 川乃 絶 事奈久 此 山乃 彌高 良之 珠 水 激 瀧之宮子波

見れど飽かぬかも
見禮跡不 飽可聞

【釋】○幸三子吉野宮之時 「吉野宮」は（二一七）に説明した通り、宮瀧の地に設けられた離宮である。其の處は背後に山を負ひ、前は吉野川を隔てて喜佐谷に相對し、吉野川の水が岩にせかれてたぎり流れてゐて、山水の景趣に富んでゐる。日本書紀を見ると、持統天皇の三年から十一年まで、毎年此處に行幸があり、多い歳には一年に數回行幸があつた。此の歌以下二首の長歌と其の反歌は、其の間の何れかの行幸に陪從した時に、人麻呂が詠んだものである。

○やすみしし「大君」の枕詞。(既出)○聞こし食す 此の句を流布本にキコシメスと訓み、僻案抄檜端手新解等は是に従つてゐる。金澤文庫本西本願寺本等にはキコシヲスと訓み、考以下諸註にかう訓んでゐる。假名書の例



吉野離宮址附近

此所では下にある「秋津の野邊」の地を指す。○御心を 御心を寄せ給ふといふ意で、ヨシに言ひ掛けた枕詞であるが、單なる枕詞として用ゐたのでなく、上を承けて更に下へ言ひ続ける役目をつとめてゐる。○吉野の國 吉野の地を指したので、下にある「秋津の野邊」などは其の一部である。○花散らふ 「散らふ」は「散る」に動作の繼續反復を表す助動詞の「ふ」が附いた形である。種々の花が咲いては散り、咲いては散りする意を表す。○秋津の野邊 「秋津野」は吉野離宮の在つた宮瀧のあたりの古名であらう。今宮瀧の西南に御園といふ所があつて、其の

字に「秋戸」といふ地名があるのは、「秋津」の名残であらうと云はれて居る。古事記及び日本書紀の雄略天皇の段に、天皇が吉野國に行幸遊ばされて、秋津野に於て御獵し給うた折に、御吳床に坐しました天皇の御腕に蛇が咋ひ付いた時、忽ち蜻蛉が飛んで来て其の蛇を咋へて飛び去つた。斯くて天皇は蜻蛉を嘉し給うて、「三吉野の小牟



吉野離宮址前方の景色

漏が岳に鹿猪伏すと云々(古事記)の御歌を詠み給ひ、又其の野を蜻蛉の名に因んで「蜻蛉野」と名付け給うた、と云ふ傳説を載せてある。是は言ふまでもなく、民間語原説によつて地名の起原を説明した説話に過ぎない。○宮柱太敷き坐せば 宮を營んでそれに坐します事を云ふ。古事記や祝詞に「底つ岩根に宮柱太知り高天原に氷木高知り」或は「下つ磐根に宮柱太敷き立て高天原に千木高知り」の如き語句が屢用ゐられて居るが、此處もそれと同じ意味を表して居る。此の句は一語一語が厳格な意義を有して居るのでなく、神又は天皇が宮に坐します様を稱へて言ふ常套語である。「宮柱」は宮殿の柱。「敷く」は前述の如く領する意であつて、宮を營んでそれに坐しますのをいふ。「太」は「太敷かす都を置きて(四五)」「神ながら太敷きまして(一六七)等の用例に見る如く、「高知り」「廣敷く」の「高」「廣」と同じ性質の稱詞として冠したのであるが、一面には「柱」の

縁語ともなつてゐる。○百磯城の 「大宮」の枕詞 (既出)○船並めて朝川渡り云々 「船並めて」は船を並べて。上に「馬並めて」といふ例があつた通り、並べる事を古くは「なむ」と言つた。此の句以下の四句は、二句づつの對

句であつて、朝に夕に大宮人が船で吉野川を渡つて奉仕する様を歌つたのである。○船競ひ 此の句を元曆校本、古葉略類聚鈔等にフナクラベ、金澤文庫本等にフナヨソヒと訓んであるが、流布本の訓フナキホヒがよい。假名書の例に「布奈藝保布堀江の河」(四四六二)がある。「きはふ」は「きそふ」と同じで競争する意の古語。○此の川の云々 此の句の上には、「此の宮は」の如き語があるべきのを省いたのである。吉野川の流が永久に絶える事のないやうにの意で、宮の永久榮え給ふ事を祝したのである。○此の山の 離宮の附近にある山々を指してゐる。○彌高からし 此の句と次の句は流布本の本文に「彌高良之珠水激瀧」とあつて、之を流布本にイヤタカカラシ、タマミツノタキと訓み、考放證等にイヤタカカラシ、イハハシルタギと訓んである。然るに此の句の「良之」は元曆校本類聚古集古葉略類聚鈔等に「思良」とあつて、古葉略類聚鈔の訓にイヤタカシラスとある。因つて新訓新解は之を採用して「彌高思良珠、水激」と訓んである。併し本文は流布本に従ひ、訓は放證に従つて意はよく通じるから、必ずしも流布本の本文を改める必要は無いやうである。「いや高からし」は「いや高くあるらし」の約言である。即ちクとアが約まつてカとなり、ルラとラ行音が二つ重なるので、ルが省かれてラとなつたのである。山がますます高いやうに、離宮も今後益榮え給ふやうにと壽き奉つたのである。(新解にはいよいよ高く御占據遊ばされるの義と解いてある。○)「此の川の」以下の四句はこれ亦二句對である。此の對句はそれぞれ譬喩であるが、其の主語及び述語が省略されてゐるので、從來種々に解釋せられた。即ち(イ)代匠記には臣下の仕へ奉ることは吉野川の絶えぬが如く、又君の高御座に坐しますことは吉野山の高きが如くの意に解き、(ロ)僻案抄には大宮の榮えの長久なるべき事を、川水の絶える事なきが如くに、又山のいよいよ高きが如くと詠んだのであると解き、(ハ)

略解には川の絶えぬ如く常に御幸し給ひ、山の高く動きなきが如く永久に宮居し給はむことを壽いだのであると解いてゐる。(考放證同説)思ふに「此の川の云々」「此の山の云々」といふ對句は、山川を引合に出して長久なるべき事を祝賀したのであつて、その省略せられた主語は、此の長歌の詠まれた直接の對象即ち吉野宮である。従つて僻案抄の解が穩當であると思ふ。○いははしる 岩石の上を水が送り流れる意で、「瀧」の枕詞に用ゐたのである。原文の「珠水激」は冠辭考の説の如く、玉水が石の上を激して流れる意によつて記したのである。前述の如く新解には「水激」をミヅハシルと訓んで、水の奔流する意で、次の句の修飾語と解いてある。○瀧の宮處 「たぎ」は動詞「たぎつ」の語幹である。動詞の場合は「石走り多藝千流る泊瀬川」(九九二)「磯の間ゆ多藝都山川」(三六一九)の如く、タ行四段に活用する。「たぎつ」は今も「湯がたぎる」など言ふ「たぎる」と同じ意で、水が逆巻く事である。従つて此所の「瀧」は瀑布ではなく「たぎつ瀬」即ち水の奔流する所を云ふ。「みやこ」は本來宮處の義で轉じて都の意となる。此所は原義で用ゐてある。○見れど飽かぬかも 幾度見ても飽く事のない佳い景であるといふ意。此の句は集中に屢用ゐられてゐる。「かも」の「か」は疑問の助詞、「も」は感動の助詞であるが、「か」と「も」が重なつた「かも」が、體言又は活用語の連體形を承けて文を終止した場合には、平安朝時代に用ゐられた「かな」と同じく、感動詠歎を表す助詞となる。

【譯】我が大君がお治め遊ばされてゐる天の下に、景色の佳い國は多くあるけれども、とりわけ山と川との景色の清い河内であるとして、特に御心をお寄せになつてゐる此の吉野の、花の頻りに散る秋津の野邊に、壯麗なる宮殿を營んでお住まひになると、大宮人は船を並べ先を競うて、朝に夕に川を渡つて宮にお仕へ申上げる。此の川の

絶えることの無いのと同様、又此の山の何時までも搖ぎなく高くあるのと同様に、永久榮えて行くであらう此の瀧の宮居は、幾度眺めても見飽く事のない誠に佳い所である。

【評】遊幸や宴飲に侍して應詔の詩を奉る事は支那の風習であつて、之を模倣した作は我が國の『懷風藻』に幾らもある。其の應詔の詠詩はやがて和歌にも試みられたのであつて、此の長歌並に反歌の如きもそれに擬したものに相違ない。此の歌に於ては、謹嚴莊重な調で終始奉讃の詞を以て堂々と歌つた點が、當代の國民思想の現れとして注意せられる。山と川とによつて聖徳を讃へたのは、論語の「知者樂水、仁者樂山。」の思想に倣つたものであつて、これも『懷風藻』の詩に幾らも散見する。

反歌

三七

見れど飽かぬ 吉野の河の 床滑の 絶ゆる事なく また還り見む
見飽 奴 吉野乃河之 常滑乃 絶 事無久 復 還 見牟

【釋】見れど飽かぬ 長歌の結尾句を繰返したのである。○床滑の「とこなめ」の解釋に種々の説がある。(イ)仙覺抄や管見には常に滑かな巖の義とし、(ロ)考には常なへに絶えぬ流れの石に著いてゐる滑かなものと云ひ、(ハ)略解燈美夫君志には常なへに滑かなる義で、水の流れの事とし、(ニ)攷證には常に岩などに著いてゐる滑かな苔と解し、(ホ)古義には底滑の義で、水底の石に生ひ著いたものであるとし、(ヘ)新考には川中に頂の平らな岩が並んでゐるのを云ふとし、(ト)徳田淨氏の「常滑考」(『國學院雜誌』第三七卷第一號所載)には、磐石であると

されてゐる。此等が主なる説である。思ふに「とこなめ」の「とこ」は、(ホ)の説のやうに川床即ち川底の事で、「なめ」は「なめらか」「なめる」「ぬめる」「のめる」とも言ふ「なめす」等の「なめ」と同じく、滑かなものの義であらう。従つて「とこなめ」は川底に生えてゐる水苔の事である。今も大和では水中の石などに附いてゐる水苔を「なめ」と呼んでゐる。「の」は、如くの意。此の句は「絶ゆる事なく」の譬喩に用ゐてある。

【譯】幾度見ても見飽きのしない、此の吉野の川の川底に生える水苔のやうに、絶えることなく幾度も此處に立ちかへり來て見たいものである。

三〇

やすみしし 吾が大君 神ながら 神さびせすと 芳野川 たぎつ河内に 高
安 見知之 吾 大王 神長 柄 神佐備世須登 芳野川 多藝津河内爾 高
殿を 高知りまして 登り立ち 國見をすれば 疊なはる 青垣山 山神の
殿乎 高知 座 而 上 立 國見乎爲 波 疊 有 青垣山 山神乃
奉る貢と 春べは 花かざし持ち 秋立てば 黄葉かざせり 遊副川の 神も
奉御調等 春部者 花挿頭 持 秋立 者 黄葉頭刺 理 遊副川之 神母
大御食に 仕へ奉ると 上つ瀬に 鶴川を立て 下つ瀬に 小綱さし渡す 山
大御食爾 仕 奉 等 上 瀬爾 鶴川乎立 下 瀬爾 小綱刺 渡 山
川も 依りて仕ふる 神の御代かも
川母 依 氏奉 流 神乃神代鴨

【釋】此の長歌及び次の反歌は前の長歌と同じ時の作である。○神ながら「神長柄」を流布本にカミナカラと訓んであるが、是は放證にカムナカラと訓んだのがよい。假名書の例に「可武奈何良可武佐備坐す」(八一三)「可無奈我良」(四〇〇三)などがある。次の句の「神佐備」も假名書の例に據つて、同様にカムサビと訓む。此の句は集中の常套語であつて、元來は神に坐しますが故に、又は現つ神に坐しますままにの意であるが、簡單に譯すれば神と坐しまして、又は現つ神としてである。「ながら」の「な」は(二)の「海原」の條に説明した通り、「の」と同じ意の格助詞であり、「から」は故の義を表す語で、口語の「から」は其の名残である。此の「から」は「な」の「が」「つ」等の格助詞を承けて、「ながら」「のから」「がから」「つから」となつて、何々の故にの意を表す。一二の用例を挙げれば、「ほととぎす一夜能可良爾戀ひ渡るかも」(四〇六九)「わ我可良爾泣きし心を忘れぬかも」(四三五六)等がある。又今日用ゐる「自ら」「自ら」なども、元來は「已つから」「身つから」の義であらう。(『奈良朝文法史』三五六一八頁参照。なほ(二二〇)の「國から」参照。○神さびせすと 神らしく振舞ひ給ふとの意である。「さぶ」は「處女さぶ」「男さぶ」「翁さぶ」「山さぶ」などの「さぶ」で、名詞に附いて上二段活用の動詞を作り、専らそれらしい振舞をする意を表す接尾語である。「神さぶ」は上二段活用の動詞で、此所の「神さび」は、其の連用形を名詞に用ゐたのである。終の「せす」は動詞の「す」に、敬語の助動詞の「す」が添うた語形。此の二句は天皇は神にましますので、神としての行動を遊ばすといふ意で、下の「高殿を高知りまして云々」の句を起す前提である。なほ以上の二句の句頭には、カム(神)といふ音を繰返して聲調を整へてある。○たぎつ河内 吉野川の水が岩に激して急湍をなしてゐる河内で、即ち宮瀧の景趣を敘べたのである。「たぎつ」に就いて講義に、「たぎ」を「瀧の宮處」のそれと

同じく名詞とし「つ」を「の」の意の助詞と解いてあるが、「たぎつ」は前述の如く四段活用の動詞の連體形である。集中にはなほ「落多藝都瀬の音も清し」(二〇五三)「み吉野の清き河内の多藝津白波」(九〇八)等連體形の用例がある。○高殿を高知りまして 高殿を宮居としてお住みになる事。「高殿」は日本靈異記の訓註に「樓閣多加」とある



吉野の河内内河の現狀

通り樓閣であるが、此處では宏莊なる御殿の意で用ゐてある。「高殿」と云つたから「知る」といふ動詞に「高」といふ接頭語を添へて音調を整へたのである。「高知る」の「高」は稱詞で、「知る」は前の長歌の所で述べた通り領有する意である。○國見をすれば 「國見」の事は前に述べた。新解に此所は天皇の御事を敘べたのであるから、「すれば」(爲波)では相應しくないとして、冷泉本に「爲勢婆」とあるのを採用してセセバと訓み、セセを動詞「す」に敬語の助動詞「す」を添へた「せす」の已然形であると解いてある。然し此の「せす」の未然形及び已然形の用例は他に無いから、新解の説はなほ研究を要する。又かやうな場合に敬語を用ゐない例は集中に幾らもある。今は流布本の訓に従つて置く。

○疊なはる 原文の「疊有」を流布本にタタナハル、元曆校本古葉略類聚鈔にカサネタル、温故堂本大矢本等にカサナレルと訓んである。仙覺抄代匠記にはタタナハルと訓んで重なりたる意であると解き、僻案抄には「有」を「著」の誤と見て、タタナツクと訓むべきかと云つて居る。又冠辭考に

は古事記に「多那豆久青垣山隠れる倭し美し」萬葉集に「芳野の宮は立名附青垣山」(九三三)「田立名付青垣山の」(三一八七)とあるのを引いて、「有」を「付」の誤と見てタタナツクと訓み、疊なはり著く山の意で「青垣山」に懸る枕詞であると解いてゐる。又古事記傳卷廿八には、冠辭考の説を承けてタタナツクはタタナハリナツクの意で、元來はタタナナツクであるが、同音の一を省いてタタナツクと云つたのであると解いてゐる。斯様に「有」を誤字と見てタタナツクと訓み、之を「青垣山」の枕詞とする説があるが、原文の「疊有」には諸本に異同が無いので、流布本の訓タタナハル(考略解燈攷證等同訓)に従ふべきであるとするのが、最近の一般説である。さて「たたなはる」は、枕草子に「そばの方に髪のうちたなはりてゆららかなる」と用ゐられてゐる外、宇津保濱松中納言狭衣等の平安朝物語類に用例が見えて居る。而して伊呂波字類抄や類聚名義抄には、「委」をタタナハルと訓んであつて、其の「委」の字義は「積」であるから、「たたなはる」の語義は攷證に疊重即ち重なり積る意と解いて居る通りである。さて「疊なはる」といふ動詞は、「疊む」と同義語の「疊ぬ」と關係のある事は明瞭である。「疊ぬ」はナ行下二段に活用したのであつて、其の用例には「君が行く道の長道を繰り多々禰焼き滅ぼさむ天の火もがも」(三七二四)がある。「疊ぬ」に對する「疊なはる」と同じ關係の動詞を他に求めると、「糾ぬ」に對する「糾なはる」、「清む」に對する「清まはる」、「齋む」に對する「齋まはる」等がある。山田孝雄博士の説明に據れば、「齋まはる」、「清まはる」はそれぞれ「齋む」、「清む」といふ動詞から轉じて、「齋まふ」、「清まふ」といふ下二段活用の動詞を生じ、更にそれより轉じて「齋まはる」、「清まはる」を生じたのであらうと云ふ。右の説明によつて、「疊ぬ」から「疊なはる」が派生した徑路は明かである。(拙著『祝詞新講』一三二—一頁掲載山田博士の解説參照)要するに此の句は重疊せるの意で「青

垣山」の修飾語である。○青垣山 垣を廻らしたやうに、四面を取り圍んでゐる青い山々を云ふ。○山神の「山神」はヤマツミと訓む。古事記に「次生山神、名大山津見神」と見える通り、山を掌る神即ち大山津見神を指す。○奉る貢と「まつる」は祭る獻る等の意味が原義で、それから轉じては動詞の下に附いて、敬語の助動詞の用をもなすのである。此處は獻る意に用ゐてあるが、下の「仕へ奉る」の「奉る」は助動詞的に用ゐてある。「みつぎ」の「み」は敬稱の接頭語で、「つき」は朝廷に獻る調賦を云ふ。和名抄に「調布讀豆岐乃沼乃」とある。「と」はとしての意。○春べは 訓は考に據つた。流布本にハルヘニハとある。「べ」は「何方」「後方」「都方」等と用ゐて方角を表す接尾語であるが、又「春べ」「夕べ」「古(往にしへ)の如く時を示すにも用ゐられる。春の頃にはの意。○花かさし 持ち「かさし」は動詞の「かさす」の連用形。「かさす」は「かみさす」(髮刺)の約まつた語で、四季の花や黄葉などを手折つて、髪に挿して飾とするのを云ふ。「かさす」の用例は「梅の花手折り加射志て遊べども」(八三六)等幾らもある。後世の「かんざし」(簪)といふ語は、此の動詞の名詞形「かみさし」の音便である。さて此處は山上に花の咲くことを擬人法を以て敘べ、而もそれを恰も山の神が天皇に捧げ奉つてゐるやうに見做して歌つたのである。○秋立てば 秋が來ればの意。此の「立つ」は時が到來する意である。他の用例を挙げれば「正月多知春の來らば」(八一五)「卯の花の咲く月多知ぬほととぎす來鳴き響めよ」(四〇六六)等がある。因みに「朔日」は「月立」の音便で、其の「立ち」も是と同じである。○遊副川の 原文の「遊副川」を流布本にユフカハと訓んであるが、古葉略類聚鈔にはユキソフカハと訓んである。元曆校本には「遊」が「逝」とあるので、新解はこれに據つて「逝副川之神母」をユキソフ、カハノカミモと句切つて訓んである。又全釋には元曆校本の「逝」を「遊」の誤であらうと推定してユフカ

ハと訓み、吉野川の上流の丹生川であらうかと述べてある。併し今は姑く「遊副川」をユフカハと訓み、吉野川の上流の古名であらうとする通説に従つて置く。尤も今は此の名を存してゐない。さて「遊副川」以下八句は、前の「疊なはる青垣山云々」の八句と對句であつて、山の景と川の景とを對立的に敍べてゐるのである。○神も從來此の句の上に脱字があるとする説もあつたが、是は三音句である。古形式の長歌には、斯様な七音句の在るべき所に、三音句を用いた場合が稀にある。○大御食に「大」御は共に敬意を添へる接頭語。「け」は「うけ」(日本紀私記に「宇氣者食之義也」とある)の「う」が省かれた語で、「朝食」「夕食」なども用ゐる。即ち「け」は食物を云ふ。「大御食に仕へ奉ると」は御食饌の御料としての意。○上つ瀬に「つ」は「の」の義の助詞。「上つ瀬云々」は下の「下つ瀬云々」と對句である。○鶴川を立て「鶴川」は諸註にある通り、鶴を川に放つて鮎を捕らせる事即ち鶴飼である。此の句の解釋には諸説がある。(イ)小琴には此の「立て」は「御獵立たす」「射部立て」などの「立て」と同じで、此の句は鶴川をする人々を立たせる意であると解き、略解燈墨繼古義等は此の説に従つて居る。(ロ)攷證には「立て」は「高杯」に盛り机に立てて母に奉りつや(三八八〇)の「立て」と同じく、物を据ゑ置く意と解いてゐる。(ハ)美夫君志には「立つ」を「朝獵に今立たすらし」(三)「御獵立たし」(四九)などの「立つ」と同じで、事を催す意であると解いてある。(ニ)新考にはウガハヲタチと訓んで、「立つ」は四段活用の他動詞で漁獵を催す意であると解き、澤瀉氏の新釋も是に従つてある。(ホ)講義には是は「鶴川に立つ」事を人にさせるのを、「鶴川を立て」と言つたのであつて、川の神が鶴飼人に命じて鶴川をさせる意であると解いてある。以上が從來の諸説である。先づ「鶴川」の用例を一瞥するに、「ものものふの八十伴の緒の思ふどち心遣らむと(中略)清き瀬毎に宇加波多知」(三九九一)「婦負河の早き瀬毎に籌さし八十伴の緒は宇加波多知けり」(四〇三三)「我が背子は宇河波多多さね」(一九〇〇)の如く、「鶴川立つ」と用ゐられて居り、其の「立つ」は四段活用である。然るに此の「立つ」と同じ語と思はれる「御獵立師斯時は來向ふ」(四九)の「御獵立つ」は、一方に「丈夫は御獵爾立之」(一〇〇一)ともある通り、「御獵に立つ」と言ふべきを、其の助詞「に」を省いたものと見られる。是は「旅に立つ」を「旅立つ」と言ひ「旅に行く」を「旅行く」と言ふのと同類である。従つて「鶴川立つ」「御獵立つ」は鶴川に立つ・御獵に立つの意で、其の「立つ」は出で立つ意の自動詞であつて、催す意の他動詞とは考へられない。さて此の歌の「鶴川を立て」「立て」は他動詞で、其の主格は川の神であるから、ここは姑く小琴の説に據つて、神が鶴飼人を川に出で立たせる意に解くのが穩かであらうと思ふ。○小網さし渡す「刺渡」を流布本並に諸註にサンワタシと訓んで居るが、前に「黄葉かさせり」と切つてあるから、此處も古義の訓に據つてサンワタスと訓むのがよい。「小網」は和名抄に「纏網如箕形、狭後廣前者也」とある。「さで」は倭訓栞に「小手の義であると言つてゐるが、「さ手網」の略であらう。今も手網の事を「さで」と呼んでゐる。「小網」は集中に「左提刺に衣手濡れぬ」(一七一七)「平瀬には左泥刺渡る」(四一八九)また神樂歌に「小網指し上る」と歌はれてゐる。「小網さす」は小網を水中に指し入れて魚を捕る動作を云ふ。「さし渡る」又は「さし上る」と云ふのは、講義の説の通り小網をさしながら川の中を歩くことである。而して此の歌の場合、神が宮仕への人に小網をさしながら川を渡らせるのであるから、「小網さし渡す」と言つたのである。「さし渡す」の「さし」を接頭語と見て、「渡す」を網を張り渡す意に解くのは妥當でない。○山川も山の神も川の神も

の意。○依りて仕ふる「依氏奉流」を流布本にヨリテツカフル、元曆校本にヨリテタテマツル、神田本にヨリテ

マツルなどと訓んである。諸註は流布本の訓に従つてゐるが、攷證には「奉」をツカフと訓んだ例が他に無いので、此の句をヨリテマツレルと訓んでゐる。(新解全釋同訓)今は姑く通説に従つて、ヨリテツカフルと訓んで置く。さて「依りて」を代匠記精撰本に帝徳に歸す意と解き、講義に山も川も相共に一つ心になつての意と解いてある。思ふにこの「依る」は、「吾妹子に心も身さへ寄りにしものを」(五四七)「心は妹に依りにけるかも」(三二四二)などの「依る」と同じく、慕ひ寄る又は寄り靡く意に解くべきである。一句の意は大君に寄り靡いて奉仕してゐるの意。○神の御代かも 貴い御代であるといふ意。初に天皇を現つ神と讃へたので、結をそれと照應させて、げにも神の御代であると歌ひ収めたのである。

【譯】わが大君は現つ御神であらせられるから、神のわざを遊ばさうとして、吉野川の水の激して流れる景色の佳い河内に、高殿を高くお構へになつて、それにお登りになつて國見を遊ばすと、重なり合つてゐる四方の青い山は、その山の神が獻る貢物として、春の頃は美しい花を挿頭して奉り、秋になると美しい紅葉を挿頭して奉る。また遊副川の神も御食饌の御料に差上げようとして、上手の瀬には鶴飼を行はせ、下手の瀬には小網をさして渡らせてゐる。かやうに山の神も川の神も、大君に靡き寄つて御仕へ申上げてゐる現代は、げにも神の御代であることだ。

【評】前の長歌は宮仕人が先を競うて奉仕する様を歌つて、離宮の繁榮を奉讃したのであるが、此の長歌は山川の神までが、それぞれ貢物を獻つてお仕へ申上げてゐる事を敍べて、御稜威の畏さを讃へたのである。彼と並べて見て興味のある歌となつてゐる。次に此の長歌の修辭法を見ると、美しい聲調と複雑な對句とが巧みに用ゐられてゐる。「神ながら神さびせすと」の二句には、句頭にカムの音が反復せられて居り、「たぎつ河内に高殿を高知りまして云々」の數句の間には、タの音が頭韻を蹈んでゐて、音調が頗る明快である。又「疊なはる」以下十六句に互る對句を圖示すれば、

| | | | | | |
|------|-----|------|-------|------|--------|
| 疊なはる | 青垣山 | 山神の | 奉る貢と | 春べは | 花かざし持ち |
| | | | | 秋立てば | 黄葉かざせり |
| 遊副川の | 神も | 大御食に | 仕へ奉ると | 上つ瀬に | 鶴川を立て |
| | | | | 下つ瀬に | 小網さし渡す |

の如く複雑巧緻なものである。人麻呂の長歌には、概して斯様な修辭技巧に勝れたものが多いのである。

反歌

三み 山川も 依りて仕ふる 神ながら たぎつ河内に 船出せすかも
山川毛 因 而奉 流 神長 柄 多藝津河内爾 船出爲 加母

【釋】○山川も依りて仕ふる 此の二句は長歌の末の二句を繰返したのである。原文の「因而奉流」を新訓新解にはヨリテマツレルと訓んであるが、是も姑く従來の訓に據つてヨリテツカフルと訓んで置く。「仕ふる」の下には、我が大君はといふ語を補つて解くべき所である。○船出せすかも 「船出爲加母」を流布本にフナデスルカモと訓み(拾穂抄・備案抄・新解同訓)、新解には宮仕への人々が船出をする意に解いてある。然し「神ながら」は「船出す」に

懸つてゐるのであるから、天皇が船出し給ふのである。因つて考の訓に従つて「ナデセスカモ」と訓むべきである。「せず」の「す」は敬意を添へる助動詞。「かも」は感動の助詞。

【譯】山の神も川の神も寄り靡いてお仕へ申してゐる所の我が大君は、現つ神として水の奔流する河内に船を出して、遊を催していらせられることである。

【評】長歌に用ゐた同じ語句を其の儘用ゐては居るが、一首に流れてゐる感情は全く異なつて居る。即ち此の反歌には、碧潭に船を浮かべさせられてゐる現つ神を仰ぎ見た時の、作者の敬虔の情が歌はれて居る。

幸三子伊勢國時留京柿本朝臣人麻呂作歌

四〇 あみの浦に 船乗すらむ をとめらが 玉裳の裾に 潮満つらむか
鳴呼見乃浦爾 船乗爲良武 感 婦等之 珠裳乃須十二 四寶三都良武香

【釋】〇幸三子伊勢國時 持統天皇の六年三月に伊勢に行幸があつた時のことである。(左註及び日本書紀參看)
〇留京云々 其の行幸のあつた時、人麻呂は當時の都であつた飛鳥淨御原宮に留まつてゐて、行幸の様を想ひやつて以下の歌を詠んだのである。〇あみの浦 卷十五に「安胡乃字良に船乗すらむをとめらが赤裳の裾に潮満つらむか(三六一〇)」といふ類歌があつて、其の左註に「柿本朝臣人麻呂歌曰、安美能字良云々」とある。仙覺抄は此の類歌の左註に據つて、「鳴呼見乃浦」を伊勢國の網浦としてゐる。是に對して僻案抄には、卷十五の類歌の「安胡乃字良」に據つて、「鳴呼見」の「見」を「兒」の誤として、志摩國(昔は伊勢の一部であつた)の英虞郡であるとし、僻

案抄以後の諸註は悉く「見」を「兒」の誤と見て居る。伊勢國行幸の御道筋には網浦といふ地名が見當らず、又左註に引いた日本書紀の文に「御阿胡行宮」とあるから、恐らく英虞浦のことであらうと思はれる。英虞(阿胡)浦は今三重縣鳥羽港の附近であらうといふ。併し此の歌は、何れの古寫本にも「見」を「兒」と記したものがなく、又

卷十五の歌の左註にも「安美能字良」とあるから、誤字説には俄かに從ひ難い。〇をとめら 原文の「感婦」は集中に屢用ゐられてゐる文字であつて何れもヲトメと訓む。行幸に供奉してゐる女官を指す。〇玉裳の裾に 「玉」は美稱の接頭語。裳は上代の婦人が腰から下に巻いた袴の如きもので、今の朝鮮の婦人が着けて居る裳によつて、其の形を想像する事が出来る。集中に「赤裳」或は「紅の裳」といふ語が屢見えて居るから、赤色の物を多く用ゐたのであらう。又「赤裳裾曳く」(二〇〇一)「吾妹子が裳引の容儀」(二八九七)と歌つてあるから、裾を長く曳く事もあつたと思はれる。〇潮満つらむか 潮が満ちて女官の裳の裾を濡らしてゐるであらうかといふ意。「らむ」は現在に就いて推量する助動詞であり、「か」は疑問の助詞である。「らむか」の用例には「春雨に吾立ち沾ると家思ふ良武可」(一六九六)「手枕の上に妹待つ覽蚊」(二六三二)「妻呼ぶ牡鹿出で立つ良武可」(四三一九)等



伊勢國の一の部

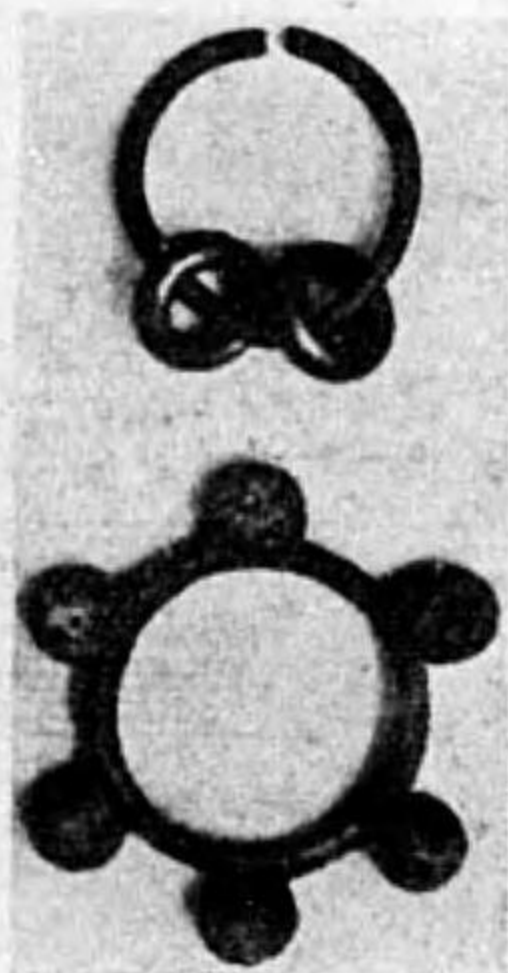
【譯】今時分は英虞の浦に船遊をする女官達が、美しい裳の裾を満ち來る潮に濡らして、うち興じてゐることであ

らう。

【評】女帝にましました持統天皇の供奉員に、多くの女官がゐた事は言ふまでもない。此の歌を誦み味はつてゐると、女性の多い一行が、今や船に乗り移らうとする時、たま／＼満ち来る潮頭に赤裳の裾の濡れるのを恐れて、大袈裟に騒いでゐる美しい光景が、繪のやうに浮んで来る。

四一 釵著く 手節の崎に 今もかも 大宮人の 玉藻苺るらむ
釵著 手節乃崎二 今毛可母 大宮人之 玉藻苺 良武

【釋】○釵著く 此の句を流布本に「釵著」と記して之をタチハキノと訓んであるが、「釵」は類聚古集冷泉本等によつて「釵」に改め、之を僻案抄の訓に據つてクシロツクと訓むのである。「釵」は「釵」の異體字である。「くしり」は



釵

後には「くしり」とも言つた。西洋の婦人が用ゐる腕輪の如き装身具の一種である。上代人の間に廣く用ゐられたもので、貝釵・石釵・玉釵・銅釵・金釵・銀釵・鈴釵などが考古學的遺物として發見せられてゐる。鈴釵は金屬で作つた釵の周圍に、五箇乃至八箇の小鈴を附けたものである。釵は此の歌によつて明かであるやうに、手首に纏いたものやうであるが、又腕にも用ゐたやうである。普通は兩手に著けたやうであるが、卷九に「吾妹兒は久志呂にあらなむ左手の吾が奥の手に纏きていなましを」(一七六六)と歌つてゐるから、一箇の場合には動作の妨げとならないやうに左手に著けたのである。さて「釵著く」は釵を身に著

ける意で、腕臂の意の「手節」に冠して枕詞としたのであるといふのが從來の解釋であるが、品田太吉氏は「手」の一語に懸けたのであると解いて居られる。○手節の崎 「手節」は志摩國答志郡の答志島、即ち今の鳥羽港の沖合



答志島

二十五町程の所に在る長さ一里半許りの島である。「手節の崎」は其の島の東端の崎で今は黒崎と言ふ。前掲地 國參看○今もかも 流布本に「今毛可母」をケフモカモと訓んでゐるが、代匠記精撰本にイマモカモと訓み改めた。但し類聚古集・神田本などには「今」の下に「日」があるので、新訓・新解は之を採用してケフモカモと訓んでゐる。此の句は「今か」といふ語の「今」と「か」の各に「も」を添へて、餘情を表し語調を強めたのである。「か」は疑問の助詞。○玉藻苺るらむ 「玉」は例の美稱の接頭語。藻を刈るのは漁夫のする業であるが、ここでは大宮人が珍らしげに藻を引き上げたりなどして、海濱に打興じてゐるさまを歌つたのである。

【譯】今頃は多分答志の島の濱邊に立ち群れて、大宮人が美しい藻を手にとつて、楽しく遊んでゐるであらう。

【評】第一首に女官の船遊の光景を想像して歌つたから、此の作には大宮人の海濱の行樂を歌つたのである。「釵著く」は枕詞であるけれども、此の場合には内容に全然無關係ではない。即ち腕に釵を纏うた雅かな装をした大宮人が海濱に打群れて、青い藻を珍らしげに引上げたりしてゐる光景を想像して詠んだのである。

四二 潮さるに 伊良湖の島邊 漕ぐ船に 妹乗るらむか 荒き島回を

潮左爲二

五十等兒乃島邊

撈船荷

妹乘

良六鹿

荒

島回乎

【釋】潮さるに「潮さる」は潮のさして來る時の波の騒ぎをいふ。上古語に物の騒ぐ音を形容して「佐和佐和に」(記紀)或は「佐那佐那」(日本紀)と言つた例がある。此等の副詞の「さわ」「さや」を語幹として生じた動詞が「さわく」「さやく」であり、又「さわ」を轉じて名詞としたのが「さる」或は「さる」である。「潮さる」の用例に「鹽左爲の浪を恐み」(三八八)「沖つ志保佐爲高立ち來ぬ」(三七一〇)などがある。○伊良湖の島邊「伊良湖」は三河國渥美郡伊良湖村、即ち渥美郡の西部に當る。渥美半島の先端伊良湖崎は、志摩の答志島と相對して伊勢灣の門戸を形造つてゐて、答志島との間に神島・小築海島・大築海島などが在る。伊良湖崎から志摩への渡りを「伊良湖の渡り」と呼んだ事が『古今著聞集』に見えて居る。「伊良湖の島」は此の渡りに點在する右の島々を指したのである。尤も一説には伊良湖崎を指したのであるとも云ふ。○妹乗るらむか「妹」を女官の中の或一人で、人麻呂の愛人を指したのであると見る説があるけれども、「妹」は妹等の意で女官を指したものと見る從來の一般説が妥當であらう。「らむか」は前出。○荒き島回を 浪の荒い島のあたりをといふ意。「島回」を流布本にシマワと訓み、代匠記僻案抄・考略解燈美夫君志等は此の訓を採用して居る。又熊谷直好はシマベと訓み(括解所引)、攷證は宣長の説に従つてシママと訓み、久老の『信濃漫錄』や守部の『鐘の響』などにはシマミと訓んでゐる。かくの如く「回」の訓にはワ・ベ・ミの四説がある。今集中の他の用例を見ると「浦回」「浦廻」「磯廻」「隈回」等があつて、「回」は「廻」とも記されてゐて、「回」又は「廻」によつて表された此の語は、字義によつてめぐり又はあたりなどの意味を示す事を知るのである。それ故四説の中への訓は穩當でない。次に萬葉假名で記された例を見ると、「之麻末」(三九九一)とあつて、此の「末」は「屢末」の字になつてゐるのでミ・マの兩説を生ずるのであるが、卷五に「道之久麻尾」(八八六)卷十二に「住吉之城師乃浦箕」(二七三五)などの例があるから、「末」を正字と見なければならぬ。従つて「島回」「浦回」等はそれぞれシマミウラミと訓むべきものと知られる。古義新考新訓講義等には「回」をミと訓んでゐる。「回」をミと訓むべき説は講義卷第一、一九七頁及び『國語國文の研究』第二十四號等に詳かである。さて此の句の最後の「を」は、燈になるにの意とし、古義になるもの、をの意としてゐる通り、何々であるものをの意の感動助詞である。

【譯】潮の立ち騒ぐ時に、折しもあの伊良湖の島々の邊を漕ぎ行く船に、かよわい女達は船乗をしてゐることであらうか。あの浪の荒い島のあたりであるものを、どんなに不安を感じてゐるであらう。

【評】山田博士の『萬葉集講義』に「以上三首人麻呂の歌なるが、三首個々の歌とは見えす。第一首は英虞、第二首は答志、第三首は伊良虞と近きより遠きに及ぼし、女官と官人とを交互により、自然に行幸の進みを想像せると共に、供奉の人々の心持を思ひやりたるさまなど、三首相待ちて一團となれること著し」と言はれてゐる。又井上博士の『萬葉集新考』に「三首の調を思ふに、人麻呂は曾て此地方に遊びしならむ」とある。此等は共に傾聽すべき説である。

當麻真人麻呂妻作歌

萬葉集卷一

〇四三 吾が背子は いづく行くらむ 奥つ藻の 名張の山を 今日か越ゆらむ

吾 勢枯波 何 所行 良武 巳津物 隠 乃山乎 今日香越 等六

【釋】〇當麻真人麻呂 傳は詳かでない。「真人」は姓、「麻呂」は名。此の歌は當麻真人麻呂の妻が、旅に出てゐる夫の上を思ひやつて詠んだのである。さて此の歌の前に、伊勢國への行幸の時、京に留まれる人麻呂の詠んだ歌が三首載せてあり、また卷四に此の歌と全く同一の歌〔五一〕を掲げてあり、其の題詞に「幸伊勢國一時當麻呂大夫妻作歌一首」と記してあるのを見て、此の歌は持統天皇の六年の伊勢國への行幸に供奉した當麻呂の妻が、留守居をして詠んだ歌である事は明かである。〇吾が背子は「背子」は「妹子」に對する語で、男子を親しみ貴んで呼ぶ稱である。多く兄弟夫婦の間に用ゐられ、又友人の間にも用ゐられた例がある。此所は妻が夫を指したのである。「せこ」は又單に「せ」と言ふこともある。「こ」は「妹子」の「こ」と同じく、親愛の意を添へる接尾語である。〇いづく行くらむ「何所」を流布本にイツチ、代匠記初稿本書入及び考にイツコと訓んでゐるが、略解にイツクと訓んだのがよい。集中には「伊豆久」といふ假名書の例はあるが、イツコと假名書にした例は無いから、古くはイツクと言つた事が判る。「いづく」は「いづこ」(何處)と同じ意の不定稱代名詞であつて、是を單に「いづ」と言つた例もある。〇奥つ藻の「名張」の枕詞。小琴に本文の「巳」は「起」の略字であると云つてゐるが、支那では「巳」は「起」に通じて用ゐられてゐる。「奥つ藻」は海の深い所に生ずる藻をいふ。水の下に沈んでゐて見えない藻であるから、「隠る」の義の動詞「なばる」と音の通ふ地名の「名張」に言ひ懸けたのである。〇名張の山 流布本の訓にカクレノヤマとあるが、小琴にナバリノヤマと改訓したのが正しい。伊賀國名賀郡名張町(伊賀鐵道の終

點)あたりの山を指す。昔大和から伊勢に行くには伊賀越を通つたのである。選擇に「偶然ではあるが、其の場所が隠れるといふ名張の山であるだけに、何となく暗いやうな感じがあつて、この歌の感情が深く思はれる」とあるのは尤もな説である。〇今日か越ゆらむ「か」は疑問の助詞。此の歌は燈に述べてゐる通り、上に何處を行つてゐるであらうかと詠んで、下にさて日數を數へて見ると、今日あたりは名張山を越えてゐるのであらう、と想像して詠んだのである。

【譯】我が夫は今は何處を旅して居られることであらう。さて今日あたりは、あの伊賀の名張の山を越えて行かれることであらう。

【評】燈の説に、此の作は往路を思ひやつて詠んだものとも見えるけれども、歸路の事を歌つたものと見る方が、待ちわびる情が切に聞えるやうであると云つてゐるが、やはり往路を想像した作と見るべきである。即ち作者は夫の門出を見送つた後、心は其の後を追つてゐたのであつて、此の歌を詠んだ日は、恰も夫が名張の險道を越える頃であつたのである。旅が多くの危険と苦勞を伴なつてゐた古の事であるから、留守居の妻の心遣ひは今日の人の想像以上である。此の歌が第二句で切れて居り、二句と結句が共に推量の「らむ」で終つてゐるのは、作者の心情をさながらに表現した感がある。古今集卷十八の「風吹けば沖つ白波たつた山夜半にや君がひとり越ゆらむ」(讀人不知)は此の作と相似た心境を歌つたものである。

輕皇子宿于安騎野一時柿本朝臣麻呂作歌

入る入口の羨道を指したのであると云ふのである。以上の諸説を見るに、地勢から云ひ懸けたものと見るのが最も穩かなやうである。「泊瀬」は「長谷」とも記すやうに、現に細長い谿澗を成してゐる土地であるから、隠國又は隠處の意で枕詞としたのであらう。○眞木立つ 訓は考に據つた。流布本にマキタテル、僻案抄にマキノタツと訓んである。「眞木」の「眞」は「眞金」「眞蟲」「眞神」「眞綿」等の「眞」と同じく美稱の接頭語である。而して「眞木」は一般には建築材料として最も勝れた檜を指す。羅漢松を「まき」と云ふが是とは別である。さて「眞木立つ荒山道」などと歌つた場合は、必ずしも檜に限らず杉などをも指したものであらう。遠目には檜と杉は似て見えるから、それ等の林を指して「眞木立つ」と云つたのである。○荒山道を 人氣のない深い山中の道であるものをの意。○石が根 「根」は岩の一部分が土中にしつかと埋まつてゐるのを示すのが原義であるが、此所では單に「岩根」と云ふのと同じであつて、其の「根」は「垣根」「草根」「島根」「羽根」等に於けると同様の接尾語である。集中に「磐金の凝しき山を越えかねて」「三〇一」と用ゐたのも同じである。さて此の句を從來イハガネノと訓んで、次の「楚樹」に懸る修飾語と見たのであるが、新解及び正宗敦夫氏の論文『アララギ』二十五卷七八號所載)にイハガネと四音に訓まれたのが妥當である。祝詞に「磐根木根履みさくみて」(祈年祭)とあるのを参考すべきである。○楚樹押し靡べ 原文の「禁樹」を流布本にフセキと訓み、代匠記はこれに従つて臥木即ち大木の倒れたのを云ふと解き、僻案抄には「禁」を上句に附けてイハネセキと訓み、「樹」をコダチと訓んでゐる。考には「禁」を「楚」の誤字と見て「楚樹」をシモトと訓み、弱き木立の茂きをいふと解き、略解燈・致證・檜燻手・美夫君志・新考・新解等は考の説に従つてゐる。又致證に引いた海北若沖の『和訓類林』には「禁樹」をサヘギと訓んでゐる。思ふに訓義は考

の説が比較的穩當である。「楚」は叢木或は荊の意である。和名抄に「蔓和名之木細枝也」とあり、日本書紀に「茂林」又は「弱木林」をシモトハラと訓んである事などを参考して、「楚樹」をシモトと訓み、灌木の枝の茂みの意に見るのである。要するに猶考究を要する語である。「押し靡べ」は前述の通り押し靡かせての意。○坂島の「朝越え」の枕詞。渡り鳥が未明に山坂を越えて遠くへ飛んで行くといふ意で、「朝越え」に言ひ懸けたのである。○玉かぎの「夕」の枕詞。「玉限」を流布本にタマキハル、管見にカゲロフノ(代匠記精撰本僻案抄同訓)と訓み、又考には「玉蜻」の誤としてカギロヒノと訓んで居る。(略解燈・檜燻手等同説)此の枕詞に就いては、伴信友の「玉蜻考」(『比古婆衣』卷四所收)雅澄の「玉蜻考」(枕詞解附録)木村博士の「玉蜻考補正」(美夫君志別記所載)等に考證が見えて居るが、要するに雅澄の説によつてタマカギルと訓むのが妥當である。從來「玉限」「玉蜻」「珠蜻」と「蜻火」「炎」とを同一に見たのは誤である。即ち雅澄は前者はタマカギル、後者はカギロヒと訓むべきであると云ひ、タマカギルは枕詞であつて「磐垣淵」「鬢まゆか」「夕」「直ただ目」等に懸つてゐるが、カギロヒは名詞であつて「炎かぎの立つ」「蜻火かぎ之燃ゆる荒野」の如く用ゐられ、又枕詞としては「炎かぎ乃春はるにしなければ」のやうに用ゐられて居る事を述べ、なほ「玉蜻」「珠蜻」等をタマカギルと訓むべき證として、卷十一の「玉垣たまかぎ入いほのかに見えて」及び日本靈異記の「多萬たま可岐留かぎはるかに見えて」を擧げて居る。而して其の語義に就いて雅澄は、「玉」は美しく透き徹るものを指す語で、「かぎ」は炫かが意であるから、透き徹つて清く炫く淵の意で「淵」の枕詞とし、又夕陽は澄んで明るく炫くから「夕」にも懸け、又珠玉のほのかに光り炫く意から「鬢まゆか」に懸け、轉じて「直ただ目」などにも懸けるのであると云つて居る。なほ木村博士は玉は石又は磐などの中に在るものであるから、「玉炫かがる磐」と續けたのか、或は玉は水中から出るか

ら「淵」に云ひ懸けたのであらうと云はれて居る。○夕さり來れば「夕されば」と同じ意で夕になるとの意。語義に就いては「一六」の「春さり來れば」を参照。さて此の數句は、皇子の御一行が朝に山坂を越えて、夕に安騎野に到著し給ふことを敘べたのである。○み雪降る「み」は美稱の接頭語。當日雪が降つたのではなく、當時雪の降る頃であつた事を歌つたのである。冬は狩獵の好時節である。○旗薄 薄を云ふ。「はた」は旗の義で、高く抜け出た穂の風に靡く様が旗に似てゐるから添へたのである。僻案抄に此の句を「篠」の枕詞としたのは妥當でない。○篠を押し靡べ「しの」を考に（略解・攷證同説）靡へたるを云ふと解き、此處の二句を薄の靡ひを押し靡かせの意と解いたのは誤である。又古事記傳に「しぬ」「しの」は細い竹を始め、薄や葦等の類の幹を廣く云ふのであつて、此處は薄の幹であると解いたのも穩當でない。是は燈及び新考に旗薄や小竹などを押し靡かせての意と解いたのが妥當である。前に「石が根楚樹押し靡べ」と云つて二つの名詞を並べたのに對照して、「旗薄篠を押し靡べ」と同じ形を以て歌つたのである。「しの」は篠ばかりでなく、薄葦などの類をも總稱する語である。書紀神代卷に「篠小竹也、此云スス奴」と註してある通り、通例「しぬ」と言つたのであるが、此所は下に「ヲがある」ので母音同化によつて「しの」となつたのであらう。○草枕 「旅」の枕詞。（既出）○旅宿りせず 旅宿りをし給ふの意。「せず」の「ず」は敬語の助動詞。○古思ひて 「古昔念而」の訓は流布本にムカシオモヒテ僻案抄にムカシシヌビテとあり、其の他異訓もあるが、略解以後多くイニシヘオモヒテと訓んでゐる。「いにしへ」は往にし方の義である。一句の意味は父君の御獵を遊ばされた當時を追懷遊ばされての意。

【譯】神の御裔である我が皇子は、現つ神であらせられるから、神の振舞をし給ふとて、住み給ふ都の地を後にし、泊瀬の山は眞木の茂り立つてゐる人氣のない山道であるのを、其の山道の岩や生ひ茂つてゐる灌木の叢を押し分けなされて、朝早く山越えをし給うて、夕方になるとあの雪の降る阿騎の廣野に、穂に出た薄や篠を押し靡かせて、其處に旅の野宿をなされる。嘗て父君が獵を催された當時をお偲びになつて。

【評】此の長歌には輕皇子が安騎野に行啓になる途次の光景を中心に敘べてある。一首の中「泊瀬の山は」以下五句と「み雪降る」以下六句とは、共に冬の山地の荒寥たる景が印象的に表現せられてゐる。御一行の艱難もさこそと想像せられる歌である。次に修辭法の上から注意すべきは、此の長歌には全般に互つて枕詞が豊富に用ゐられてゐることである。一首は二十五句から成るが、其の中五音の句は十二句である。然るに枕詞は六句用ゐてあるから、五音句の半數は枕詞に充當せられてゐるのである。對句若しくは序枕詞は、比較的單調平板に流れ易い長歌に、變化曲折の妙味を與へる重要且有效な修辭法である。此の歌は枕詞によつて内容が豊富になつてゐる。

短歌

四六

阿騎の野に

宿る旅人

うち靡き

寐も寝らめやも

古思ふに

阿騎乃野爾

宿 旅人

打 靡

寐毛宿良目八方

古部念 爾

【釋】○短歌 長歌形式の歌を單に「歌」と云ふのに對して、所謂短歌形式の三十一音の歌を「短歌」と云ふのであるが、又反歌は即ち短歌形式であるから、反歌を一にかく稱へたのである。○阿騎の野に 流布本に「阿騎乃爾」とあるが、神田本には「乃」の下に「野」がある。今は神田本に據つた。○宿る旅人 皇子を始め御供の人々を總稱し

たのである。○うち靡き「うち」は語勢を強める接頭語。草木が靡くやうに、手足を延べて打ちくつろいで横たはるのを云ふ。○寐も寝らめやも 本文の「目」は流布本に「自」とあるが、類聚古集や神田本に據つて「目」と改めた。既述の通り古くは寝る事を「寐を寝」と云つた。「い」は寝ることの意の名詞で、「朝寝」「味寝」「安寝」等の用例がある。「ぬ」はその動作を表す。「六」参照。助詞の「や」が活用語の已然形を承けて文を終止した場合には反語になる。此の句はどうして打ちくつろいで寐られようぞの意である。

【譯】阿騎の野に旅寝をする人々は、どうして打ちくつろいで寝られようぞ、昔の事が偲ばれて。

四七

眞草刈る 荒野にはあれど 黄葉の 過ぎにし君が 形見とぞ來し
眞草刈 荒野 者雖 有 (黄葉) 過 去 君之 形見跡曾來師

【釋】○眞草刈る云々「眞草」を流布本にミクサ(代匠記攷證講義等同訓)と訓んでゐるが、類聚古集元曆校本等にはマクサと訓み、僻案抄考以下多く是に従つてゐる。「みくさ」といふ語もあるが、此所はマクサと訓むのがよい。「眞」は美稱の接頭語。後世専ら秣(馬草の義)を指して「まぐさ」と言ふけれども、ここは野草の義である。「眞草刈る」は草を刈り採る所といふ意で、次の「荒野」の修飾語である。「荒野」は人氣のない野の意。○黄葉の 原文には「黄」の字が無いので、流布本に「葉過去君之形見跡曾來師」をハスギユク、キミガカタミノ、アトヨリソコシと訓んであるが、代匠記初稿本に「葉」の上の「黄」が脱したのであるとして今の様に訓み改めた。さて「黄葉の」は「黄葉乃過ぎて去にき」と(二〇七)「黄葉之過ぎにし子ら」と(二七九六)などの如く用ゐられる枕詞である。紅

葉した木の葉が散るやうに此の世を去るといふ意で、此所も「過ぎにし」の枕詞である。○過ぎにし君が 以下二句の訓は代匠記初稿本に據つた。命過ぎ給ひし君のといふ意で、薨じ給うた草壁皇子を指す。最後の「が」は「の」の意の助詞。○形見とぞ來し 「とぞ」はとぞ思ひての意である。「ぞ」は語勢を強める係の助詞であつて、「來し」が其の結である。

【譯】此處は草の生ひ茂つてゐる荒野であつて、わざわざ來る所ではないけれども、おかくれになつた先君の形見の地と思つて參つたのである。

四八

東の 野にかぎろひの 立つ見えて かへり見すれば 月傾きぬ
東 野 炎 立 所見而 反 見爲 者 月西 渡

【釋】○東の 上の三句の訓は流布本にアツマ、ノ、ケフリノ、タ、ルトコロミテとあつたのを、考に右の如く改訓したのである。和名抄の官名に「東市司比牟加之乃」又攝津國の郡名に「東生比牟我」とあるやうに、古くは「東」を「ひむがし」と云つた。○野にかぎろひの「かぎろひ」の「かぎ」は、「かがやく」(耀)「かがよふ」(耀)「かがり」(篝)「かがみ」(鏡)などの「かが」、又「玉かぎる」の「かぎ」、或は「月かけ」(月影)「日かけ」などの「かけ」と同一の語根であつて、「かぎる」は耀く意である。「かぎる」に動作の繼續を表す助動詞「ふ」が添つて「かぎろふ」といふ語を生じ、其の連用形を名詞としたのが即ち「かぎろひ」である。「かぎろひ」は後世「かけるふ」と轉じて専ら陽炎を指す語となつたが、古くは廣く光り耀くものを云つたのである。従つて民家の焚火がぼつと赤く空に映つた雲焼け、或は夜の明

け方に京の空が薄赤く染まるのなどを皆「かぎろひ」と言つた。ここは最後の意である。燈に早朝民家に焼く火がほのかに見えたのを云ふと解いてゐるのはよくない。又攷證・新解等に遊絲(即ち陽炎)の義と見てゐるのも妥當でない。○かへり見すれば 顧みればの意。「かへり見る」の連用形「かへり見」を名詞として、それに動詞の「す」を添へて、サ行變格に活用させたのである。

【譯】早朝目覺めて東の野の果を見ると、天はぼつと赤く染まつて、夜もやがて明けようとする模様であるが、さて頭を廻らして西の空を見ると、月の光も白らぐと、山の端に傾いてゐる。

【評】夜が將に明け始めようとする時の壯觀が、遺憾なく描き出されてゐるばかりでなく、其の雄大なる光景に對して作者が感じて居る氣分までが言外に響いて居るやうで、人麻呂の技倆を十分に發揮した作である。初句二句・四句・結句に適度の間を置いて現れてゐるカ行音も、一首の韻律を明朗ならしめてゐて有效である。此の歌は流布本に「東野炎立 所見而反見爲者月西渡」とあつたのを、契沖が初の二句をハルノノカゲロフタテルと改め、更に眞淵に至つて前記の訓の如く訓んだのである。萬葉學上眞淵が遺した功績の偉大である事は、此の一事でも十分窺はれる。

四女

日並しの 皇子の命の 馬並めて 御獵立たしし 時は來向ふ
日雙斯 皇子 命乃 馬副 而 御獵立 師斯 時者來向

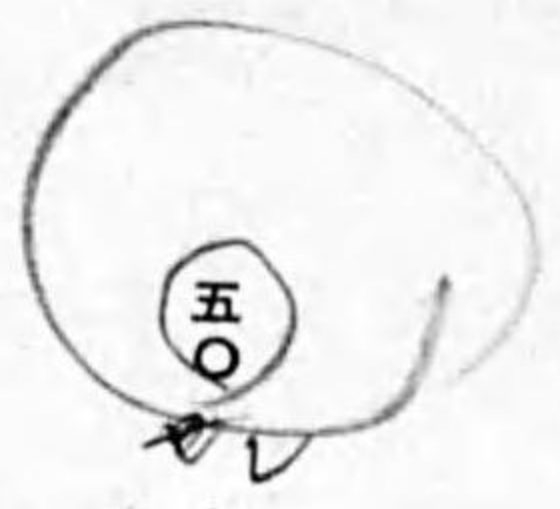
【釋】○日並しの「日雙斯」を流布本にヒナンと訓んである他種々の古訓がある。なほ代匠記初稿本には之をヒナ

メシと訓み、僻案抄にはヒナメシノと訓み、略攷證以下多く之に従つてゐるが、今は掖齋の『古京遺文』にヒナメシノと訓んだのに従つて置く。「日雙斯皇子」は續日本紀に「日並知皇子」、萬葉集卷二(一一〇)に「日並皇子」と記してゐる通り、天皇即ち日の御子に並びて天下を知らしめす皇子の義であつて、皇太子の尊稱と思はれるが、何れの場合も草壁皇子の御稱號として用ゐられてゐる。○御獵立たしし「御獵立たし」は卷六に「御獵爾立之」(一〇〇一)とあるのと同じ意で、助詞の「に」を省いた形である。「立たし」の「し」は敬語の助動詞。最後の「し」は時の助動詞「き」の連體形。御獵に出で立ち給うたといふ意。○時は來向ふ「來向ふ」は來り向ふ即ち來る意味である。「春過ぎて夏來向へば」(四一八〇)の如き用例がある。さて此所の「時」に就いては左の兩説がある。(イ)日並皇子が御獵を催し給うた時節即ち冬と見る説(僻案抄・楡婦手・新考等)と、(ロ)朝獵に出で立ち給うた時刻とする説(燈古義等)とである。此の二説は、日並皇子が嘗て此の野に獵し給うた時を、回顧して歌つたと見る點に於ては、共通して居るのであるから、何れに見ても差支ないが、今は姑く(ロ)の説に従つて、夜が明けてから回顧的に詠んだものと見て置く。

【譯】日並知の皇太子様が從者と共に馬を連れて、御獵に出で立ち給うた、其の思出の多い朝の時刻にいよ／＼なつて來た。

【評】此の一首を朗讀して直ちに氣附く事は、上の三句の聲調が極めて柔く且流麗に響くことである。是はマ・ミ・メなどのマ行音とナノなどのナ行音とが頻繁に用ゐられてゐる爲である。さて右四首の反歌は、略時の經過を追つて次々に歌はれて居るのであつて、一種の連作の形式になつてゐる。

藤原宮之役民作歌



やすみしし 吾が大君 高照らす 日の皇子 荒妙の 藤原が上に 食す國を
八隅 知之 吾 大王 高照 日之皇子 荒妙乃 藤原我宇倍爾 食 國乎
 見し給はむと 宮殿は 高知らさむと 神ながら 思ほすなべに 天地も 依
賣之賜 牟登 都宮者 高所 知武等 神長 柄 所 念奈戸二 天地毛 縁
 りてあれこそ 磐走る 淡海の國の 衣手の 田上山の 眞木割く 檜の嬌手
而有 許曾 磐走 淡海乃國之 衣手能 田上山之 眞木佐苦 檜乃嬌手
 を 物部の 八十宇治川に 玉藻なす 浮べ流せれ 其を取ると 騒ぐ御民も
乎 物乃布能 八十氏 河爾 玉藻成 浮倍流 禮 其乎取 登 散和久御民毛
 家忘れ 身もたな知らず 鴨じもの 水に浮きゐて 吾が作る 日の御門に
家忘 身毛多奈不知 鴨自物 水爾浮 居而 吾作 日之御門爾
 知らぬ國 依り巨勢道より 我が國は 常世にならむ 圖負へる 神龜も 新
不知國 依 巨勢道從 我 國者 常世爾成 牟 圖負 留 神龜毛 新
 代と 泉の河に 持ち越せる 眞木の嬌手を 百足らず 筏に作り 浜すらむ
代登 泉乃河爾 持 越 流 眞木乃都麻手乎 百不 足 五十日大爾作 浜須良牟
 勤はく見れば 神ながらならし
伊蘇波久見 者 神 隨 爾有之

右日本紀曰、朱鳥七年癸巳秋八月、幸藤原宮地。八年甲午春正月、幸藤原宮。

冬十二月庚戌朔乙卯遷居藤原宮。

【釋】○藤原宮 藤原京の位置は、下に講ずる藤原宮御井歌によつて其の大體を知る事が出来るやうに、畝傍耳成香久山の三山の間に在つて、南方遙かに吉野連山を望む位置に設けられたのである。一四三頁更に其の區域を明瞭にするならば、耳成山の南方を東西に通ずる初瀬街道は北京極に當り、神武天皇陵の前を南北に通ずる大道は西京極に當り、東京極は喜田博士の説によれば、推古天皇の御代に設けられたと信ぜられる中道を利用したであらうといふ事である。其の都制は後の平城京平安京などと同じく、支那の長安京の制を模したもので、南北十二條に分たれ、朱雀大路によつて左京右京に分たれたのである。宮城は朱雀大路の北の盡きる所に設けられたのであるが、其の位置に就いては明瞭な遺跡が現存してゐない。既に述べた通り、高市郡鴨公村大字高殿の附近に大宮宮ノ口宮所（南城殿）北條殿などの地名が存してゐるのは、此の地が藤原宮の舊址である事を示すものであると言はれ、土地の人も鴨公小學校の傍にある小高い森を、其の一部であると言つて居る。併し喜田博士は『氏族略記』、『釋日本紀』所引）及び『扶桑略記』の記事に、宮城の位置は高市郡鷺巢阪の地の北とあるのに基づいて、高市郡白樺村（今の畝傍町）大字四分に現存する鷺巢八幡社の附近は、朱雀大路の通過した位置に當るらしいから、宮城は更に其の北方の耳成山との中間に在つたであらうと考證せられた。（『帝都』一三四―一六頁参照）これは喜田博士の説に従ふべきである。さて藤原宮造營に關しては持統天皇紀によれば、四年十月に高市皇子の宮地御視察があり、同十二月に天皇の御臨幸を仰ぎ、六年五月に地鎮祭を行ひ、八年に略造營の工を終へ其の年十二月に愈遷

都せられたのである。其の後元明天皇の和銅元年には、平城京へ遷都の事を仰せ出された。而して平城京都の翌年和銅四年に藤原宮は炎上したのであるから、其の存在は前後十六七年間であつた。○役民作歌 「役民」は古義の一説にエダチノタミと訓み、講義にエニクテルタミと訓んでゐる。何れに訓んでも良い。「役」は字音で字義の通り夫役である。當時は租調の外に勞力を以て奉仕する役の制があつて、是を「えだち」と言つた。「えだち」は動詞「役立つ」の名詞形である。さて此の歌は、題詞には藤原宮の造營に召された役民が詠んだとあるが、宣長は『玉かつま』に役民の心に擬へて勝れた歌人が詠んだもので、其の作者は誰と知る由はないけれども、歌風から推察すれば人麻呂の作らしく思はれると言つて居る。作者を人麻呂と推定する事は慎まねばならないが、著名な歌人が役民の作に擬して歌つたものと見る説には従ひたい。此の歌は造宮の用材を運ぶ役民の勞苦を詠んだものであるから、豫め其の運搬の道筋を説明して置く。當時大和地方の山林には既に良材が無かつたと見えて、此の造宮の



藤原宮宮引木路圖

材木は近江の田上山から伐採したのである。而して其の木材は、田上山の谿谷を流れてゐる大戸川に浮べて瀬田川に流し、それより宇治川に下し、宇治川が木津川(古名泉川)と合する地點、即ち八幡の附近から方向を轉じて木津川を溯らせ、木津町(昔から材木集散地であつたから木津の名を生じたのである)の邊で陸に引き揚げて、奈良山を越えて佐保に運び、佐保川を利用して藤原京に運んだのである。

而して此の歌は宇治川と木津川の合流する所にあつて、役民が流れ下つた木材を木津川へ溯らせようとしてゐる勞苦を詠んである。『玉かつま』卷十三に、此の歌の運搬の道筋を考へて、宇治川から泉川に持ち運び、其處で筏に組んで難波の海に出し、紀川を溯つて巨勢路から藤原に運搬したもののやうに見て居り、又近時彌富破摩雄氏も同様の説を唱へて居られる(『萬葉集續攷』二五〇—九頁参照)が、是は到底首肯し難い説である。

○やすみしし 「大君」に懸る枕詞。(既出)○高照らす 「日」に懸る枕詞。(既出)○日の皇子 ここでは天皇を申す。○荒妙の 「藤原」の「藤」に懸る枕詞。祝詞に「和妙荒妙」とある如く「荒妙」は「和妙」に對する語で、織地の荒い布の總稱である。「妙」は「白妙」の條に述べた通り織物の總稱である。藤葛の纖維で織り上げた布は荒いから、「荒妙の」を「藤」に言ひ懸けたのである。○藤原が上に 「藤原」は下に講ずる藤原宮御井歌に「藤井が原」とあるのが原の名で、それを略して「藤原」と呼んだのである。「うへ」は「河の上」「野の上」の「上」と同じで、その邊の義である。○食す國を 「食す」は既に述べた如く、物を身に入れる意から轉じて、「聞こしめす」「知らしめす」などと同義を表す。「食す國」は天皇が治め給ふ國の義である。○見し給はむと 「見す」は前に述べた通り、「見る」に敬意を表す助動詞が附いたもので、御覽になるの意が原義であるが、轉じて國情を知り給ふ意即ち治め給ふ意にも用ゐられる。「知らしめす」「聞こしめす」「聞こし食す」などは、二語を重ね用ゐて一層鄭重に言つたのである。○宮殿は 原文の「都宮」を流布本にミヤコ、僻案抄にオホミヤ(燈古義新訓等同訓)と訓んであるが、考の訓ミアラカ(略解・攷證・檜婦手・美夫君志講義等同訓)に従ふべきである。祝詞に「御殿」と記し、古語拾遺に「正殿」と記して、何れもアラカと訓んでゐるのを參考すべきである。考に「みあらか」は御在所の義であると解いて居る。即

ち「み」は美稱の接頭語、「か」は「ありか」(在處)「すみか」(住處)「かくれが」(隠處)の「か」と同じく處の義である。アリのリが、ア・カの母音に同化されてラとなつたのである。此の語はもと住居を表す古語であるが、それが一般に用ゐられなくなつて、専ら神又は天皇の宮にのみ用ゐられるやうになつた。ここでは宮殿を指す。さて「食す國を云々」と「宮殿は云々」とは二句對句である。○高知らさむと「高知らす」は前に説明した「高知る」に、敬語の助動詞「す」を添へた形である。○神ながら 神としての意。(既出)○思ほすなべに「思ほす」は「思ふ」に敬語の助動詞「す」が附いた形。「なべに」は「並べに」の義の副詞で、活用語の連體形を承けて上に敍べた事と下に敍べる事とが同時に行はれることを表す。従つてと共ににつれてするままになどの意である。講義に此の二句を解いて、天皇が思しめすと同時に直ちにその事が實現せられるといふ意である、と述べて居られる通りである。「なべに」は單に「なべ」とも云ふ。それらの用例を二三擧げるならば、「秋風の寒く吹く奈倍吾が宿の淺茅がもとに蟋蟀鳴くも」(二一五八)「黄葉を散らす時雨の降る苗爾夜さへぞ寒き一人し寝れば」(二三三七)「日晚の鳴くなる共に秋の風吹く」(二三三一)等がある。さて此の句は下の「天地も依りてあれこそ」以下の句を歌ふ爲の前提となつてゐる。○天地も 天つ神も國つ神もの意。「も」は下に役民の事を歌つてゐるので、それに對して用ゐた助動詞である。天地地祇を單に「天地」と言つた例は「天地を敷き乞ひ禱み」(三二四二)等幾らもある。○依りてあれこそ「天地も依りて云々」は「三八」の條で説明した通り、天地の神々も天皇に靡き寄つて居られればこそといふ意で、以下それを更に詳かに歌つてゐる。「あれこそ」は後世の語法では「あればこそ」と云ふべき所であるが、當時の語法では「ば」を用ゐずして、已然形の儘で順接條件の接續句となつたのである。「二三」の「古昔も然なれこそ」參照。

なほ「こそ」に對する結は下の「浮べ流せれ」である。古義に此の「こそ」の結を一首の最後の「神ながらならし」であると見たのは誤であつて、新考に神のわざは材木を天然の力で流し下す所までで終つてゐて、それ以後は人力を待つのであるから「浮べ流せれ」で結となつてゐる、と解いてゐるのが穩當である。○磐走る 訓は流布本に據つたのであるが、考にはイハハシノと訓んでゐる。「淡海」の枕詞。(既出)○衣手の「田上」の枕詞。「衣手」は衣の手即ち袖である。冠辭考に「衣手の長き」の意で「田上」のタナガに言ひ懸けたものか、又は「衣手の手長」の意で懸けたのであらうと解き、古義にタナガ(長)の「長」に懸ると解いてゐるが、何れも穩當でない。「衣手の手」と類似の音を重ねて、「田上山」の枕詞としたのであらう。なほ此の枕詞を「名木河」や「常陸國」に懸けた用例もある。○田上山 近江國栗太郡上田上下田上二村の山で、瀬田川の支流なる大戸川の流域一帯の山をいふ。前掲地後世濫伐の結果一面禿山となり、水晶を産する程の状態となつたが、當時は森林地帯で良材を産したのである。大戸川も今は水が涸れてゐるが、昔は水量も多く、舟や筏を通ずる便があつたのである。○眞木割く「檜」の枕詞。「眞木」は既に述べた通り良材の義で、主として檜材を指す。「さく」は拆き割る意であるといふのが、代匠記を始め諸註の解釋である。而してこれが「檜」の枕詞となる意義上の關係に就いては種々の説があるが詳かでない。僻案抄には「ひ」を双の義の古語であるとし、講義には古事記の「氷目矢」の「ひ」は割れ目の義であるから、眞木を割く時先づ割れ目を作るのに因つて、これを同音の「ひ」(檜)に言ひ懸けたのであると解釋されてゐる。「ひめ」は「ひび」(鞭割目)「ひま」(隙)「はむ」(填食)などと關係のある語で、割れ目の意であるから、講義の説は傾聴すべきものやうである。○檜の端手を 冠辭考に檜の庵木造りにした材を云ふので「つま」は角爪の義であると解釋して居

る。即ち「つま」は稜の義であり、「て」は材料の義である。○物部の「八十宇治川」の「やそうち」に懸る枕詞。「ものふ」は物の部の義で、元來は文武百官を指す語であつたが、後世武を尊重するやうになつてから、専ら武臣を指すに至つた。而して物部は氏々に分れて氏の數が多いから「八十」「八十氏」「八十作の緒」等に懸ける枕詞としたのであるが、時には直ちに「氏」に冠した例もある。冠辭考に「ものふ」は武人の意で、武人は世に限なく多いので、八十稜威人の義を以て「八十氏」に懸けたと解いてゐるのは妥當でない。○八十宇治川「八十氏」のウヂといふ音から「宇治川」を導き出したのである。此の場合「八十」は宇治川を言ひ起す爲に置いたのであるから、「物部の八十」は一面に於て「宇治川」を言ひ起す爲の序となつて居る。宇治川は瀬田川の下流で、桂川と合流して淀川となるまでを云ふ。山城國宇治郡を流れてゐるので此の名がある。○玉藻なす 美しい藻のやうにの意。「なす」は體言若しくは用言の終止形を承けて、何々の如くといふ意の副詞的修飾語を造る接尾語であつて、枕詞に多く用ゐられてゐる。「鶉なす」「鏡なす」「五月蠅なす」等は枕詞に於ける用例である。其他「海月那洲漂へる時」(古事記)「水沫奈須脆き命」(九〇二)「さ野榛の衣に著く成眼に著く我が背」(一九)等の用例がある。此の句を「浮べ流せれ」の枕詞と見る説と、材木が川を流れる様を譬へた修飾語と見る説と兩説がある。今は枕詞と見る説に従ふ。○浮べ流せれ 上の「依りてあれこそ」に對する結であつて、此處で一段落となつてゐる。考略解古義に此の句を浮べ流せればの意であつて、下に接續する句と見てゐるのは妥當でない。なほ天地の神々のなすわざは、ここで終つてゐるのであつて、以下は役民のわざを歌つたのである。○其を取ると それを取らむとしての意。「そ」は平安朝以後の「それ」に當る古い代名詞であつて、其の事其の物の意を表す。即ち水の力で流れ下つた材木

を受け取らうといふ意。さて此の動作は宇治川と泉川(今の木津川)とが合流する所としてゐるのである。

○騒ぐ御民も 「騒ぐ」はここでは音聲に關する意味ではなく、いそしみ立ち働く事を云ふ。卷三に「皇子の御門の五月蠅なす騒ぐ舍人は云々」(四七八)とある場合と同じ意である。「御民」は臣民を、「大御寶」(大御田族の義か)といふ類で、天皇の御民の意。「も」は前の「天地も」の「も」に照應させたのである。○家忘れ 家をも顧みずの意。

○身もたな知らず 本文の「不知」を古義註疏新解にシラニと訓んでゐるが、シラズと訓む方がよい。我が身の事も打ち忘れての意。「たな」に就いて從來明確な説明を與へた學者が無い。僻案抄に「多奈は發語辭。多奈不知はただしらすといふにおなじ」と云ひ、新考に「タナは副詞にてタシカニなどいふ意とおぼゆ」と解いてあるがなほ詳かでない。今集中の用例を見ると「身もたな知らず」に對する肯定に、「身を田名知りて」(一八〇七)「事は棚知れ」(三二七九)等がある。又是と同じ「たな」であらうと思はれるものに、「棚霧らひ」(一六四二)「棚曇り」(三三三〇)などがある。此等を見渡すと、「たな」は全くといふが如き意を添へる副詞的接頭語であらうと思はれる。○鴨じもの 「浮き」の枕詞。此の「じもの」は集中に、「犬じもの」「鶉じもの」「馬じもの」「男じもの」「雪じもの」等と用ゐられてゐる。「じもの」の意義に就いては諸説があつて、代匠記には「と云ふものの如く」の意と云ひ、冠辭考には「なるもの」若しくは「と云ふもの」の意と云ひ、『倭訓栞』には「其のさまに」の意と解き、『歷朝詔詞解』には「それがやうに」の意であると解いてゐる。其他間宮永好の『大雞隨筆』には、「しも」と「の」は共に意味を強める助詞であると見て居り、古義にはただ軽く添へた語で、「鴨じもの」は鴨のといふ意であると云つて居る。次に其の語原に就いては、本居大平は「狀之」の音の轉訛したものと云つて居るが、其他には見るべき説が現れてゐないや

うである。是に就いて山田孝雄博士は最も傾聴すべき解釋を發表されて居るから、ここに其の概要を掲げる。「鴨じもの」「鹿じもの」等は、「鴨じ」「鹿じ」と「もの」との合成語であつて、「鴨じ」「鹿じ」は「鴨」「鹿」などに接尾辭の「じ」を添へた語である。此の「じ」は如しの意を添へる接尾辭で、名詞に附いて之を形容詞の資格に轉ずる作用がある。而して此の「じ」が附いて出來た用言の活用は、未然形・連用形が「じく」、連體形が「じき」となるのであるが、已然形の用例は無い。萬葉に見える「時じく」「我じく」、宣命に見える「家じく」「母じき」は何れも此の接尾辭が附いて出來た語である。「鴨じもの」「鹿じもの」は、此の接尾辭の附いて生じた用言の語幹から直ちに名詞の「もの」に續いた語で、「鴨じもの」は鴨のさましたる物の意で、「水に浮きゐて」を形容する語であると云ふのである。(『日本文法論』七〇二頁『萬葉集講義』卷第一、二二二頁参照)右の説に據れば「じもの」は「じ」といふもの、如く、の義となるのであつて、「鹿自物い匍ひ伏しつ」(一九九)「伊奴時母能道に臥してや」(八八六)「馬自物繩取り附け」(一〇一九)の如き「じもの」は其の意味を表して居る。併し時には其のもの、又はなるもの、の意を表す場合があり、又單に意味を強める爲に用ゐたやうな場合もある。例へば古義に引用してゐる例の、「白雪仕物往きかよひつ」(二六一)「あぢきなく男士物や戀ひつつ居らむ」(二五八〇)「我皇太上天皇大前、恐古士物進退匍匐廻保理」(宣命)等の如き「じもの」は、嚴格な意味を表してゐないやうである。○水に浮きゐて 流れ下る材木を取る爲に、水中に飛び入つて立ち働いてゐる様を歌つたのである。此の句は以下の九句を隔てて、「泉の河に」に續くのであつて、其の中間の九句は「泉の河」の序である。○吾が作る 役民どもが御造營申し上げるの意。此の「吾が作る」から、すぐ下の「日の御門に知らぬ國依り」まではまた「巨勢」の序である。○日の御門に 日神の御子なる天皇の

坐します宮殿の意。「みかど」は元來門の敬稱で宮門のことであるが、轉じて皇居の意となり、再轉じて皇居に坐します天皇の敬稱ともなるのである。此處は皇居である。○知らぬ國云々 「知らぬ國」は異國の意。見知らぬ外國までも、聖徳に靡き奉つて慕ひ來るといふ意を以て「より來」を導き、轉じて「巨勢」に言ひ懸けて序としたのである。なほ此の句を僻案抄・考略解燈等に「知らぬ國より」と續けて七音句とし、次の句を五音としてゐるのは穩當でない。今は攷證古義等の句切法に従つた。即ち此の三句の序は、「吾が作る……新代」といふ九句の序の中のまた序であつて、御稜威が遠く外國にまで及ぶ聖代を壽いだのである。○依り巨勢道より 此の句を佐佐木博士の『萬葉漫筆』には、ヨリコセチユと六音に訓む方がよからうと述べて居られる。(新訓・新解同訓)「巨勢」は和名抄に「高市郡巨勢」とある地であるが、和名抄に謂ふ高市郡は、今の南葛城郡の東部にまで及んでゐたのである。「巨勢」は今の南葛城郡葛村大字古瀬附近一帯の地を指したのであつて、其の古瀬は和歌山線吉野口驛のある地である。巨勢の地は大和から紀伊に通ずる道に當つてゐるので、「巨勢道」とも云ふ。○常世にならむ 「常世」とこしへの國の義で神仙國をいふ。我が國は常住不變の國となるであらうといふ意。○圖負へる神龜も 甲に瑞祥の圖の現れた不思議な龜をいふ。代匠記に『尙書』の「天廼錫禹洪範九疇」の孔安國の註に、「天與禹洛出書、神龜負文而出、列於背有數、至于九。禹遂因而第之、以成九類。」とあるのを引き、又『史記』の「神龜者天下之寶也」や、天智天皇紀の「九年六月、邑中獲龜、背書申字、上黃下玄、長六寸許。」などを擧げて居る。因みに「靈龜」「神龜」「寶龜」等の年號は、此の瑞祥の文を負うた龜の出たのに基づいて、制定せられたのであると傳へられてゐる。ここも此等の故事に據つたもので、單に祝賀の詞に過ぎないであらうが、或は新考に「日本紀には見え

ざれど、持統天皇の御治世の初に、大和の巨勢路より神龜の出でしことあるなり。」と言はれたやうに、事實に基づいてゐるのかも知れない。○新代と「新代」を流布本にアタラヨ(代匠記考略解燈攷證等同訓)と訓んでゐるが、古義所引の久老の説に據つてアラタヨと訓むのが正しい。「あたら」といふ語は、形容詞としては「阿陀羅斯枳葦名部の匠」(日本紀)「安多良思吉君が老ゆらく惜しも」(三四七)、又副詞としては「安多良盛りを過してむとか」(四三二八)などと用ゐられてゐて、何れも惜しの意である。而して新しの場合には、「年月は安良多安良多に相見れど」(四二九九)「春花の盛りも安良多之けむ」(四一〇六)「阿良多之き年の初に」(琴歌譜)などの假名書によつてアラタシと言つた事が判る。此のアラタシ(新)を後世アタラシと言ふに至つたのは、アラタシのラ・タの子音轉換によるのであつて、是は平安朝時代以後の事である。「新代」を代匠記に新しく珍らしい代の義であつて、現代を讃へたのであると解き、又考には新しい京で御治世になる意と解いてゐる。併し講義に面目を一新した治世の義で、上の神龜の事などに聯關して考へれば、支那の「天命維新」などいふ思想によつたものであらう、と述べられたのは適切な解釋であらう。○泉の河に 此の句は「神龜も新代と出づ」のイヅに、「泉」のイヅを懸けたのである。泉川は一名「山背川」とも云つた。今の木津川である。「泉川」は山城國相樂郡の水泉郷(今の瓶原村・加茂町・木津町附近に當る)といふ川沿ひの郷名から取つた名である。上流は伊賀國に發源する伊賀川で、名張川を合せて西に流れ、木津町に至つて北流し、八幡町あたりで宇治川及び桂川と合流して淀川となつてゐる。此の歌にあつては、其の淀川に落ち合ふ川尻の處で、材木を取り集めて木津川の方へ溯らせてゐるのである。○持ち越せる 宇治川を流し下して、泉川の川尻まで運搬して來た意。○眞木の嬌手を 前の「檜の嬌手を」の句が餘り遙かに隔たつて

來たので、此所に再びそれを多少語を換へて繰返したのである。○百足らず 百に足らぬ五十といふ意によつて「五十」「八十」等に懸る枕詞である。ここは「筏」の「い」に懸けたのである。古語では五十を「い」と言ひ、「五十鈴」「五十槻」など「日」を「か」と言つたので、「筏」を「五十日太」と記したのである。平安朝時代に子供の生後五十日目に行つた祝を「いかのもちひ」と云ふのも、五十日餅の義である。○沂すらむ 筏に組んだ材木を泉川に溯らすこと。「らむ」は連體形であつて、此の句の下に御民のといふ語を補つて見るとよく通じる。○勤はく見れば 「いそふ」に就いては美夫君志に、皇極天皇紀に「争陳」をイソヒテマウスと訓み、卷十三(三二二五)の「諍榜」(原文には「淨榜」とある)を流布本にイソヒコギと訓み、伊呂波字類抄に「争」「競」「角」の三字を何れもイソフと訓んでゐるとあるのによつて、其の大體の意義を知る事が出来る。思ふに「いそふ」の「いそ」は「いさかふ」(諍)「いさむ」(勇)「いさを」(功)「いさをし」(勳)等の「いさ」や、「いそぐ」(急)「いそし」(勤)「いそしむ」(勤)等の「いそ」と同一語根と考へられる。其の「いそ」に活用語尾の「ふ」を添へて、ハ行四段活用動詞に轉じたのが「いそふ」であらう。従つて「いそふ」は勤め勵む競む勤めるの意と思はれる。次に「いそはく」の「く」は、四段活用及びラ行變格活用の動詞の未然形に接続して、其の動詞に體言の資格を興へて、何々することの意味を表す語尾である。なほ一二段活用及びサ行變格カ行變格活用の動詞には、上一段活用を除く外は總て終止形に「らく」が附くのである。四段又はラ行變格活用動詞に「く」の附いた例には、「夜渡る月の隠良久惜しも」(一六九)「奈氣可久を止めもかねて」(四〇〇八)「直に逢はず阿良久も多く」(八〇九)等がある。又上下二段活用動詞に「らく」の接続した例には、「古布良久は富士の高嶺の鳴澤の如」(三三五八)「里人の吾に都具良久」(三九七三)等があり、サ行變格カ行變格活用動詞に附い

た例には、「かもかも爲良久君故にこそ」(一五七六)「夜のほども出でつつ來良久度まねくなれば」(七五五)、上一段活用動詞に附いた例には、「音のみに聞きし吾妹を見良久しよしも」(一六六〇)等がある。今日も用ゐる「曰く」「思はく」「願はく」なども此の語形の名残である。(此の「く」或は「らく」は動詞ばかりでなく、形容詞や助動詞の「ず」「む」「き」「けむ」「けり」「の」「ぬ」「り」「しむ」等にも附くのであるが、此等に就いては後に其の條に説明する。)さて「勤はく見れば」は勤め勵むのを見ればといふ意。此の句から考へると、此の歌の作者は木津川が淀川に合流する地點に在つて詠んだものと思はれる。○神ながらならし 此の句を流布本にカミノマナラシと訓んであるが、略解の訓に據つてカムナガラナラシと訓むのが妥當である。「神ながら」は前に述べた。「ならし」は「に」あるらしが原形で、ニアが約まつてナとなり、ラ行音のルラが二つ重なるので、それが約まつてラとなつたのである。「あるらし」が「あらし」となり、「けるらし」が「けらし」となるのと同類である。天皇が神にましますからであらうといふ意。更にながらの意味を概括して解くならば、如何にも天皇は神であらせられるから、斯くまで天地の神々も靡き奉つてお仕へ申し、萬民も勞を忘れていそしむのである、と云つて歌ひ収めたのである。

【譯】日の御子にまします我が大君が、藤原の地に於て天下をお治めになり、其所に宮殿を御造營遊ばさうと、神として思し召すがままに、天地の神々までも大君に御心を寄せて居られるから、近江國の田上山から伐り出した荒造りの檜の材木を宇治川に浮べると、神々の力で材木は流れ下る。其の材木を泉川の方へ溯らせる爲に、取り拾はうとして立ち働く御民も、また自分の家を忘れ身も顧みずして、水の中に這入つて——人民どもが御造營申上げてゐる宮城に、異國までも御稜威を慕つて寄り來ると云ふ、其の言葉に通ふ巨勢路から、我が國は常世國と

なるであらうと云ふ瑞兆の、芽出たい文字を負うた珍らしい不思議な龜が、此の新しい御代を壽ぎ奉つて出る、其の出るといふ言葉に通ふ——泉の川に、宇治川から持ち運んで來た材木を筏に組んで、溯らせようとする民の勤勞のさまを見ると、げに天皇は神でいらせられればこそと思ふことである。

【評】藤原宮造營の工事が大規模であつた事、又工事に多くの日數を費した事などは、日本書紀に據つて知ることが出来るが、又一方に於て法隆寺その他飛鳥時代の古い寺院建築を見ると、柱と云ひ扉と云ひ組み物といひ、此等に今日内地に到底求め得られぬ大きな檜の材木が用ゐてある。これから推すと、藤原宮の建築の壯大なものであつた事が容易に推察せられる。其の堂々たる建築に用ゐられた巨大な材木が、如何にして運ばれたかといふ事は、此の歌によつて始めて知ることが出来る。作者の名は素より判らないが、皇室に對する敬虔の念の深い所、又複雑な技巧を用ゐながら、一氣呵成に歌ひ去つてゐる所などは、人麻呂の歌風に類似してゐる。

從三明日香宮一遷ニ居藤原宮一之後、志貴皇子御作歌

五二 采女の袖吹きかへす 明日香風 都を遠み いたづらに吹く
採女乃 袖吹 反 明日香風 京都乎遠見 無 用 爾布久

【釋】○明日香宮 飛鳥淨御原宮である。淨御原宮に就いては既に(二二)に説明した。此の宮の位置は喜田博士の説によれば、飛鳥村大字雷と飛鳥との中間であらうと云ふことであるから、新京の藤原宮からは東南僅かに十數町を隔てた地である。○志貴皇子 日本書紀には「施基皇子」「磯城皇子」「志紀皇子」とも記してある。天智天皇の

第七皇子で光仁天皇の御父である。續日本紀には靈龜二年に薨せられたとあるが、萬葉集卷二(二二三〇)の題詞には靈龜元年に薨じ給うたとある。追稱して「春日宮御宇天皇」と申し、後世「田原天皇」とも申した。○采女の「姝女」を流布本にタヲヤメ(代匠記註疏美夫君志同訓)、僻案抄にミヤヒメと訓み、考に「姝女」の誤としてタヲヤメ(略解・燈檜燭手同説)と訓み、古義に「媛女」と改めてヲトメ又はタワヤメと訓んでゐる。これは原のままを元曆校本の朱書の訓に従つてウネメと訓むのが妥當である。直好もウネメと訓んでゐる。(拮解所引)原文の「姝女」は、「采女」の「女」を「采」の篇に加へたもので、「采女」と書いたのと同じである。「姝」の字は集中の他の卷にも見え、又古事記及び正倉院文書等にも見えて居る。「采女」はもと支那の漢代の女官の稱で、『後漢書』皇后紀論に「置美人・宮人・采女三等」とあるから、下級の女官の職名であるが、それを我が國の「うねめ」に當てたのである。孝徳天皇紀の大化二年正月の條に、「凡采女者貢郡少領以上姉妹及子女形容端正者」とあるから、地方官の子女の中から選擇したのである。采女は主として御饌の給仕などに奉仕したのであつて、宮内省の采女司に屬してゐた。「うねめ」は「うなむめ」の義で、垂髪うなむの處女といふ意である。尤も「うねめ」は又「うねべ」とも言ふので、「うなげべ」の義で領巾うなげを頂に掛けるから此の名があるとする説もある。○袖吹きかへす「吹きかへす」と現在形に歌つてあるが、事實は眼前に袖を吹きかへしてゐるのではなく、古義の説の通り袖を吹きかへせし意である。即ち嘗て明日香に都が在つた時、采女の袖を翻した風の意である。是を采女の袖を吹きかへすべき風の意とする小琴美夫君志講義・全釋等の説は穩かでない。○明日香風 飛鳥の地を吹く風の意。「佐保風」「伊香保風」など云ふのと同じ云ひ方である。○都を遠み 都が遠いのでの意。「遠み」の「み」は既に述べた通り、形容詞の語幹に附い

て副詞的修飾語を作る語尾である。藤原宮は飛鳥に續いた地であるから、實際は近距離なのである。

【譯】これまで都であつた時に、采女の美しい袖を吹き翻した飛鳥の風も、今は都が遠くへ遷されたので空しく吹いてゐる。いかにも物淋しくなつたことだ。

【評】「采女の袖吹きかへす」の句によつて、明日香京の榮えてゐた當時の、華やかであつた都大路の光景が回想せられ、「都を遠みいたづらに吹く」の句によつて、舊都のさびれ行く状態をしみじみ歎き給うた心持が、巧みに表現せられてゐる。

藤原宮御井歌

五

やすみしし わご大君 高照らす 日の皇子 荒妙の 藤井が原に 大御門
八隅 知之 和期大王 高照 日之皇子 龜妙乃 藤井我原爾 大御門

始め給ひて 壇安の 堤の上に 在り立たし 見し給へば 大和の 青香具山
始 賜 而 壇安乃 堤 上爾 在 立 之 見之賜 者 日本乃 青香具山

は 日の經の 大御門に 春山と 繁みさび立てり 畝火の 此の瑞山は 日
者 日 經乃 大御門爾 春山跡 之美佐備立有 畝火乃 此 美豆山者 日

の緯の 大御門に 瑞山と 山さび坐す 耳梨の 青菅山は 背面の 大御門
緯能 大御門爾 彌豆山跡 山佐備伊座 耳高之 青菅山者 背友乃 大御門

因以東西爲日縱、南北爲日横、山陽曰影面、山陰曰背面」とあるが、此の歌では高橋氏文(『本朝月令』所引)に「日堅日横陰面背面乃諸國人乎割移天」とあるのと同じで、此の四つのもつて四方を呼んだのである。即ち「日の経」は東西を云ふのであるが、それを東とし、「日の緯」は南北を云ふのであるが、それを西に當てたのである。因みに『周禮』の天官の疏には「南北之道謂之經、東西之道謂之緯」とあつて、支那では經は南北、緯は東西を云ふのであるから、我が國の場合とは逆である。○大御門に 此所では皇居の御門をいふ。○春山と 原文に「春山路」とあるが、「路」は古葉略類聚鈔に據つて「跡」に改めた。「春山」は「青山」といふのと同じ意である。春は樹木が青々と茂る時であるからである。小琴に「青山」の誤であると云つてゐるが、(攷證古義・檜婦手新考等同説)上に「青香具山」とあるから重複を避けたのであらう。○繁みさび立てり 「しみ」は「しみに」といふ副詞の「に」を省いた形である。「しみに」と關係のあるらしい副詞に「しじに」があつて、何れも繁く或は一杯にの意を表す。なほ「しみに」と同じ意の副詞に「しみみに」がある。「しみみに」は「しみしみに」の約音であるといふのが從來の説であるが、講義には終の「み」は接尾語であると述べて居られる。さて「しみに」の用例には「梅の花み山と之美爾有りともや」(三九〇二)、又「しみみに」の用例には「藤原の都志彌美爾人はしも満ちてあれども」(三三三四)「秋萩は枝も思美三荷花咲きにけり」(二二三四)などがある。次に「繁みさび」の「さび」は、前に「神さびせず」の條に説明した通り接尾語である。「繁みさぶ」はここでは茂り榮える意である。香具山が春山として青々と茂り榮えて立つてゐるといふ意。○此の瑞山は「瑞」は「瑞枝」「瑞籬」「瑞穂の國」等の「瑞」と同じで、若々しく榮える意。「瑞山」は木が繁茂して榮えてゐる山の事で、此所は畝火山を讀へたのである。○日の緯の 流布本の訓にヒノヌキノと

あるが、考にヒノヨコノと改めたのがよい。○山さび坐す 山が神々しく物古りた姿をしてゐるのを云ふ。山を神と崇めて「坐す」といふ敬語を用ゐたのである。○耳梨の 流布本に「耳高之」とあるが、考に「高」を「爲」の誤字



香具山 藤原宮址を望む

と見て耳成山の事と見てゐるのに従ふべきである。○青菅山 流布本の訓にアラスケヤマとあるが、考にアラスガヤマと訓んだのがよい。「菅」は借字であつて、意味は小琴及び燈に青く清々しい山と解いたのが妥當である。考略攷證新考講義等に青い山菅の茂つた山の義と解いてゐるのは穩かでない。「すが」は形容詞「すがすがし」の語根である。○背面の 「そとも」はソツオモの約まつた語であつて、背つ面即ち背面の義である。日の當らぬ方即ち北を背面とするのである。○宜しなべ 考の別記に、「よろし」は「よろづ」「よろこび」「よろひ」等と系統關係のある語で、物の具備したのを云ふと解いてゐる。「なべ」に就いては前に「思ほすなべに」の條で説明したが、此所は軽く添へた語と見るべきである。此の語の用例には「宜奈倍吾が背の君が負ひ來にし此の勢の山を妹とは呼ばじ」(二八六)「神さびて見れば貴く宜名倍見れば清けし」(一〇〇五)等がある。さて一句は丁度よい工合にといふ意。○名ぐはし 「くはし」は後世専ら精細の意に用ゐるが、古くは精妙美妙の意に用ゐた。「くはし女」(麗女)「くはし戈」(細戈)、或は「うらぐはし」(心細)「かぐはし」(香細)「まぐはし」(目細)「はなぐはし」(花細)等の「くはし」は是で、一般に置しいも

の又は精妙なるものを賞めていふ語である。「名々はし」は好い名の附いてゐるといふ意で、地名に冠する枕詞となる。ここは「吉野」の枕詞。○影面の「かげとも」はカゲツオモの約まつた語で、「かげ」即ち日影の當る方の意であつて、前の「背面」に對して南をいふ。「背面」「影面」の關係は「山陰」「山陽」の關係と同じである。○大御門ゆ 流布本にオホミカトニと訓んであるが、原文の「從」は考にユと訓んだのがよい。「ゆ」はよりの意。○雲居はぞ遠くありける 「雲居」は雲の居る處即ち空の事。彼方の空に遠く聳えてゐるといふ意。新考に「此芳野山をも前出三山の如くほめたたふるかと思へば、思ひもかけすクモキニゾトホクアリケルといへるが、平凡ならでめでたきなり。」と評してある。○高知るや 「天」の枕詞。空を領する天といふ意で冠したのである。「や」は感動の助詞で語調を整へる爲に添へてある。次の「天知るや」或は「天なるや」「おしてるや」などの「や」も此と同じ用法である。○天知るや 「日」の枕詞。語義は「高知るや」と同じ。○天の御蔭日の御影の 此の二句は祝詞の「皇御孫命の瑞の御舎を仕へ奉りて、天の御蔭日の御蔭と隠りまして、四方の國を安國と平らけく知ろしめすが故に云々」(祈年祭)の詞に基づいてゐる。而して此の祝詞の場合は、天日を避け雨露を防ぐ爲の御蔭といふ意味で、宮殿のことを言つたのである。併し此の歌の右の二句の解釋に就いては種々の説がある。(イ)代匠記精撰本には、高き天の影日の影も映る水であるから、其の天の久しい通り又日のあらん限り、永久に澄み行く眞清水といふ意であると解き、(ロ)考には天のお蔭日のお蔭によつて湧き出る清水の意であると解き、(ハ)略解放證・古義・註疏等には天の影日の影の映る清水であると解き、(ニ)燈には天の覆ふその蔭、日の照らし給ふその蔭の義で、天つ神及び天照大御神たちの御いつくしみの下に居る意であると解き、(ホ)古義所引の一説及び美夫君志久米幹文の説

(『大雅隨筆』に見ゆ)講義・新解等には、天の御蔭日の御蔭と隠ります瑞の御舎の水といふ意に見て、雨や日を覆ひ奉る爲の宮殿の水といふ意味であると解いてゐる。此等の諸説を見渡すに、句の續き柄から見ても又引用句の原義から見ても、最後の説が最も穩當である。即ち此の二句は右に掲げた祝詞式の句と同じ意味に用ゐてある。○水こそは常にあらめ 「常爾有米」を元曆校本神田本等にツネニアルラメ(攷證同訓)、考の一説にトコシヘナラメ(美夫君志新考講義同訓)、燈にツネニアラメ(新訓新解・全釋同訓)、檜燻手にトハニアリナメと訓んでゐる。「常」一字ではツネトコシヘトキハ孰れにも訓み得るが、姑く流布本の訓に従つて一句をトキハニアラメと訓んで置く。「水」は藤原宮の水即ち藤井の水をいふ。「ときは」は常磐の義で永久不變の意に用ゐる。集中に「巖なす常盤に坐せ貴き吾が君」(九八八)「大君は等吉波に坐さむ」(四〇六四)等の用例がある。御井の水は永久に涸れる事がないであらうの意である。○御井の清水 「清水」を流布本にキヨミヅ、僻案抄にシミヅハと訓んであるが、考に一句の音調を整へる爲「眞」を加へてマシミヅと訓んで以來、此の訓が一般に行はれた。併し是は新訓講義等の訓のシミヅに従ふべきである。なほ講義によれば「しみづ」は沁み出づる水の義で、自然に湧き出る清水をいふのであらうと云ふ。

【譯】日の御子にまします我が大君は、藤井が原に宮殿を新たに御造營になつて、近くに在る埴安池の堤の上に屢出で立ち給うて四方を御覽になると、青々とした香具山は東の御門に面して、春山として茂り榮えて立つて居る。畝火の此の若々しく榮えてゐる山は、西の御門に向つて瑞々しい山として立つて居る。又耳梨の青くすがすがしい山は、北面の御門に向つて丁度よい工合に神々しい姿で立つて居る。名も好い吉野の山は、南の御門から遙か

遠くの空に見える。かくの如く結構な藤原の地に、天の覆ひ日の覆ひとしてお營みになつてゐる、莊嚴なる宮殿の御井の水は、永久に涸れることなく湧き出るであらう、此の御井の清水は。

【評】御井に就いての敘述は最後の七句に過ぎない。而も其の七句の初の四句は、枕詞を有する二句對であつて、御井に關する眞の敘述は結尾の僅か二三句に過ぎないと謂つてもよい。誠に思ひ切つて大膽な結構を試みたものである。而して右の七句より前の二十四句には、藤原宮の四圍の雄大な眺望と、四方の御門を守護してゐるかの如く見える山々の雄姿とを、稀に見る大規模な對句を以て堂々と敍べてゐるのである。即ち此の歌の大部分は藤原宮の地を頌め讚へた壽詞である。此の長い前提があるので、御井の敘述は簡潔に結ばれ得るのであつて、其の結構の爲に一首が如何にも莊嚴雄大に感じられる。先に講じた役民作歌と共に、此の歌も當代の名手の作であらうと思はれるが、何れも作者の名は傳はつてゐない。守部は人麻呂の作に相違ないと云つてゐるが、さやうに斷定すべき根據は無い。なほ此の作は表面は御井の歌であるけれども、其の實は御井を頌め讚へて新京を壽ぎ奉つたものである。

短歌

五三

藤原の 大宮仕へ 生れ繼ぐや 處女が伴は 乏しきろかも
藤原之 大宮都加倍 安禮衛 哉 處女之友者 乏 吉呂賀聞

右歌作者未詳

【釋】大宮仕へ ここでは名詞として用ゐてある。○生れ繼ぐや 「安禮衛哉」を流布本にアレセムヤ、神田本にアレツゲヤと訓んでゐる。代匠記にはアレツゲヤと訓み(考略解同訓)、僻案抄の一説には「哉」を「武」の誤であらうと云つてアレツガムと訓み(小琴燈・致證・檜婦手・新考同説)、又美夫君志には「哉」は疑を表す助辭であるからムと訓むべきであるとして、原の儘をアレツガムと訓み(講義・全釋同説)、古義には「哉」が古葉略類聚鈔に「也」とある事を擧げて、アレツクヤと訓んでゐる。今は新訓のアレツグヤに従つた。「あれつく」を玉勝間・致證・古義に仕へ奉りいつき奉る意と解き、又檜婦手に在り衝く意としたのは共に誤である。「あれ」は前に「生れましし」の條に解いた通り、生れ出る意の動詞「ある」の連用形である。「あれつく」は子々孫々生れ繼ぐ意であつて、「神代より生れ來れば人さには國には満ちて」(四八五)「八千年に安禮衛しつ」(一〇五三)などの用例がある。「や」は例の語調を整へる助詞。此の句は「處女が伴」の修飾語となつてゐる。即ち此の二句の意は、次々に生れ來つて宮仕へを繼ぐ處女達といふので、其の裏に御代の長久を壽ぎ奉る意味を含めてある。○處女が伴は 此所に「處女」といふのは采女のことであらう。「が」は「の」の意の助詞。「伴」はともがらのこと。多くの少女達はの意。○乏しきろかも 此の句は流布本に「之吉呂賀聞」とある。代匠記僻案抄・考致證等は此の本文の儘を種々に訓み、何れも頻りに召す意と解いたのであるが、田中道麿が此の句を「乏吉呂賀聞」の誤として(『玉勝間』所引)以來諸註是に従つてゐる。「召」は元曆校本・類聚古集等に「呂」となつてゐるから、「之」も「乏」の誤と見て此の説に従ふべきである。「ともし」は元來乏しの意であるが、轉じて羨ましの意に用ゐられる。その用例は「吾妹子に吾が戀ひ行けば乏雲並び居るかも妹と背の山」(二二一〇)「鶯の聲を聞くらむ君は登母之毛」(三九七一)などに見られる。集中には「ともし」

を上二段に活く動詞として「音のみも名のみも聞きて登母之夫流がね」(四〇〇〇)と用いた例もある。次に「ろかも」の「ろ」は音調を整へる爲の助詞で、通例形容詞の連體形か又は體言の下に附く。形容詞に添へた例には、「畏き呂介茂」(仁徳紀)「尊き呂可憐」(八一三)「悲しき呂可聞」(四七八)等がある。名詞に添へた例は東歌に幾らも見えてゐる。「かも」は前に説明した通り詠歎を表す助詞。

【譯】藤原の宮の宮仕へを、子々孫々次々に生れ繼いで奉仕する官女達の身の上は、實に羨ましいことである。

【評】代匠記や考に、此の歌は右の長歌の反歌ではなからうと云つてゐるけれども、燈に述べてゐる通り、やはり反歌と見るべきである。右の長歌では宮殿の周圍を敘し、御井を奉讚したのであるが、此の反歌では其の宮殿に代々奉仕する女官の身の上を羨んで、其の裏に宮殿の長久を祝福する意を籠めたのである。なほ「處女が伴」は采女を指すものと思はれるが、其の采女に就いて講義に、大寶令後宮職員令の水司の條に「采女六人」令集解に「水司膳司二司、必以采女」などとあるのを引いて、此の歌に歌はれた處女は御井に仕へ奉る采女であらう、と述べて居られるのは傾聴すべき説である。

⑨ ⑩ ⑪ ⑫

大寶元年辛丑秋九月、太上天皇幸于紀伊國時歌

五四

巨勢山の列列椿 つらつらに見つつ思ふな 巨勢の春野を

巨勢山乃 列列椿 都良都良爾 見乍 思 奈 許湍乃春野乎
右一首坂門人足

【釋】○大寶元年 文武天皇の五年に大寶と改元せられた。これまでの歌は「何宮御宇天皇代」といふやうに、天皇の御代を以て大きく時代を示したのであるが、これ以下卷末に至るまでは更に年號をも記してある。○太上天皇幸于紀伊國 「太上天皇」は天皇の御讓位後の尊稱であつて、ここは持統天皇である。續日本紀文武天皇の大寶元年の條に、「九月丁亥天皇幸紀伊國。冬十月丁未車駕至武漏温泉。戊午車駕自紀伊至。」と記し、又卷九(一六六七)以下の歌の題詞に「大寶元年辛丑冬十月、太上天皇大行天皇幸紀伊國時歌云々」とあるから、此の行幸は持統天皇と文武天皇と御同列であつた事が知られる。

○巨勢山 巨勢の地は前に「巨勢道」の條で説明した。巨勢山は今の南葛城郡葛村にある山で、吉野口驛の直ぐ西に當つてゐる。なほ巨勢野といふのは、同村戸毛から水尾あたりまで續いてゐる細長い山峽の平地を指すのである。○列列椿 諸註に植列ねられた椿、或は枝葉の連なり繁つた椿の義と解いてゐるが、間宮永好の『大雞隨筆』には椿の葉に光艶のあるのを「つらつら」と云つたものであらうと云つてゐる。(新考講義同説)是は植列ねられた椿とする説に従ふべきである。此の歌の椿が一本でない事は歌の趣から想像される。さて此の歌の第二句までは、次の「つらつら」に懸る序である。○つらつらに つくづくと或はよくよくの義。是と同じ意味の副詞に「つばらに」「つばらかに」などがある。「つらつら」は恐らく此等の語と關係があるものと思はれる。○見つつ思ふな 本文の「思奈」を流布本にオモフナ(代匠記考略解檜婦手美夫君志講義等同訓)、攷證にオモハナ、古義にシヌバナ(新考同訓)と訓んでゐる。而して古義には題詞に「秋九月」とあるのを誤と見て、一首を春の歌として、眼前に椿の咲き匂ふ巨勢野を見て詠んだものと見てゐる。然し上に掲げた續日本紀の記事及び卷九の題詞によつ

て、此の歌の題詞に誤の無い事は明白であるから、此の一首は秋の歌とすべきは勿論である。さて此の句の訓は流布本の訓ミツツオモフナが妥當である。「思ふな」の「な」は禁止の助詞ではなく、檜婦手美夫君志等に云つてゐる通り、語調を整へ且詠歎の意を表して文を終止する助詞である。此の「な」は文の終に來て活用語の終止形を承けるのが特色であつて、意味は「よ」と同じである。用例を擧げるならば、「明日よりは吾は孤悲牟奈(戀ひむな)」（一七七八）「花は知良牟奈珠と見るまで」（三九一三）「淺小竹原腰煩む空は行かず足よ由久那」（古事記）などの「な」がそれである。さて此の句はこれが椿の咲く春であつたら、どんなに美しい眺であらうと、春景色が偲ばれるといふ意である。○坂門人足 此の歌の作者であるが、傳は詳かでない。

【譯】ああよい景色だ。これが椿の咲き満ちる春であつたら、此の巨勢野はどんなに美しい眺であらう。其の春の美しさが想像せられることである。

【評】此の歌に於ては、作者は巨勢山の椿を見てゐるのか、或は巨勢野を山から眺めてゐるのかが明瞭でない。又眼前の秋の景色を歌はずして、春の景色を想像して歌つた點も多少不自然である。要するに表現上かなりの無理があるので十分に解し難い。是に較べると、下に或本歌として掲げてゐる「河の上の列列椿つらつらに見れども飽かず巨勢の春野は」(此の歌は下に講ずる)は、春の椿の咲き亂れた巨勢野の實景を歌つたものであつて、遙かに表現が巧みで無理がなく、序の用ゐ方も有効である。或本歌の作者は春日藏首老である。以上の二首は作者は異なるが、用語及び修辭の上から見ると、無關係の作とは考へられない。此の點に就いて山田孝雄博士や窪田空穂氏は、人足が春日老の歌を記憶してゐて、それを本にして行幸の折にかうした模倣の歌を詠んだのであらうと言は

れてゐる。傾聽すべき説である。なほ以上の二首の歌で注目すべき點は、「つらつら椿つらつらに見つつ」とツラ及びツの音を頻りに反復して、流麗且輕快な聲調の美を醸し出した技巧的手法である。

五

あさもよし 紀人乏しも 亦打山 行き來と見らむ 紀人乏しも
 朝 毛吉 木人乏 母 亦打山 行 來跡見良武 樹人友師母
 右一首調首淡海

【釋】あさもよし「紀人」の「き」の音に懸る枕詞。代匠記に麻裳よき紀の國の意で、紀の國からよい麻衣を産したので此の枕詞を生じたと解いてゐる。又久老の説(『信濃漫録』に據る)や宮地春樹の説(古義所引)に、「麻裳よ」といつて「著る」の意を呼び起して「き」に懸けたのであると解釋してゐる。後の説に従ふべきである。「あさも」は麻裳の義であり、「よし」は「あをによし」「玉藻よし」等の「よし」と同じ助詞である。○紀人乏しも「紀人」は「難波人」「吉備人」の類で、紀の國の人をいふ。「乏し」は前に述べた通り羨ましの意。「も」は詠歎の助詞。○亦打山亦打山をの意。「亦打山」はまた「眞土山」「信土山」とも記されてゐる。大和から紀伊へ越える街道にある峠で、鐵道と歌山線の大和二見驛より西一里足らずの所にある。澤瀉久孝氏の説に「紀の川の支流で今紀和國境になつてゐる落合川をへだてて、待乳と眞土と二つの地名が残つてゐる。これは住吉が後世住吉と墨の江と二つの地名になつたのと同じであらう。今待乳峠といふは大和の方であるが、昔のまつち山は今の紀伊の眞土で、今の街道よりも少し西の山をさしたのかと思はれる」とある。(『國語國文の研究』第十五號參照)○行き來と見らむ 彼方

へ行くとして又此方へ來るとの意。「と」は「とて」の意。「見らむ」の「らむ」は一般に動詞及び助動詞の終止形を承ける助動詞であるが、「見る」及びラ行變格活用の動詞や助動詞に附く場合には、前者は連用形に、後者は連體形に接続するのである。「見らむ」は後には「見るらん」と言ふやうになつた。「見らむ」の假名書の例には「妹等を美良牟人の乏しさ」(八六三)「人皆の美良武松浦の玉島を」(八六二)などがある。なほ此等の「らむ」は總て其の連體形である。○調首淡海 此の歌は前歌と同じ時の作であつて、調淡海は其の作者である。調淡海は日本書紀天武天皇元年六月の條に始めて見え、續日本紀には和銅二年正月に從五位下、同六年四月に從五位上、養老七年正月に正五位上に陞敍せられた事が載つて居る。此等によつて作者の時代並に身分を知ることが出来る。

【譯】紀の國の人は羨ましい。このやうな眺望の佳い眞土山を、行き來する度毎に眺めることの出来る紀の國の人は實に羨ましい。

【評】眞土山の眺を直接に歌はずして間接に歌つたのが、此の歌の面白い所である。初めに「紀人乏しも」と端的に歌つて、第三句以下に其の紀人に自己の心を移して羨み、最後にまた「紀人乏しも」を繰返して歌つた句法も巧みである。五七五七七の五句から成る短歌に於て、第二句を其の儘第五句に繰返して詠む事は、五七七五七七の六句から成る旋頭歌に於て、第三句を第六句に於て反復する句法と共に、古體の修辭法の一である。第二句を第五句に繰返した短歌は、記紀歌謡や萬葉初期の歌の中に屢見受けるのである。例へば

ぬば玉の 甲斐の黒駒 鞍著せば 命死なまし 甲斐の黒駒 (雄略天皇紀)
大和方に 行くは誰が夫 隠水の 下よ延へつつ 行くは誰が夫 (仁德天皇紀)

枚方ゆ 笛吹き上る 近江のや 毛野の若子い 笛吹き上る (續體天皇紀)
嬢子ども 嬢子さびすも 唐玉を 手本に纏きて 嬢子さびすも (本朝月令)
等は上代歌謡中の例であるが、集中の例には(九五・一〇七・二一六・八二八・六六三・三八四・三五四五)等がある。

或本歌

五六 河の上の 列列椿 つらつらに 見れども飽かず 巨勢の春野は
河 上乃 列列椿 都良都良爾 雖 見 安可受 巨勢能春野者

右一首春日藏首老

【釋】○或本歌 或別本に載つてゐる歌といふ意で、萬葉集の編者が加へた註である。多くは同一の歌の異傳を示した場合にかう書いてある。此の歌は前に講じた二首と同時に詠まれたのではなく、前の坂門人足の作歌の類歌であるから、別人の作ではあるがここに別本から採つて附載したのである。○河の上の「河上乃」といふ句は前に講じた(二二)にも用ゐてある。此の句に就いても兩訓が行はれてゐて、流布本を始め楡嶋手古義註疏講義等にはカハカミノと訓んでゐるが、今は略解の訓カハノヘノに従つて置く。川のほとりの意であつて、此の川は巨勢の地を南から北へ流れてゐる能登瀬川(曾我川の上流)を指したものであらう。○春日藏首老 「藏首」は「倉人」「藏人」「蔵人」とも記されて居る。「藏首」は姓、「老」は名である。春日老は人麻呂とほほ同時代の人で、もと僧であつて辨基(辨紀とも記す)といつたが、大寶元年三月に還俗した。(續日本紀參看)懷風藻に詩一篇が載つてゐて、

「從五位下常陸介春日藏老一絶年五十二」とある。此等によつて其の閏歴の一端を知る事が出来る。彼の作歌は此の集の卷一三九に數首づつ見えてゐる。

【譯】川のほとりに立ち並んでゐる美しい椿は、つくづく眺めても見飽きがしない。さても巨勢野の春景色は美しい眺である。

【評】前に講じた「巨勢山の」の歌や此の歌に據つて見ると、當時巨勢の地には、山にも野にも一面に椿の木が植ゑてあつた事が知られる。椿は其の實から椿油が採れるので、古くから諸處に栽培したもののやうである。大和の海石榴市などには、路傍に椿の並木を作つてゐたのである。

二年壬寅太上天皇幸于參河國一時歌

五七

引馬野に 入り亂り 衣にほはせ 旅のしるしに
引馬野爾 仁保布榛原 入 亂 衣爾保波勢 多鼻能 知 師爾

右一首長忌寸奥麻呂

【釋】〇二年 大寶二年。〇太上天皇幸于參河國。「太上天皇」は持統天皇である。續日本紀文武天皇の大寶二年冬十月の條を見ると、太上天皇が參河國に行幸せられ、十一月に尾張美濃・伊勢・伊賀の諸國を経て還幸し給うた事が記してある。〇引馬野 引馬野は遠江國濱松市の北にある曳馬村附近一帯の原野であると從來考へられてゐたが、題詞に「幸于參河國一時歌」とあるので疑問とされてゐた。然るに最近久松潜一博士は三河國寶飯郡御津村

附近の古地圖(延享三年成)の寫に基づいて、引馬野は御馬村(今の寶飯郡御津村字御馬)の引馬神社附近であらうとの説を發表せられた。而して御馬村附近は持統天皇の行幸の地で、附近の宮路山は行在所のあつた所であると傳へられてゐる事、及び引馬野は御馬村である事を證する記録なども存してゐる事を證として引いて居られる。〔文學〕第二卷第十一號參照)此の説は信すべきものやうに思ふ。御馬村は豊橋市の西北、御油驛の南、渥美灣に臨む地である。〇にほふ榛原 「にほふ」は前に述べた通り、色の照り映えること。「榛原」はハギハラと訓んで、萩の原と見るのが穩當である。今も此の附近には萩が諸處にあり、又御油町の北に萩村といふ地名があるから、此の邊は古くは萩が多かつたものと思はれる。「榛」に就いては流布本を始め僻案抄考美夫君志講義にはハギと訓み、代匠記略解燈放證古義新考新解等にはハリと訓んでゐる。その何たるかに就いては、萩とする説とハシノ木とする説とがあつて紛らはしいから別項で詳しく説明する。〇入り亂り 「入亂」を拾穂抄にイリミダレ、(代匠記僻案抄放證同訓)考にイリミダリ(略解檜幡手燈新考新訓講義同訓)と訓んでゐる。集中には「亂る」が下二段に活用した事を示す假名書の例もあるが、一方平安朝時代に用例の多い「みだり心地」「みだり言」「みだり足」「みだりがはし」等の「みだり」は、嘗て四段に活用した名残を示して居る。上古に於て四段に活用した動詞で、後世下二段活用に轉じた語の例は幾らもある。例へば「青山に日が迦久良ば」(古事記)「いかに和可む」(八二六)「磯に布理」(四三二八)「涙多利」(四四〇八)「和須良むと」(四三四四)等の「隠る」「分く」「觸る」「垂る」「忘る」は、何れも四段活用の動詞として用ゐられてゐる。因つて「亂る」も古くは四段に活用したものであるから、今はイリミダリと訓んで置く。さて「入り亂り」は萩の原に分け入つて、彼方此方歩き廻る意である。〇衣にほはせ

此の「にははせ」も色彩に就いて云ふのであつて、下にも述べる如く「にははす」は萩の花で衣を摺つて色を附けるのを云ふ。○旅のしるしに 旅の記念としての意。○長忌寸奥麻呂 傳は未詳。

○榛と萩に就いて 集中に用ゐられてゐる「榛」の訓には、ハギとハリの二説があり、其の解釋にも各の訓に就いて萩とする説とハンノ木(古名をハリと云ふ)とする説とがあつて、從來説が四つに分れてゐる。是に就いて明確な説明を與へた者がなく、現今に於ても猶未解決の問題として論議せられてゐる。從來の學說の中萩説を唱へた主なるものは、眞淵の『萬葉考別記』弘訓の『眞榛問答』木村博士の『萬葉集美夫君志別記』彌富破摩雄氏の「榛字訓義考」(『萬葉集續攷』所收)などである。又ハンノ木説を主張してゐるものは、久老の『萬葉考』槻乃落葉別記、古事記傳、雅澄の古義附録『品物解』なほ最近の研究では上村六郎氏の「上代染色發達史の研究」(『奈良文化』第十四號至第十七號掲載)、豊田八十代氏の「榛考」(『國學院雜誌』三十八卷五號掲載)、志村健男氏の「榛の説に就て」(同誌三十八卷十號掲載)などであつて、現今ではハンノ木説が有力である。從來の學說に就いては右の諸論文を参照せられたい。次に少しく「榛」に就いて考察した所を述べよう。

萩は集中には「波義」「波疑」などの假名書の他、「芽子」又は「芽」の字を當ててゐる。集中に歌はれた度数は百四十で、花の第一位を占めてゐる。次に「榛」は又「波里」といふ假名書の他「針」を當てた場合もあつて、集中には總て十四度現れてゐる。



はのんは

「榛」の字は支那ではハシバミを指すのであるが、我が國ではハンノ木即ちハリを指してゐる。ハンノ木は樺木科に屬する高さ二三丈に達する落葉喬木で、葉も花も栗のに似て、花は雌雄同株で一二月頃開き、實は杉の實に似てゐる。成長の早い木であるから、伐つて薪とし、又畦道などに植ゑ列ねたものには、横木を架けて稻干に使用してゐる。衣服令や延喜式によつて昔は染色に用ゐた事が知られ、その他日本書紀に「秦摺御衣」、内裏儀式に「榛摺衣」、踐祚大嘗會式に「榛藍摺」等の語が見えてゐる。此等の榛摺は上村氏の研究に據れば、ハンノ木の實の黒灰を用ゐる、摺染の方法によつて染めたものであるといふ。然るに萩

にも「高松の野邊行きしかば芽子の摺れるぞ」(二一〇一)と歌はれてゐる如く萩摺の例があるので、兩者の區別が紛らはしくなる。のみならず「榛」の字を用ゐた歌に此の「引馬野」の歌や、卷三の「いざ兒ども大和へ早く白首の眞野の榛原手折りて行かむ」(二八〇)或は「白首の眞野の榛原行くさ來さ君こそ見らめ眞野の榛原」(二八一)の如く、ハンノ木を詠んだのではなく、萩を歌つたものらしく思はれる作があるので、萬葉の「榛」が果してハンノ木か又は萩かは容易に斷定し難くなるのである。然しながら植物學上の智識を以て此等の歌に臨む時は、凡そ次の四點を標準として萩とハンノ木とを區別し得ると思ふ。即ち(イ)萩は灌木であり、ハンノ木は喬木であること。(ロ)萩は乾燥した砂地に適し、反對にハンノ木は田畑或は水邊の湿地を好む木であること。(ハ)萩の花は周知の如く美觀があるが、ハンノ木の花は暗紫褐色の殺風景な花であること。(ニ)萩の花や葉は直ちに衣に摺ると色が移るが(實用的な染色方法ではないが)、ハンノ木による染色法は其の實の黒灰による摺染であること。

以上の諸點から眺めると、古事記雄略天皇の條に見える「榛」は字義の通りハンノ木である事は、天皇が其の樹上にお登りになつた事によつて明かであり、又之をハリと呼んだ事は、その時の御製に「朕が逃げ登りし荒岳の波理の木の枝」とあるのによつて知れる。又「琴歌譜」に「道の邊の波利と榛としなめくも」とあるハリは、榛と並べ擧げてある點から見てハンノ木と考へられる。然しながら集中に現れてゐる「榛」を悉くハンノ木であると斷定する事は早計である。その理由の第一は、集中の歌では「思ふ子が衣摺らむに匂ひせ鳥の榛原秋立たすとも」(一九六五)の如く、「榛」で衣を摺るといふ事が屢歌はれてゐるが、此等多くは實用的の意味で當時の衣の染色法としての榛摺を歌つたものとは解し難いのである。殊に「五七」の「引馬野」といふ歌の場合の如きは、旅先で旅の記念として衣に染めて歸らうといふのであるから、無論實用的な嚴格な意味での染色法を詠んだのではなく、單なる遊戯的或は情趣的のものである。是は例へば眞珠貝や沖の白浪を家づとに持ち歸りたいと歌つたのと同様で、實現不可能の事でも美的に表現する爲に、萬葉人は屢かやうな事を歌つてゐるから、此所も右のやうに解すべきであらう。歌として斯様な意味での摺染を歌つた作は萩の場合にもあつて、「吾が衣は摺

れるにはあらず高松の野邊行きしかば芽子の摺れるぞ(二二〇)或は「草枕旅行く人も行き觸らばにほひぬべくも咲ける芽子かも(一五三)などがある。此等と「引馬野の」とを比較して見ると、「芽子」は「榛」共に同じもので、それは萩のことと考へられるのである。次に擧げるべき理由は、「引馬野」に「ほふ云々」とあることである。「ほふ」は色彩に云ふ場合は美しい艶麗なものに就いて言ふ語である。従つて「秋づけは萩咲きにはふ(四一五四)の如く、萩の花に就いて「ほふ」と言ふのは當然であるが、ハンノ木は花も實も共に「ほふ」と云ふべき性質のものではないから、「ほふ榛原」や「ほふこせ島の榛原」の「榛原」は萩の原と見なければならぬ。第三に「五七」の歌に「入り亂り」とあり、「二八〇」に「手折りて行かむ」とあるのも、ハンノ木の様な殺風景な喬木の林を背景としては、歌としての美的情景が表れて来ないのである。以上の理由を綜合して見ると、少くも「五七」の歌に歌はれた「榛」はハンノ木ではなく萩と見るのが妥當と考へる。さう見る方が此の歌の眞の生命、即ち美的表現を効果あらしめるものであると思ふ。要するに集中に詠まれた「榛」は、多く萩であると見る方が植物學の見地から見ても自然であり、又萬葉の歌を美的に鑑賞する所以でもある。「榛を萩」に當てて用ゐたのは、美夫君志別記に謂ふ通り、古くりとキとは相通じる音であつたから、「山吹」を「山振」とも記したので同じく、「萩」を「榛」とも記したのであらう。なほ萩を東國方言ではハリと言つた例が卷十四にある。即ち「伊香保ろのそひの波理波良」の如き句が二首(三四一〇)(三四三五)に見えてゐて、一首は摺り附ける意に詠んでゐる。此等のハリはハギの東國訛であるから、「萩」を「榛」と書いた理由は此の點にも見られるやうに思ふ。以上の説明によつて、集中の「榛」は多くはハギと訓んで萩と解するのが正しいことが知れよう。

【譯】引馬野に萩の花が美しく咲きにほうて居る。さあ人々よ野に入り亂れて、衣に萩の花を摺りつけて旅の記念としよう。

【評】衣にはせ旅のしるしに」と云つた即興が頗る優美である。萩の花が廣い野に咲き満ちた繪畫的な背景の中

を、大宮人の右往左往する光景が偲はれて面白い。



何所にか 船泊てすらむ 安禮の崎 漕ぎ廻み行きし 棚無小舟
 何所爾可 船泊 爲良武 安禮乃崎 榜 多味行 之 棚無小舟

右一首高市連黒人

【釋】何所にか「何所」を流布本にイツコと訓んでゐるが、略解にイツクと訓んだのがよい。「何所」に就いては「四三」の語釋に述べた。「か」は疑問の助詞。○船泊てすらむ「船」をフナと云ふのは「船」と「泊て」とが複合した爲、「ふね」の終の母音が變化したのである。斯様な例は「布奈能里」(船乘)「佐加豆岐」(酒杯)「多治可良」(手力)「可奈門」(金門)など幾らもある。「泊て」は動詞「泊つ」の連用形を名詞に用ゐたのであつて、「泊つ」は元「果つ」と同じ語で、港に碇泊するのをいふ。「磯ごと」に海人の釣舟波底にけり我が舟波底む磯の知らなく(三八九二)の如きは、「泊つ」を動詞として用ゐた例である。○安禮の崎 此の地に關しては從來二三の説があつたが、要するに未詳とされてゐた。然し是も久松潜一博士の考證によつて略明かとなつた。即ち三河國寶飯郡御津村附近の古圖に據れば、御馬村の南に崎があつて、(現在は埋立てられてゐる)其の崎を古く安禮乃崎と呼んだ事が種々の文獻に見えるから、此處であらうと推定せられたのである。さて此の句の下には助詞の「の」を補つて解くとよく通じる。○漕ぎ廻み行きし「たむ」は今用ゐる「廻む」に對する上二段活用自動詞であつて、迂曲する意である。「漕ぎ廻む」の外に「崗さきの多未足道を人な通ひそ」(二二六三)「也良の崎多未豆榜き來と」(三八六七)などの用例があ

る。○棚無小舟 「棚」は「ふなだな」(柁)の略稱である。和名抄に「柁本柁 大船旁板也」とある。船柁は「ふなばた」と同じで、和船の側面を形作る板の總稱である。普通數段あつて、最下段の板を「かしき」とも根柁とも言ふ。「かしき」の上にあるのが此所に謂ふ「棚」で、數段ある場合には「中柁」「上柁」等の名によつて呼ばれる。「棚無小舟」とは上柁などの無い根柁のみで舷をなしてゐる、構造の簡単な小舟のことである。(『アララギ』第十四卷第一號所載山田孝雄博士論文參照)○高市連黑人 傳未詳。其の作歌は本集卷一三九十七に合計十八首程收められてゐる。此等に據つて見ると、黑人は人麻呂と略時代を同じうして、持統文武兩朝に仕へた人である事が知られる。其の歌には族に在つて自然を詠んだ作が多く、而も自然描寫に獨得の境地を開いてゐる。

【譯】先程安禮の崎を漕ぎ廻つて行つた、あの船柁の無い小舟は、一體何處の港に泊るのであらうか。

【評】此の歌も參河國への行幸に供奉した時の作である。唯獨り海岸に佇んで小舟の行方を見送つてゐた時、やがて其の小舟が崎の蔭に漕ぎ隠れたので、忽ち旅の道連れを失つたやうな心細い感が起つたのである。一首の素材並に表現法が、極めて枯淡で哀愁に満ちてゐるのは、旅中に在る作者の心境が、自らかうした自然鑑照の上にも反映してゐるのである。

舍人娘子とねりのむすめ從よ駕か作歌

六

丈夫の 得物とつ矢手やた挿さみ 立ち向むひ 射まるかた形かたは 見まるかに清さけし
大夫之 得物とつ矢手やた挿さみ 立 向 射流まるか方波 見 爾清さ潔け之

【釋】○舍人娘子とねりのむすめ從よ駕か作歌 此の歌も前の二首と同じく、參河國への行幸の時舍人娘子が詠んだ歌である。舍人娘子の傳は未詳。「舍人」は氏である。考別記によれば「娘子」はヲトメと訓むべき場合もあるが、此所は「郎女」「娘子」「女郎」等と記したのと同じく、イラツメと訓むべきであるといふ。「娘子」或は「郎女」は「郎子」に對する語である。「いら」に就いて宣長は、「伊呂兄」「伊呂弟」等の「いろ」又「入彦」「入姫」等の「いり」と同義で、親愛の意を以て呼ぶ語であると云ひ、谷川士清は色の義で、年の若い意であると云つてゐる。これは宣長の説の通り、「いろ」と同じく親愛の意を表す語と見るべきであらう。次の「つ」は助詞で「め」は女の意である。「いらつめ」は名門、の女子を呼ぶ稱である。

○丈夫の 拾穂抄、僻案抄、略解古義、新考等にマヌラヲガと訓んでゐるが、今は流布本を始め代匠記、考攷證等にマヌラヲノと訓んでゐるのに従ふ。○得物とつ矢手やた挿さみ 「さつ」は「さち」の轉訛で、記紀の「海幸」「山幸」の「幸」と同じく獲物をいふ。上代人は、漁獵の獲物を山の神海の神からの賜物と考へて之を幸さちと言ひ、其の幸を得る人を「さつ人」、弓矢を「さつ弓」「さつ矢」と呼んだ。「さつ人」以下の語は集中に散見する。此所の「得物矢」はサツヤと訓むのであつて、即ち獵に用ゐる矢である。「手挿み」は手に挟み持つこと。此の一句はさつ矢を手を持つての意。○射るまるか形かたは 初から第四句の「射る」までは「的形」「的」に懸る序である。「的形」は「的形浦」で、伊勢國多氣郡東黒部村(松阪町の東一里半)の濱邊の古名である。【〇九頁 仙覺抄に引いてゐる『伊勢國風土記』逸文に「的形浦者、此浦地形似的、故以爲名也。」とあつて、此の歌の類歌「丈夫のさつ矢手挿み向ひ立ち射るや」的形濱のさやけさ」を景行天皇の御製として載せてゐる。此の邊は榊田川の土砂が流出堆積した爲に後世地形が一變してゐる。

る。○見るに清けし「さやけし」は副詞の「さやか」から出た形容詞で、分明の意を表す。集中に屢用おられてゐる語である。此所では清くさつぱりとした美しさを云ふ。講義に「山水明媚」の「明媚」に當ると解いてある。

【譯】的形の浦は来て見ると、まことに清くさつぱりとした佳い所である。

【評】此の歌のやうに三句以上に互る長い序を置いた短歌は、此の集にかなり多くある。それらの序には單に形式的に置かれたものもあるが、此の作の序のやうに統一した内容があつて、其の意味が表現を助け、且情趣に印象的な深みを加へてゐる歌が多い。此の歌の場合は「的形」といふ地名に基づいてゐるのではあるが、其の内容には丈夫の颯爽たる風姿が表れてゐて、下の「さやけし」といふ語の意味を助け、又武士が矢を手に挿んで的に向ふ心持と、作者が的形の浦の風景を眺め入つてゐる時の心持とが、或點に於て一致してゐるのである。かやうに序と一首の本意とが、内容上完全に融合調和してゐるのが此の歌の生命である。

山上臣憶良在三大唐時、憶日本郷作歌

六五

いざ子ども 早く日本へ 大伴の 御津の濱松 待ち戀ひぬらむ
去來子等 早 日本邊 大伴乃 御津乃濱松 待 戀 奴良武

【釋】○山上臣憶良在三大唐時云々 山上憶良は藤原朝から奈良朝へかけての、萬葉代表歌人の一人である。憶良の傳記に關しては、卷五所收の彼の作歌を講ずる際に稍詳細に述べることにして、此所には唯壯年時代に唐に渡つた事だけを記して置く。續日本紀を見ると、文武天皇の大寶元年正月に粟田朝臣真人を遣唐執節使に、高橋朝

臣笠間を大使に、坂合部宿禰大分を副使に任せられた際の記事に、「無位山於憶良爲少錄」とある。かくて憶良は遣唐少録として一行に加はり、翌二年六月筑紫より出航して入唐したのである。歸朝した年は明確でないが、慶雲元年又は四年であらうと思はれる。此の歌は彼の地から歸航の途に上る際に詠んだものである。「本郷」は故郷の意で、ここでは廣く日本の國を指す。

○いざ子ども 「いざ」は人を誘ひ促す意の感動詞。「子ども」は同行の部下を親しみ呼んだのである。○早く日本へ 流布本の訓にハヤヒノモトへとあるが、類聚古集や京大本の一訓にハヤクヤマトへとあるのが妥當である。僻案抄考以下多くかう訓んでゐる。略解にハヤモヤマトへ、古義にハヤヤマトベニと訓んでゐるのは從ひ難い。本文にある「日本」をヒノモトと訓む例としては、「日本之やまとの國」(三二九)の如きがあるが、此等は何れも「やまとの國」の枕詞として用ゐられてゐる。又「日本」をヤマトと訓んだ例は、神代紀の訓註に「日本、此云耶麻騰」とある。「日本」は(五二)の「日本乃青香具山」の場合の如く、多くは大和といふ一地域を指すのであるが、此所では外國に對して日本國を指してゐる。此の句の「へ」の下には「歸らむ」の如き意味の語があるべき所である。○大伴の 「大伴」は難波地方一帯の汎稱であつて、上田秋成の『冠辭考續紹』の説によれば、昔大伴氏は代々攝河の兩國を所領としたので、「大伴」が此の地一帯の地名となつたのであると云ふ。而して「大伴の」を「御津」に冠したのは、前に「樂浪の志賀」といふ例があつたのと同じく、廣い地名を狭い地名の上に冠したのである。此の句は又轉じては枕詞として「見つ」にも懸ける。下に「大伴の高師の濱」(六六)と續けた例がある。○御津の濱松 「御津」は所謂難波津である。「津」は元來船の碇泊する所即ち港の意であるが、その普通名詞が固定して固有名詞となつた

のである。従つて「御津」又は「三津」といふ地名は諸國にある。難波の御津は『大日本地名辭書』によれば、今大阪市南區島之内に三津寺町の名が存してゐるから、今の長堀や道頓堀の邊が古の御津の濱であらうと云ふことである。「濱松」は濱邊の松である。○待ち戀ひぬらむ 松が一行の歸朝を待ち受ける意ではあるが、其の實は家人が待つてゐる意を歌つてゐるのである。「濱松」と言つて直ちに下に「待ち」と續けて歌つたので、同音の繰返しが快い韻律を成してゐる。

【譯】さあ人々よ、早く日本へ歸らうではないか。大伴の御津の濱松も、定めし我々の歸りを待ちわびてゐる事であらう。

【評】航海術も造船術も極めて幼稚であつた當時に於ては、外國へ渡る困難と危険とは、吾々の想像の及ばない所であつたであらうから、それだけに故郷に在る家人の心痛も甚だしく、外國にゐる者の心遣も大したものであつたに相違ない。大伴の御津は謂はば今の横濱といふ格の處で、外國へ行く船は皆其處で纜を解いたのであつた。入唐使の一行が彼の地にあつて、懐しい大伴の御津の名を耳にした時は、家人と訣別した時の光景などが眼前に浮んで来て、定めし慕郷の念に堪へられなかつた事であらう。さう思つて此の歌を誦むと、憶良や其の周圍の人の其の時懐いた感情が察せられて哀れである。なほ一首の音調は、全體に柔く響くマ行ナ行音が頻繁に現れて居り、又第一第三句にはオの母音、第二第四句にはアの母音が連続してゐるので、自ら詠歎的な聲調をなして居る。

慶雲三年丙午幸于難波宮時、志貴皇子御作歌

葦邊行く 鴨の羽がひに 霜降りて 寒き夕は 大和し思ほゆ
葦邊行 鴨之羽我比爾 霜零 而 寒 暮夕 和 之所 念

【釋】○慶雲三年丙午幸于難波宮。續日本紀の慶雲三年の條に、「九月丙寅行幸難波。冬十月壬午還宮。」とある。「難波宮」は孝徳天皇が大化の新政を行はせられた難波長柄の豊碕宮であらう。此の宮は孝徳天皇が大化元年十二月に遷都せられた處で、支那の長安京に倣つて造營せられた最初の都であつたが、飛鳥の勢力が優勢になつた爲か、約十年の後（齊明天皇の二年）再び元の飛鳥の地に復舊せられた。併しそれ以後も難波の宮は離宮として、歴代此所に行幸のあつた事は、集中の歌によつて知る事が出来る。此の歌も即ち其の一である。「難波宮」即ち長柄豊碕宮の舊址は、『大日本地名辭書』の説によれば、「長柄」は今の大阪市東區上町の地で、豊碕宮の在つた所は上町の上手の玉造町、即ち大阪城の在る邊であらうと云ふ。併し一説には西成郡豊崎村大字本莊（今の北區本庄に當る）の附近であるといふ。○志貴皇子 天智天皇の皇子。（前出）

○葦邊行く 葦の生えてゐるあたりを行くの意。「行く」を泳ぎ歩く意に見る説もあるが、飛んで行く意に見るべきである。○鴨の羽がひ 「羽がひ」は諸註に解いてゐるやうに羽交の義である。「交」は「玉手佐斯迦閉さ寝し夜」の「八〇四」「白妙の羽左之可倍て」の「三六二五」等と用ゐる他動詞「交ふ」に對する自動詞の名詞形である。従つて「羽交」は羽の重なり合つてゐるのを云ふのであるが、此所では鳥の翼の意に用ゐてゐる。○霜降りて 實際霜が翼の上に白く置いたのを御覽になつたのではなく、唯寒いといふ感じから出た詞である。○大和し思ほゆ 原文の「和」は元曆校本・神田本等には「倭」とあるので、ヤマトと訓むべきは明白である。「やまと」を單に「和」と記した

例は記紀にもある。次に「所念」を流布本にソオモフ、僻案抄にシノバルと訓んでゐるが、集中に用ゐられてゐる「所念」又は「所思」は、「於毛保由」「於母保由」などの假名書の例に倣つて一般にオモホユと訓むのである。故郷の大和が偲ばれるといふ意。「し」は「大和」を強く指示する助詞であり、「思ほゆ」は後の語法の「思はる」と同じである。「思はゆ」の「は」がオモの母音に同化せられてオモホユとなつたのである。此の「ゆ」は平安朝以後の「る」と同じ意義を表す受身の助動詞であつて、「え」「え」「ゆ」「ゆれ」と下二段に活用した。これと同じ意義を表す「らゆ」は後の「らる」に當る助動詞であつて、「らえ」「らえ」「らゆ」「らゆれ」と活用した。「ゆ」が四段活用及びナ行ラ行變格活用の動詞の未然形に接続し、「らゆ」が其の他の動詞の未然形の下に附く事も、後の「る」「らる」の用法と同じである。當時「る」「らる」が無かつたのではないが、「ゆ」「らゆ」の方が一般に用ゐられたのである。さて此の助動詞は受身の外に、可能若しくは自然的可能即ち自然の勢を表す場合にも用ゐられる。例へば「か行けば人に厭は延かく行けば人に憎ま延」(八〇四)「想はぬ人の衣に摺ら由な」(二三三八)などの「ゆ」は受身を表してゐるが、「思ほゆ」の場合或は「音のみし泣か由」(八九八)「都の手ぶり忘ら延にけり」(八八〇)「寐の寝ら延ぬに」(三六七八)などの場合は、自然の勢を表してゐる。「ゆ」「らゆ」は平安朝以後には「あらゆる」「いはゆる」などの特殊な語例を残して滅びたのである。

【譯】(旅に出て居るとかく家が戀しいものだが、)此のやうに葦邊を飛んで行く鴨の翼にまで、霜が置いてゐるかと思はれる程寒い夕暮には、ますます大和が懐しく思はれる。

【評】難波江と言へば直ぐに葦を聯想する。當時の難波宮は海に近く、従つて冬枯れした葦のほとりに鴨が群れ遊

んでゐる有様が、手に取るやうに眺められたのである。此の歌は四句までにさうした荒涼たる初冬の夕景色を歌つて来て、結句に至つて字餘りの「大和し思ほゆ」に、深い詠歎を託したのである。優れた作の一である。

長皇子御歌

六五 霰打つ あられ松原 住吉の 弟日娘と 見れど飽かぬかも

霰打 安良禮松原 住吉之 弟日娘與 見禮常不 飽香聞

【釋】○長皇子 日本書紀及び續日本紀によれば、長皇子は天武天皇の第四皇子で、御母は大江皇女である。靈龜元年六月に薨じ給うた。御作は集中に五首ある。此の御歌は前歌と同じく、難波宮行幸の供奉をして彼の地でお詠みになつたものである。○霰打つ 流布本の訓にアラレフル、元曆校本古葉略類聚鈔等の訓にミソレフリとあるが、代匠記初稿本の訓に従つてアラレウツと訓むのが正しい。下の「あられ松原」のアラレに同音を繰返して懸けた枕詞である。「霰打つ」は霰が物を打つやうに降り來る意である。代匠記に此の時霰が降つたのではなく、唯の枕詞であらうと言つてゐるが、燈には此の時實際霰が降つたから、此の枕詞を用ひ給うたのであると言つて居る。燈の説に従ふべきである。難波宮行幸は時恰も霰の降る初冬の季節であつた。○あられ松原 考には日本書紀神功皇后の卷の、「彼方の阿羅羅麻菟松原に渡り行きて」の「あらら松原」は、あらあら立つてゐる松原の事であるから、これも住吉の松原の疎々として立つてゐる様を歌つたものであるとし、「あらあら」を約めて「あらら」と云つたのであるから、原文の「禮」は「羅」の誤であると述べて居る。また檜嶋手別記にはこれを地名として、住吉

から堺に行く間の大和川の岸の松原である事を考證して居る。『攝津志』にも「叢松原、在住吉安立町、林中有豊浦神社」とあるから地名と見るのが穩當である。安立町は今の大阪市住吉區安立町で、住吉から堺へ行く途中にある。○住吉の「住吉」を元曆校本古葉略類聚鈔等にスミヨシと訓んでゐるが、流布本の訓スミノエが正しい。

「住吉」をスミヨシと云つたのは平安朝以後である。『釋日本紀』所引『攝津國風土記』逸文に「所以稱住吉者、昔息長足比賣天皇世、住吉大神現出而、巡行天下、竟可住國時、到於沼名掠之長岡之前、乃謂、斯實可住之國。遂讚稱之云、眞住吉吉國、仍是定神社。今俗略之直稱須美乃敷」とある地名説話によつても、古くはスミノエと言つた事が判る。○弟日娘と 此の「弟日娘」をおとどひの娘即ち兄弟の娘と見る説と、娘子の名と見る説とがある。代匠記考略解楡婦手、攷證等は前説に屬し、僻案抄古義註疏美夫君志講義等は後説に屬する。これは後説に従ふべきである。而して此所の「娘」は代匠記考等の説の通り遊行女婦であらう。「と」の解釋にも二説があつて、一説にはと、共にの意とし、あられ松原を弟日娘と共に見る意とするのであり、他の説ではあられ松原と弟日娘と二つながら見る意に解くのである。代匠記燈楡婦手、攷證全釋等は前説を擧げ、考略解小琴古義講義等には後説を掲げて居る。何々と何々と云ふ意味の場合に、上の「と」を略した例には「天地日月與共に足り行かむ」(二二〇)の如きがある。而して此の歌は弟日娘を傍に侍らせて、松原を眺めながらお詠みになつたものであらうと思はれるから、後説の方が妥當である。

【譯】住吉のあられ松原と弟日娘とは、いつまで見てゐても見飽くといふことがない。

【評】あられ松原と弟日娘とを並べて共に歎美せられてはゐるが、此の場合は弟日娘の美しさを主意とせられたものである。

のである。

大行天皇幸于難波宮時歌

七 大和戀ひ

倭戀

寐の寝らえぬに

心無く

此の渚の崎に

鶴鳴くべしや

寐之不所 宿爾 情無 此 渚 崎爾 多津鳴 倍思設

右一首忍坂部乙麻呂

【釋】○大行天皇 「大行天皇」とは天皇崩御の後未だ御謚號を奉らない間の稱であつて、サキノスメラミコトと訓む。ここでは前後の歌の年代によつて明かである如く、文武天皇を申すのである。考別記の説に、此の歌は文武天皇を未だ大行天皇と申してゐた頃、即ち慶雲四年六月より十一月までの間に、前年行幸のあつた時の歌として私集に傳へられてゐたのを、其のまま載録したのであらうと言つて居る。併し攷證には、文武天皇崩御の後御謚を奉つてから三年後、即ち和銅三年に成つた墓誌銘の中に、なほ「大行天皇」と記された例を擧げて、當時「大行天皇」といふ語を先帝の義に用ゐたのであらうといふ説を掲げてゐる。攷證の説に従ふべきであらう。

○大和戀ひ 故郷の大和を戀しく思つてといふ意。○寐の寝らえぬに 「不所宿」の訓は「伊能禰良要奴」(三六八四)の如き假名書の例に徴して、ネラエヌと訓むのである。「寐を寝」は(六)に説明した如く眠りに就くこと。「らえ」は上に述べた通り、平安朝以後の受身可能の助動詞「らる」に當る「らゆ」の未然形である。此所では自然的可能を表してゐる。即ち此の句は寝ようとしても眠れないのといふ意である。○心無く つれなくと同じで、思

ひやりもなくの意。(既出)○此の渚の崎に 流布本に「此渚崎爾」とあるが、考以下諸註にコノスノサキニと訓んでゐる。新訓には元曆校本・類聚古集等に「此渚崎未爾」とあるのを採用して、コノスサキニと訓み、講義には流布本の本文をコレノスサキニと訓む一説を出して居られる。孰れの訓に従つても差支ないが、姑く考の訓に従つて置く。難波の離宮に程近い濱邊の洲の崎。「此の」は手近にある意を表す。○鶴鳴くべしや 萬葉に於ては今云ふ鶴を總て「たづ」「多津」「多頭」「多豆」等の假名書の例がある」と歌つてゐる。併し當時既に「つる」と云ふ稱呼もあつた事は、「相見鶴鴨」(八一)「袖ぞ振鶴」(二〇七)「零鶴雪も」(三三三〇)の如く、助動詞の「つる」を表すに「鶴」を以てした例が數多あるのに據つて知られる。是は雅澄が『品物解』に述べてゐるやうに、「たづ」は「つる」の別名であつて、歌詞としてのみ用ゐられたのである。「や」は反語の助詞。鳴くべきことかはの意。「一七」に「隠さふべしや」といふ句があつたが、あれと同じ語形である。○忍坂部乙麻呂 傳は詳かでない。

【譯】故郷の大和が戀しく思はれて、寝ようとしても眠れない所へ、思ひやりもなく此の近くの洲の崎に居る鶴が頻りに鳴いて、いよいよ淋しがらせる。一體あんなに鳴くべきものではあるまいに。

【評】夜鳴く鶴の聲は哀愁をそそるものがある。さなきだに旅愁に堪へ難い宵に、其の鶴の鳴き聲を近くに聞きながら、輾轉反側してゐる作者の胸中がしみじみと歌はれてゐる。

七二

玉藻刈る

沖へは漕がじ

敷妙の

枕のあたり

忘れかねつも

玉藻刈

奥敷波不

傍

敷妙之

枕之

邊

忘

可彌津藻

右一首式部卿藤原宇合

【釋】○玉藻刈る 「沖」の枕詞と見るのが代匠記・放證・古義等の説であるが、第三句以下に妻の黒髪を思ひ出して詠んでゐるから、「沖」の修飾句と見る燈の説が妥當である。「玉」は例の美稱の接頭語。○沖へは漕がじ 沖の方へ船を漕ぎ行く事はすまいといふ意。「奥敷波」を燈・古義等にはオキベハと訓んで奥方の義に解いてゐる。集中の用例を見ると「於伎敷より寄せ来る浪」(三七〇九)「わたつみの於積敷を見れば」(三六二七)等のやうに、多くは沖方の意であるが、此の場合は僻案抄・考略解・放證等にオキベハと訓んで、「へ」を方角を示す助詞と見てゐるのに従ふべきであらう。○敷妙の 「妙」は織物の總稱。既出(二八)参照。夜床に敷いて寝るものを敷妙といふので、「枕」に懸けて枕詞としたのである。此の枕詞は夜の「衣」に懸け、轉じては「枕」「袖」「床」等總て夜の具に懸ける。○枕のあたり 原文の「邊」を僻案抄・古義等にホトリと訓んでゐるのは従ひ難い。此の一句は妻の寝姿を思ひ浮べてゐるのであつて、枕邊に玉藻の如く黒髪が靡いてゐる様を言外に含めてある。○忘れかねつも 忘れ得ぬことかなの意。「も」は詠歎の助詞。○藤原宇合 宇合は不比等の三男で式家の祖である。懷風藻に「正三位式部卿藤原宇合六首年三十四」と記し、續日本紀天平九年の條に「八月丙午、參議式部卿兼大宰帥正三位藤原朝臣宇合薨。」とある。懷風藻の年三十四は『尊卑分脈』に年四十四とあるから、假に四十四で薨じたとしても此の歌を詠んだ慶雲三年頃は、未だ十四歳の少年であつた事になる。なほ此の歌は目錄に「作主未詳歌」として、其の下に「式部卿藤原宇合」と註してある。此等の點を合せ考へると、左註に作者を宇合と記してゐるのは甚だ疑はしい。

【譯】海人が藻を刈つてゐる沖の方へは船を漕いで行くまいと思ふ。あの藻を見ると、長い黒髪を打ち靡かせて寝

てゐる妻の枕もとが、ありありと想ひ出されて、いよいよ戀しさに堪へられなくなるから。

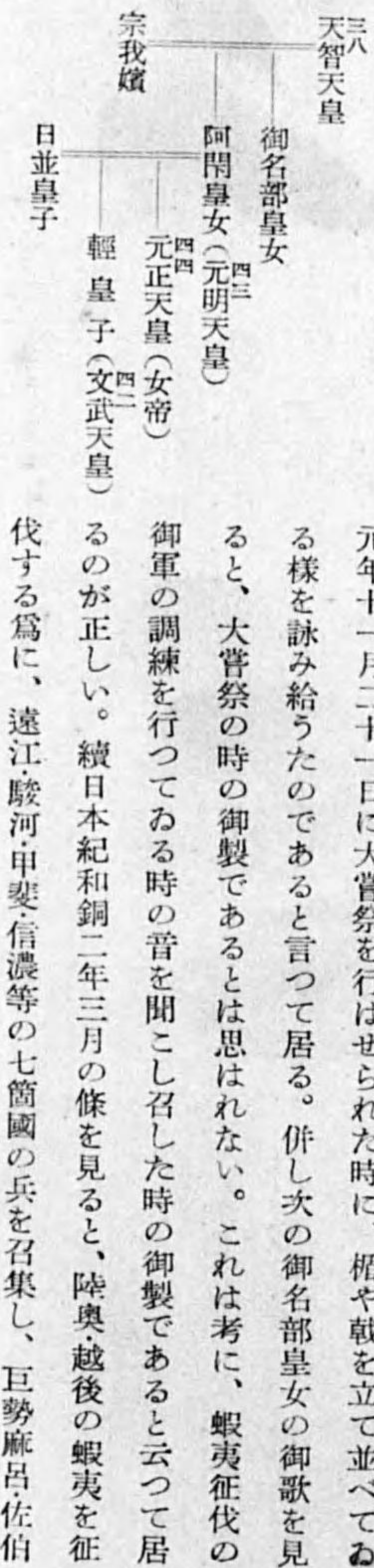
【評】旅愁に悩む者にとつては、見る物聞く物一として慕郷の情をそそらぬものはない。水中に打ち靡く藻が枕にかかる妻の黒髪かと思はれるのを恐れて、沖へは行くまいと歌つたのは、如何にも作者の胸中を切實に表現したものである。前の歌と併せて見て、旅にある者の様々な心境が想像せられて興味がある。

和銅元年戊申天皇御製歌

七六

丈夫の 鞆の音すなり もののふの 大臣 楯立つらしも
大夫之 鞆乃音爲奈利 物部乃 大臣 楯立 良思母

【釋】○和銅元年戊申 元明天皇の元年である。○天皇御製歌 天皇は元明天皇である。元明天皇は文武天皇の御母で、文武天皇の崩御の後に位に即き給うた。當時皇居は未だ藤原宮であつた。さて代匠記に、此の御製は和銅



元年十一月二十一日に大嘗祭を行はせられた時に、楯や戟を立て並べてゐる様を詠み給うたのであると言つて居る。併し次の御名部皇女の御歌を見

ると、大嘗祭の時の御製であるとは思はれない。これは考に、蝦夷征伐の

御軍の訓練を行つてゐる時の音を聞こし召した時の御製であると云つて居

るのが正しい。續日本紀和銅二年三月の條を見ると、陸奥・越後の蝦夷を征

伐する爲に、遠江・駿河・甲斐・信濃等の七箇國の兵を召集し、巨勢麻呂佐伯

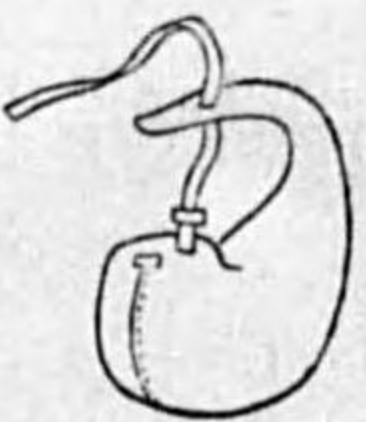
石湯の二人を大將軍とし給うた事が見えて居る。即ち此の御製は其の前年に、兵士が軍の訓練をして居る時、將卒の雄々しい模様を想像し給うて歌はせられた御製である。

○鞆の音すなり 「鞆乃音」を攷證、新考、講義等にトモノトと訓んでゐるが、トモノオトと訓んで字餘り句とする

方が調が力強くなる。鞆は上古に弓を射る際に、左の臂に結び附けた武器である。其の構造

は半月形の皮袋で皮紐があり、中に獸毛を入れたものである。延喜兵庫寮式に鞆一枚の材料

を「熊革一條鞆料長九寸半寸廣五寸牛革一條鞆料長五寸半寸廣二寸云々」と記してあるのによつて、略その製法が知られる。



鞆の用途に就いては兩説がある。和名抄には「在臂避弦具也」と註してあり、『貞丈雜記』などにも弦で腕を打つのを防ぐ具であると云つてゐる。然るに古事記傳や古義には、「とも」は「音物」の約まつた語であつて、弓弦が是に觸れて音を發するのを目的とするのであり、鳴鏑などと同じく其の音で敵を威脅するのであると云つてゐる。

「音すなり」に就いては〔三〕で説明した。○もののふの 既出〔五〇〕参照。ここは武臣を云ふ。○大臣 オホマへ

ツギミと訓む。「大前つ君」の義で、「前つ君」は天皇の御前に侍候する官人を云ふ。従つて「おほまへつきみ」は廣

く高位高官の者を指して云ふのであるが、ここは上に「もののふ」といふ修飾語があるから、武人の高官即ち將

軍のことである。○楯立つらしも 「楯」は敵の弓矢による攻撃を防ぐ爲に、前方に立てる具である所から起つた

稱呼である。上古の楯は延喜木工寮式に「長三尺六寸、廣八寸、厚四分」、又兵庫寮式に大嘗會に用ゐる神楯の材

料として、黒牛皮・掃墨膠・商布糯米・漆面金鐵平釘等を擧げて居り、其の大きに就いては長さ一丈二尺四寸、廣

さは本が四尺四寸五分末が三尺九寸、厚さが二寸と記し、丹波國の楯縫氏が之を造ると記されてゐる。此等によ

つて上古の楯は、表に牛皮を張り鐵を平釘で打ち、裏には商布を糊で貼つて、墨を塗つたものである事が想像出来る。さて一句の意は楯を立て並べて、軍陣を整へてゐるものと見えるといふ意。最後の「も」は詠歎の助詞。
【譯】猛き丈夫共が矢を放つ鞘の音が頻りに聞えて来る。今や將軍は楯を並べ陣容を整へて、軍の訓練を行つてゐることと思はれる。

【評】此の御製はやがて蝦夷征討に出掛ける爲に、將軍の指揮の下に勇壯な演習を行つてゐる様を想像して歌ひ給うたものである。斯様に素材そのものが甚だ勇壯であるから、一首の音調も亦女帝の御製とは思はれぬまでに極めて雄大な響を有つてゐる。これは第一句の末から第四句の初へかけて、母音のオが連続的に頻出してゐるからである。萬葉の歌を通じて見るに、母音のア若しくはオの含まれてゐる音が特に多く用ゐられてゐる。概して母音のアは詠歎的に又は明朗に響き、オは莊重雄大に響く音である。萬葉人が特に好んで履用ゐた「思ほゆるかも」などの句が、莊重雄大な響を有してゐるのも、同様に母音のオが連続してゐる事に基因するのである。

御名部皇女奉和御歌

七七

吾が大君 物な思ほし 皇神の つぎて賜へる 吾無けなくに
吾 大玉 物莫御 念 須賣神乃 嗣 而賜 流 吾莫 勿久爾

【釋】○御名部皇女 天智天皇の皇女で、元明天皇の同母の御姉君である。前掲御系 諸考 ○物な思ほし 此の句を流布本にモノナオモシソ、僻案抄考にモノナオボシソと訓んであるが、小琴にモノナオモホシと訓んだのが妥當である。

「な」は禁止の意を表す助詞であつて、動詞助動詞の上に置く場合と下に置く場合とがある。上に在る場合は次に來る動詞助動詞は連用形で結ぶのが常である。(但しカ行變格サ行變格は未然形を以てする)平安朝以後の語法では、更に下に結の助詞「そ」又は「そね」を添へて、「な……そ(ね)」の中間に述語を挿むのが定まりであるが、古くは必ずしも「そ」或は「そね」を添へずして禁止を表したのである。例へば「あやに那戀ひ支許志」(古事記)「吾なしと奈和備我が背子」(三九九七)「雲勿たな引」(一五六九)の如くである。次に「思ほし」は「思ふ」に敬語の助動詞の「す」を添へた形である。○皇神 スメガミと訓む。「すめ」は「すめみま」「すめらみこと」「すめらみ國」等の「すめ」であつて、又「すめら」とも「すめる」「すべら」とも云ふ。「すめ」は元來「統ぶ」「統む」とも云ふ(の義であつて、天の下を統べ治める意の動詞であるが、轉じて一種の尊稱の接頭語として用ゐられるやうになつた。さてこの「皇神」は祝詞に履用ゐられてゐるのと同じく、皇祖の神を指してゐる。○つぎて賜へる 此の句の解釋に種々の説がある。(イ)考には天つ皇祖神より嗣々に依さし給へる天皇の御位ぞといふ意であつて、第三第四の句は「吾が大君」の上に移して解くべき句法であると云つて居る。(略解同説)(ロ)宣長は之を次の句に續けて、次の句頭の「吾」は「君」の誤であると見て居る。(攷證古義等同説)(ハ)燈には此の句を皇神よりつぎつぎに生れ繼ぐ意であると解き、之を次の句頭の「吾」に懸る句と見て、皇神が嗣ぎて生れしめ給へる吾といふ意であると云つて居る。(ニ)檜嶋手には「吾」を「告」の誤字と見て御言告の義とし、皇祖天照大神が天孫に賜うた彼の神勅がありますから、何事が起つても御代の搖ぐやうな事はありません、と申されたのであると解いて居る。(ホ)新考には「つぎて」は君に次ぎての義であり、「賜へる」は蒼生に賜へるの意であると解いてある。(ヘ)講義には、皇祖の神から

天皇に副次として此の世に生命を賜はつた我の意で、「つぎて」は天皇に次ぐ意であると解かれてゐる。(ト)私解には「つぎて」を新考の説の通り大君に次ぎての意と見て、一句の意を陛下に次いで陛下に賜うて居る此の私と解いてある。思ふに「つぎて賜へる」は燈の説の如く「吾」に懸る修飾句であつて、「つぎて」は皇神より次々に相次いで吾に至るまでの意であり、「賜へる」は講義の説の通り、吾に生を賜へるの意に解くべきであらう。即ち此の二句は、皇祖の神々の御裔として生れ出た吾といふ意を示したものであるが、それを皇神を主體として「つぎて賜へる」と言つたのであつて、御名部皇女が強く御自身の存在を意識し給うたのである。○吾無けなくに「吾莫勿久爾」を流布本にワレナラナクニと訓んであるが、代匠記精撰本にワレナケナクニと訓んだのが正しい。假名書の例に「妹に戀ひつつ術奈家奈久爾」(三七四三)があり、又「事しあらば火にも水にも吾莫七國」(五〇六)「心よも人引かめやも吾莫名國」(二八三五)の如き例もある。さて「無けなくに」は、從來「無からなくに」の「から」が約まつて「け」に轉じた形であると説明せられてゐた。然し「無け」は其の儘で形容詞の古い活用形(即ち未然形)と見るのが妥當である。奈良朝及びそれ以前の語法では、ク活用の形容詞には其の未然形及び已然形に、「く」「け」の外に「け」の「け」といふ形が用ゐられてゐる。例へば「さ並べる鷹は奈家む」(四〇一一)「其が那稽ば誰か繋けむよ」(雄略紀)等の「無け」は未然形であり、「道の等保家は間使も遣るよしも無み」(三九六九)「奈良の大路は行き余家と」(三七二八)等の「遠け」「好け」は已然形である。同様にシク活用の形容詞に於ては、「しく」「しけれ」の外に「しけ」の形が古く用ゐられたのであつて、「古非思家は來ませ我が背子」(三四五五)「逢はずして行かば乎思家む」(三五五八)等の「戀しけ」「惜しけ」は未然形であり、「命遠志家とせむ術もなし」(八〇四)等の「惜しけ」は已然形として用

ゐられてゐる。次に「無けなく」の「なく」は、否定の助動詞「ず」と同じに用ゐられた古い打消の助動詞(ナ行四段に活用する)の未然形「な」に、活用語を體言の資格に轉ずる語尾の「く」が添つた形で、……ぬことの意を表す。(否定の助動詞の「に」に就いては(五)の「たづきを知らに」の條に述べた。又語尾の「く」に就いては(五〇)の「勤はく見れば」の條に説いて置いた。)此の機會に「く」の他の用法に就いて説明して置く。此の「く」は助動詞「む」に附いて「まく」となり、「けむ」に附いて「けまく」となり、「き」に附いて「しく」となり、又完了の助動詞の「ぬ」及び「つ」には「らく」が附いて、それぞれ「ぬらく」「つらく」となる。「なく」以下の用例を擧げて置く。「時を未だしみ來鳴か奈久そこは怨みず然れども……君が聞きつつ告げ奈久も憂し」(四二〇七)「かけ巻もあやにかしこし言は巻もゆゆしきかも」(四七五)「うち歎き語り家末久は」(四一〇六)「玉拾ひ之久常忘らえず」(一一五三)「年の經奴良久」(三七一九)「挿頭し都良久は」(四一三六)の如きである。さて「無けなくに」は無からぬ事なるにの義であつて、二重の否定によつて有るといふ意を強く發表した事になる。それ故此の句の意は、私が無いではありませんのに、又は私がかうして居りますものをなどの意味である。最後の「に」は元來接續助詞であるが、斯様に「く」の下に用ゐられた場合は餘情を表す。「衣借すべき妹もあらず爾」(七五)「我が泣く涙いまだ干なく爾」(七九八)等の「に」も同様である。

【譯】我が大君よ、さやうに御心を惱まし給ふな。皇祖の神の御裔として生を授け給うた此の私が、かうしてお側にお仕へ申して居りますものを。(何事にも身を以てお謹し申しますものを。)

【評】此の皇女の御歌の内容から推し量ると、前の御製はいよいよ大嘗會の時のものでない事が明かである。女帝